

山口県埋蔵文化財センター調査報告 第105集

山 田 遺 跡

2020

公益財団法人山口県ひとづくり財団

山口県埋蔵文化財センター

山口県埋蔵文化財センター調査報告 第105集

やま だ い せき
山 田 遺 跡

2020

公益財団法人山口県ひとづくり財団

山口県埋蔵文化財センター

序

本書は、下関市大字吉見下に所在する山田遺跡の発掘調査の記録をまとめたものです。調査は、一般県道下関川棚線単独道路改良（県道・指定）工事に先立ち、山口県下関土木建築事務所から委託を受けた公益財団法人山口県ひとつづくり財団が実施しました。

今回の調査では、弥生時代の竪穴建物・土坑や中世の掘立柱建物・土坑などを検出し、多数の弥生土器・石器や中世の土器・陶磁器・鍛冶関連遺物などが出土しました。とりわけ、中世集落の土坑や柱穴などから出土した中国製の青花や朝鮮王朝陶器は、響灘沿岸部周辺の中世の様相を解明していく上で貴重な資料になると考えられます。今後、この調査成果を、郷土史や文化財保護に対する理解、教育や文化の振興、学術研究等に広く活用していただければ幸甚です。

最後になりましたが、発掘調査の実施並びに本報告書の作成にあたり、御支援、御協力を賜りました関係各位に対し、衷心より感謝申し上げます。

令和2年3月

公益財団法人 山口県ひとつづくり財団
理事長 原 田 尚

例 言

- 1 本書は2019年度に実施した山田遺跡（下関市大字吉見下地内）の発掘調査報告書である。
- 2 調査は公益財団法人山口県ひとつくり財団が山口県下関土木建築事務所からの委託（契約名：一般県道下関川棚線単独道路改良（県道・指定）工事に伴う調査業務委託 第1工区）を受けて実施した。
- 3 調査組織は以下のとおりである。

調査主体	公益財団法人山口県ひとつくり財団山口県埋蔵文化財センター		
調査担当	調査第一課 課長	岩	崎 仁 志
	調査第一課 文化財専門員	井	上 広 之
	調 査 員	塚	本 史 晃
- 4 本書の第1図は国土地理院発行の2万5千分の1地形図「川棚温泉」・「蓋井島」・「安岡」を複製使用した。第2図は山口県文書館に資料掲載の許可を得て使用した。
- 5 本書で使用した方位は国土座標（世界測地系）の北で示した。国土座標の単位はmであり、標高は海拔高度（m）である。
- 6 本書で使用した土色の色調表記は農林水産省農林水産技術会議事務所（監修）『新版標準土色帖』Munsell方式による。
- 7 図版中の遺構・遺物番号は挿図の遺構・遺物番号と対応する。
- 8 本書で使用した遺構略号は次のとおりである。

S I	： 竪穴住居	S B	： 掘立柱建物	S K	： 土坑	S T	： 墓	S A	： 柱列
S P	： 柱穴	S X	： その他の遺構						
- 9 本書の作成に当たり、中世墓出土の歯については特定非営利活動法人・人類学研究機構 松下孝幸氏、石材の鑑定については山口県立山口博物館学芸課主任 赤崎英里氏のご教示をいただいた。
- 10 出土炭化材の放射性炭素年代測定及び樹種同定については業者に委託し、その成果を第IV章に掲載した。
- 11 本書の作成は岩崎・井上・塚本が分担し、岩崎・井上が編集した。なお、執筆分担は次のとおりである。

I	： 井上	II	： 塚本	III	： 岩崎・塚本	IV	： 業者委託	V	： 井上・塚本
---	------	----	------	-----	---------	----	--------	---	---------

本文目次

I 調査に至る経緯と調査の概要	
1 調査に至る経緯	1
2 調査の経過と概要	1
II 遺跡の位置と環境	
1 地理的環境	3
2 歴史的環境	4
III 調査の成果	
1 遺跡の概要	7
2 主な遺構	7
3 主な遺物	23
IV 自然科学分析	
1 放射性炭素年代測定	32
2 山田遺跡出土炭化材の樹種同定	37
V 総括	
1 弥生時代の様相	41
2 山田遺跡出土の磨製石剣	42
3 中世から近世の様相	44

挿図目次

第1図	遺跡の位置と周辺の遺跡	3	第16図	溝状遺構群実測図	19
第2図	山田遺跡周辺（江戸時代中期 山口県 文書館蔵『御国廻御行程記』部分） ……	5	第17図	SK02・22実測図	20
第3図	山田遺跡調査範囲図	7	第18図	SX02・03実測図	21
第4図	遺構配置図	8	第19図	SX04実測図	22
第5図	SI01実測図	9	第20図	縄文土器・石器類実測図	23
第6図	SI02実測図	10	第21図	弥生土器実測図(1)	24
第7図	SA01～06実測図	11	第22図	弥生土器実測図(2)	25
第8図	SK19実測図	12	第23図	石器類実測図	26
第9図	SK07・08・09・14実測図	13	第24図	中世遺物実測図	27
第10図	SB01・02実測図	15	第25図	近世遺物実測図	28
第11図	SB03・04実測図	16	第26図	マルチプロット図	34
第12図	SA07～10実測図	17	第27図	暦年較正結果	36
第13図	SK01・03・12・21実測図	18	第28図	山口県の石剣・石戈出土遺跡 分布図	42
第14図	SX01実測図	18	第29図	鍛冶関連遺物出土地点	45
第15図	ST01実測図	18			

写真目次

写真1	重機による表土除去	2
写真2	作業風景	2
写真3	山田遺跡出土炭化材の走査型電子顕微鏡写真	40

表目次

第1表	出土土器・陶磁器観察一覧表	29
第2表	出土石器類観察一覧表	31
第3表	鍛冶関連遺物観察一覧表	31
第4表	測定試料および処理	32
第5表	放射性炭素年代測定および暦年較正の結果	33
第6表	山田遺跡出土炭化材の樹種同定結果	37
第7表	山田遺跡出土炭化材の樹種同定結果一覧	39

図版目次

図版1	調査区（手前）と響灘
図版2	調査区と県道下関川柵線（写真右側） 調査区遠景（南西上空から）
図版3	調査区と竜王山（正面奥） 調査区全景
図版4	調査区全景（北上空から） 調査区全景（西上空から）
図版5	調査区北部 調査区南部
図版6	SI01 完掘状況（西から） SI01 完掘状況（上空から） SI01 主柱穴土層断面 主柱穴 A 主柱穴 B 主柱穴 C 主柱穴 D
図版7	SI02 完掘状況（北から） SI02 完掘状況（西から）
図版8	SI02 および付随排水溝完掘全景 SI02 東主柱穴土層断面（北から） SI02 西主柱穴土層断面（北から） SI02 石剣出土状況（南から） SI02 砥石出土状況（北から）

- 図版9 SA01～06完掘状況
- 図版10 SK19遺物出土状況（北から）
SK19台石・弥生土器出土状況（北から）
SK19弥生土器出土状況（北から）
- 図版11 SK08弥生土器出土状況（北から）
SK08弥生土器出土状況（部分 北から）
- 図版12 SK07完掘状況（北から）
SK09完掘状況（西から）
SK14完掘状況（東から）
- 図版13 SB01完掘状況 SB04完掘状況 SB02・03完掘状況
- 図版14 SA07～10完掘状況
SK03・21完掘状況（西から）
SK03青花皿出土状況
- 図版15 SK01朝鮮王朝陶器出土状況（西から）
SP04鞆羽口出土状況
ST01土師器杯・銅銭出土状況（南から）
ST01土師器杯出土状況（東から）
ST01銅銭出土状況（東から）
- 図版16 溝状遺構群完掘状況
SK02礫充填状況（北から）
SK22礫充填状況（南から）
- 図版17 SX02・03検出状況（西から）
SX02埋甕出土状況（西から）
SX02埋甕完掘状況（西から）
SX03埋甕出土状況（西から）
SX03埋甕完掘状況（西から）
- 図版18 SX01～04完掘状況
SX04石積部分（西から）
- 図版19 山田遺跡出土遺物（1）
- 図版20 山田遺跡出土遺物（2）
- 図版21 山田遺跡出土遺物（3）
- 図版22 山田遺跡出土遺物（4）
- 図版23 山田遺跡出土遺物（5）
- 図版24 山田遺跡出土遺物（6）

I 調査に至る経緯と調査の概要

1 調査に至る経緯

山田遺跡の所在する下関市吉見地区は響灘に面し、西南端の沿岸低地から北東部の山麓低丘陵地に延びる地域である。

山口県下関土木建築事務所により一般県道下関川棚線改良工事が計画されたことを受け、山口県教育委員会が平成 18 年度に試掘調査を実施した結果、路線部分に当たる丘陵地の安定した地山面から柱穴や瓦質土器など、中世から近世にかけての遺跡の広がりが確認されたため、工事に先立ち当該地区を対象とする発掘調査が実施されることとなった。

近隣遺跡では、同じく一般県道下関川棚線改良工事に伴い、山田遺跡の北約 500 m に所在する尾袋遺跡（田尻地区）が平成 17 年度に調査されている。

調査対象地は、周知の遺跡「下山田遺跡」と「尾袋遺跡（田尻地区）」の中間に位置しており、新たに「山田遺跡」と称することとなった。

今回の発掘調査は、県道路線内で遺跡の記録保存が必要となる 1400㎡について、山口県下関土木建築事務所の委託を受けて公益財団法人山口県ひとづくり財団山口県埋蔵文化財センターが実施することとなった。

2 調査の経過と概要

平成 31 年 4 月 5 日付けの委託契約締結をうけて諸準備を開始し、4 月 15 日には現地において山口県下関土木建築事務所との初回業務打合せを行った。これ以後、表土除去および仮設事務所設置に向けた手続きを開始した。

5 月 9 日には自治会・学校等の関係者・関係機関に協力依頼等を行った。翌日 5 月 10 日に調査範囲を再確認して、調査を開始した。発掘調査作業員の募集については自治会長に依頼し、5 月 10 日から 5 月 26 日までの募集期間を設けて人員を確保し、5 月 31 日に作業員説明会を実施した。また、作業開始に備え、発掘調査の拠点となる仮設事務所および器材庫等を 5 月 21 日に設置した。なお、仮設事務所に関わる電気配線は 5 月 23 日、水道配管は 6 月 7 日に完了した。

重機による表土除去は 5 月 20 日から 6 月 3 日にかけて実施した。試掘調査の段階で、果樹栽培用の肥料投与の攪乱坑が存在することが判明していたが、予想以上にその数は多く、約 2.5 m 間隔の規則的な配列で 70cm～80cm の方形坑が掘られていた。なお、果樹園後の現地は雑木林化しており、伐根は地表深部の破壊が懸念され、人力での作業を見込んでいたため、遺跡本体調査までには長期間を要することが想定された。しかし、広葉樹で水平根が多かったことが幸いし、重機による伐根でも遺構面破壊が生じないことが分かったため、伐根を含む表土除去日程を短縮することができた。

6 月 6 日には山口県埋蔵文化財センターから現地へ器材搬入を行い、6 月 10 日から人力により壁面清掃、遺構検出作業等を順次行った。調査区内の段状落ち際は、後世の果樹園開拓により遺構が削平されていたが、山麓低丘陵の先端に当たる調査区北部から南西部にかけてのやや低い部分には弥生時代中期の円形竪穴建物と後期の方形竪穴建物をはじめ、弥生時代の土坑や柱穴といった遺構が比較

的よく残っていた。また、調査区南部中央では、中世の土坑墓も確認できた。調査区東部の一段高い部分では、中世から近世の土坑や柱穴などが見つかри、調査区全体に万遍なく遺構が存在していることが判明した。

7月8日に国土座標杭を設置したのち、遺構の広がりを確認するために調査区全体の略測図を作成し、位置関係を確認しながら遺構を掘り進めていった。

調査区南西隅には遺物包含層が広がっていたが、遺物包含量が極めて少ないため、作業量を考慮したうえで7月9日に再度重機を投入し、包含層除去を行った。

6月下旬から7月初旬は梅雨による長雨で遺構面が軟弱化し、発掘作業ができない日が続いた。また、7月下旬から30度を超す猛暑日となり、7月29日以降は、暑さ指数33度(WBGT値)を超えた時点で作業を中止、または午前中のみ作業するなどの熱中症対策を講じた。猛暑日は8月中旬以降まで続き、終日作業ができる状態になったのは8月22日である。しかし、その後の8月下旬から9月上旬にかけては、度重なる豪雨が作業の進捗を阻んだため、工程に大幅な遅れが生じた。



写真1 重機による表土除去

各々の遺構完掘後に順次個別遺構図・写真記録の作成を進めた。調査区全体の遺構掘削がほぼ終わりに近づいた10月上旬から遺構面清掃、調査区周辺の環境美化を始め、10月9日にはリモコンヘリコプターによる空中写真撮影および空中写真測量を実施した。



写真2 作業風景

現地調査がほぼ終了した10月12日に地元住民等を対象に現地説明会を開催する予定であったが、台風接近に伴う強風警報のため余儀なく中止し、希望者には調査成果の概略を記した資料を配布するかたちをとった。

10月15日に器材撤収、仮設事務所水道設備および仮設事務所電気配線の撤去の撤去、10月16日に仮設事務所・器材庫等の撤去を行った。

その後、未調査遺構の掘削や測量を行い、遺跡全体の遺構確認作業を施したうえで、10月29日に現地における調査を終了した。

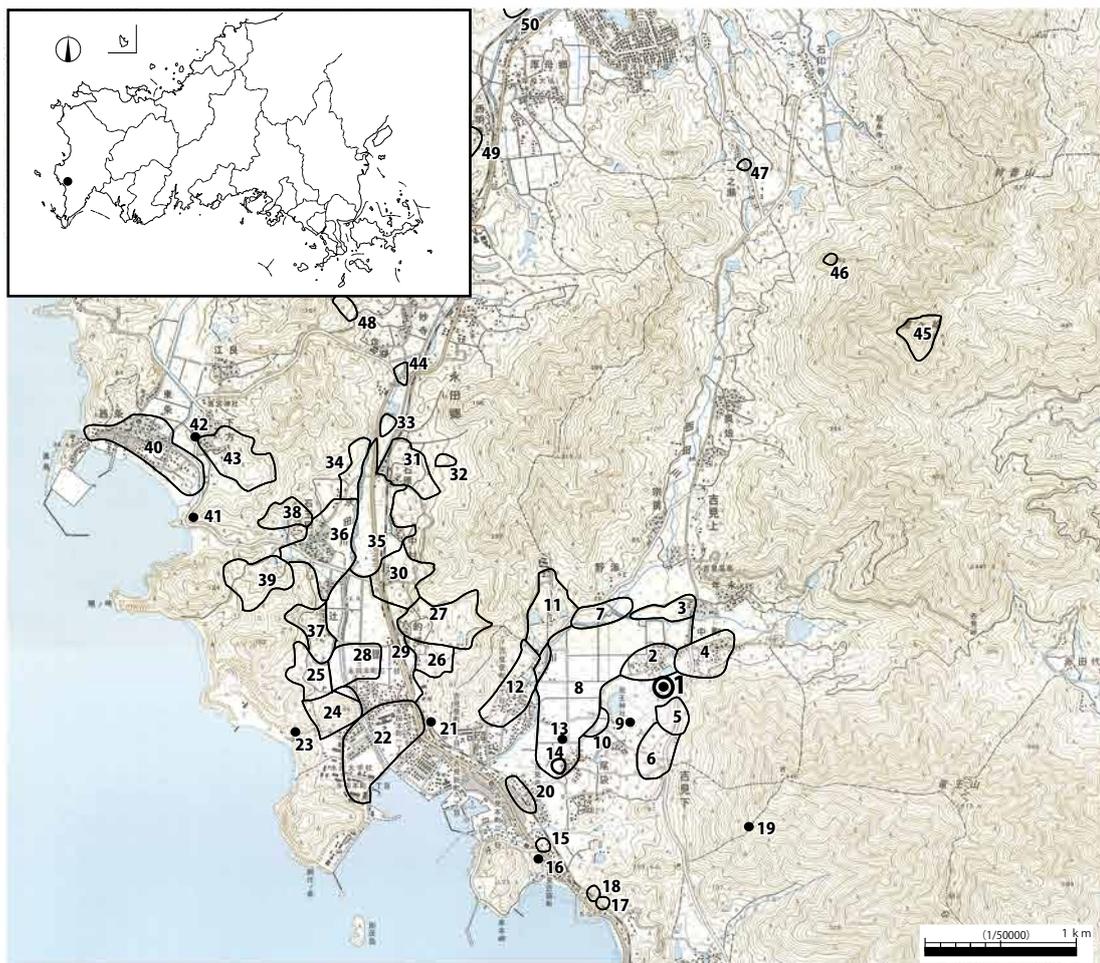
11月上旬から1月下旬にかけては記録類を整理するとともに、それまでに当センターに持ち帰り整理してきた出土遺物を実測・写真撮影して資料化し、報告書刊行準備を進めた。また、出土銭貨の劣化を防ぐための保存処理や、出土炭化材の自然科学分析を業者委託した。あわせて、挿図・写真図版の作成や原稿執筆作業を継続し、本報告書を刊行するに至った。

Ⅱ 遺跡の位置と環境

1 地理的環境

山田遺跡は山口県西部下関市大字吉見下に位置する。北に同市豊浦町、南に同市中心部が隣接している。当遺跡が位置する吉見平野は市域西部響灘沿岸部にあり、対岸には福岡県北九州市を望むことができる。本遺跡は背後に標高 600m 以上の鬼ヶ城（標高 619.6m）、竜王山（標高 613.9m）を含む東西に伸びる中国山地の終着地点である豊浦山地に囲まれた谷底平野に立地している。約 1 億 2 千万年前に北九州から山口県一円にかけて存在した脇野湖と呼ばれる湖の底に堆積した関門層群で形成された平地である。この関門層群から産出される赤紫色の頁岩は赤間硯の原料として知られる。その他、沿岸には赤色泥岩や礫岩層の露出がみられる。

吉見地区は沿岸部に面していることから比較的温暖な地域である。地区内には吉見湾へ注ぐ西田川が走り、川に沿って水田、畑、果樹園が営まれている。しかし、地区内を流れる川は短く水量が少ない。そのため、地区内各所にため池が所在しており、農業用水として現在も利用されているほか、龍王神社は雨乞の神として人々から厚い信仰を受けていたことで知られているように農業用水等確保が



1 山田遺跡 2 仮宿遺跡 3 吉見上遺跡 4 柴尾遺跡 5 下山田遺跡 6 宮の尾遺跡 7 大森遺跡 8 尾袋遺跡 9 上宮の尾遺跡 10 宮林遺跡 11 野添遺跡 12 里遺跡
13 樋の口遺跡 14 岩神古墳 15 小丸山石棺 16 丸山古墳 17 大久保古墳 18 古宿古墳群 19 竜王山登山道遺跡 20 吉見駅構内遺跡 21 尾崎古墳 22 永田塩田遺跡 23 上越石棺
24 丸山遺跡 25 追ノ台遺跡 26 和田遺跡 27 場の遺跡 28 正吉入江塩田跡 29 永田郷遺跡 30 永田郷中村遺跡 31 石原屋敷遺跡 32 上ヶ原遺跡 33 白濱遺跡 34 荒瀬遺跡
35 御堂遺跡 36 石王田遺跡 37 かじや遺跡 38 稗尻遺跡 39 百町遺跡 40 吉母浜遺跡 41 深川古墳群 42 下方古墳 43 吉母下方遺跡 44 観福寺遺跡 45 鬼ヶ城跡 46 経納山経塚
47 ノ瀬遺跡 48 日ノ殿遺跡 49 西明寺遺跡 50 沼原遺跡

第 1 図 遺跡の位置と周辺の遺跡

代々吉見地区内の課題であったことがうかがえる。

2 歴史的環境

文献資料において「吉見」の地名は、康暦元（1379）年に大内義弘が長門一宮に寄進した寄進状写に「長門国安岡并吉見郷」と見えるのが初出である。南北朝期から戦国期まで「吉見郷」とされ、江戸時代になると吉見郷から「吉見村」となる。山田遺跡が所在する場所は吉見村内の「中村」に位置する。江戸後期になると、村内の中畑が吉見上村、吉見村が吉見下村と改称される。明治以後は豊西上村、大正11年には吉見村となり、昭和14年以降より下関市に編入し現在に至る。

縄文時代 吉見地区において人々の生活の痕跡がみられるのは縄文時代以降である。縄文時代の遺跡として近年の調査で縄文時代後期～晩期と思われる土器、石鎌が出土している田尻地区の尾袋遺跡（8）があげられる。本遺跡においても縄文晩期の土器、石鎌が出土しており、縄文時代の遺跡の痕跡がうかがえる。吉見地区外の遺跡においては晩期の木棺墓、土坑墓、後期後葉の土器が検出された御堂遺跡（35）、晩期前半の集落、埋葬跡が検出された石王田遺跡（36）が所在する。

弥生時代 弥生時代になると市内各地に集落が形成されていく。下関は県内でも遺跡の密度が高い地域であり、響灘を挟んで北部九州の影響を受けた遺構や遺物が多く検出されている。

この時代の遺跡として吉見地区内において弥生時代前期後葉の土器、扁平打製石斧が出土した尾袋遺跡（8）があげられる。当遺跡内において前期後葉まで扁平打製石斧が使用されていたこと、赤色頁岩製の石核が出土していることから当地で打製石斧を生産していたことを示す。その他、地区内の柴尾遺跡（4）、下山田遺跡（5）、上宮の尾遺跡（9）において、磨製石斧、石鎌、弥生土器片が採集されている。

下関市内には全国的に知られる弥生遺跡が多く、弥生時代前期中ごろから中期前半の貯蔵穴や山口県内弥生時代前期の標識土器「綾羅木式」の出土地として知られる綾羅木郷遺跡や漢代の馬車の輿に建てる傘の先端部に使う蓋弓帽が石棺から出土した稗田地蔵堂遺跡、箱式石棺墓から細形銅剣と多紐細文鏡が出土した梶栗浜遺跡など、有力首長の存在を示す墓が存在するほか、武久浜墳墓群、吉母浜遺跡、中ノ浜遺跡、土井ヶ浜遺跡など響灘沿岸砂丘地帯において集団墓地が営まれていた。

吉見地区周辺の遺跡においては吉母浜遺跡（40）は弥生時代中期の墓地遺跡であり、遺体の周りを磔で囲んだ石囲墓や箱式石棺墓が検出されている。遺物は北部九州系の弥生土器に加えて鯨骨製アワビオコシが出土しており、吉母浜の人々が漁民的性格を持った集団であった可能性を指摘されている。

古墳時代 古墳時代になると市域南部の綾羅木川下流域に首長墓が築かれる。前期から中期の古墳としては仁馬山古墳（墳長74.8m）、観音岬古墳（墳長48m）、若宮1号墳（墳長39.7m）の3基の前方後円墳があげられる。仁馬山古墳の築造年代は未だ定まっていない状況であるが、古墳の墳丘形態などから前期までさかのぼる可能性がある。近年の調査・研究において仁馬山古墳の墳丘は奈良県行燈山古墳の墳丘と相似形である可能性が指摘されており、当地域と大和政権との関係を考える上で重要な古墳である。

後期になると豊浦地域には当地域の首長墓と考えられ、横穴式石室を持つ大門古墳が所在する。響灘沿岸の最北に位置する前方後円墳である。復元での墳長約35m。円筒埴輪、朝顔埴輪、玉類が出土している。

吉見地区周辺の遺跡では鏡や鉄刀が出土した上越石棺（23）、横穴式石室を有する下方古墳（42）が所在する。吉見地区内においては昭和26年の吉見中学校グランド拡張工事の際に発見され、須恵器、耳環が出土した尾崎古墳（21）や管玉などが出土している大久保古墳（17）がある。その他、刀、金環が出土した古宿古墳群（18）が所在する。

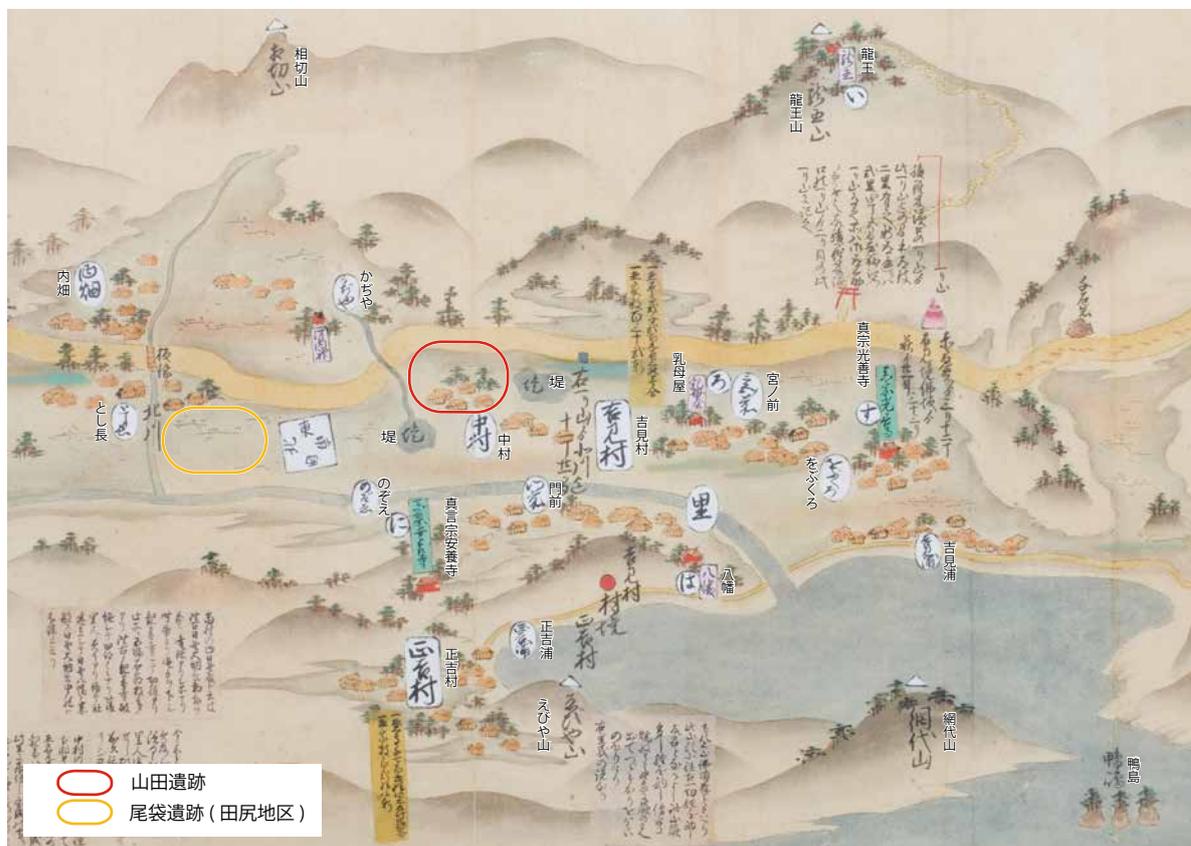
中世 中世の吉見は「吉見郷」と呼ばれ、吉見の地も大内氏の支配下に組み込まれる。応永8(1402)年には足利義満が山城国石清水八幡宮に対し都濃郡新屋河内及び吉見の地頭職を寄進している。

吉見地区内では尾袋遺跡（8）において輸入陶磁器を含む広域流通製品が出土している。このような当地域における製品の流通を考える上で重要な周辺遺跡として、朝鮮王朝陶器が多く出土し貿易拠点港湾遺跡としての性格を持つと考えられる同市豊浦町の中ノ浜遺跡が挙げられる。直線距離で約9kmの位置であり、本遺跡出土の朝鮮王朝陶器等はここから供給された可能性も考えられる。

周辺においては吉母浜遺跡（40）において13～14世紀の集団墓地がみつまっている。合計127基検出されており、その内116基は土坑墓、19基は火葬墓であり、山口県における中世の墓制を考えるうえで重要である。その他、吉母浜遺跡より直線距離約2km離れた吉母堂の下遺跡においても14世紀の火葬墓が発見されている。

また、吉見に隣接する永田郷の正吉入江塩田跡（28）では入江である地形をいかした塩田が広がり、鎌倉時代末期まで永田八幡宮北側を中心に製塩が行われていた。しかし、鎌倉末期に寒冷化に伴い海岸線が後退したため製塩業は衰退したと考えられている。

近世 弘治三（1557）年の大内氏滅亡以後は、毛利氏の支配下となる。関ヶ原の戦い後の毛利輝元の防長二国に討滅され萩に移ったことに伴い、長門国豊浦郡の大部分及び厚狭郡西辺の一部を従弟



第2図 山田遺跡周辺（江戸時代中期 山口県文書館蔵『御国廻御行程記』部分）

秀元へ分知したことにより萩藩の支藩長府藩の領地となる。吉見村は長府藩家老田代家、三好家の給地であった。

萩藩は慶長10(1605)年から正保期にかけて藩内の道の整備を行っている。本遺跡のすぐそばに赤間関街道(北浦道筋)が通っており、常に人や物、情報が行き来していた環境にあったと思われる。現在、街道の一部は一般県道下関川棚線として利用されており、この道は地元では「殿様道」とも呼ばれている。

江戸時代の吉見村の様相については『御国廻御行程記』(第2回)においてうかがい知ることができる。絵図には村内の寺社や堤、道、家屋が表現されており、今回調査を行った山田遺跡に相当する場所にも民家が数軒描かれている。その他、吉見村の規模や人々の生活を知ることができる史料として『地下上申』があり、「惣高式千百式百九石壺升壺合」、「惣人数六百式拾五人」とある。沿岸部であることから夏秋は鱈、鯖漁を行っており、時には鯛漁を行っていたことが記されている。

また、上記の史料から平成17年度調査の尾袋遺跡(田尻地区)の調査や今回の調査成果に結びつく記述として地区内に「かぢや」「かちや村」という地名、小村名が確認できる。尾袋遺跡(田尻地区)や今回調査を行った山田遺跡から鞆羽口片、鉄滓が出土しており、吉見村内の鍛冶屋の存在を示す資料である。

吉見地区内においては里遺跡(12)で近世の遺跡が確認されているほか、今回調査を行った山田遺跡で肥前系陶磁器や佐野焼が出土しており、尾袋遺跡において近世の遺物がみつまっている。

これまで近世の吉見地区については不明な点が多かったが、今回の調査から当時の吉見村の人々の暮らしの一端が明らかになり、絵図に描かれている情報から地区内の景観が現在も近世の様相を色濃く残していることが明らかになった。

【引用・参考文献】

- 下関市史編集委員会編 1965『下関市史 原史一中世』下関市役所
- 山口県 1974『周防灘周辺開発地域 土地分類基本調査 安岡』
- 山口県地方史学会編 1979『防長地下上申 第三巻』
- 「よしみ」史誌編纂委員会編 1985『よしみ史誌』下関市立吉見公民館
- 下関教育委員会 1985『吉母浜遺跡』
- 「角川日本地名大辞典」編さん委員会他編 1988『角川日本地名大辞典 35 山口県』角川書店
- 山口県文書館 1989『絵図で見る防長の町と村』
- 下関市教育委員会 1991『御堂遺跡』
- 山口県教育庁文化課 1996『歴史道調査報告書 赤間関街道』山口県教育委員会
- 小川国治編 1998『山口県の歴史』山川出版社
- 山口県 2000『山口県史 資料編 考古1』
- 下関市教育委員会 2002『吉母堂の下遺跡』
- 第28回九州・山口古墳時代研究会 九州国立博物館誘致推進本部 2002『山口の古墳』
- 山口県 2004『山口県史 資料編 考古2』
- 財団法人山口県ひとづくり財団山口県埋蔵文化財センター 2006「尾袋遺跡(田尻地区)」山口県埋蔵文化財センター調査報告 第54集
- 太田雅史 2006「下関の遺跡分布について」『研究紀要』下関市立考古博物館
- 下関市史編修委員会編 2008『下関市史 原史一古代』下関市
- 下関市教育委員会 2010『史跡 仁馬山古墳』
- 山口県編 2012『山口県史 通史 原始・古代』山口県
- 岩崎仁志 2016「朝田墳墓群第Ⅱ地区第13号墳の再評価」『山口考古』第36号 乗安和二三氏追悼号 山口考古学会
- 公益財団法人山口県ひとづくり財団山口県埋蔵文化財センター 2018「阿弥陀寺一上坂本東大川防安・通常砂防工事に伴う埋蔵文化財調査一」山口県埋蔵文化財センター調査報告 第100集
- 平瀬直樹 2019『塩田の村 「有光家文書」の中世的世界』清文堂

Ⅲ 調査の成果

1 遺跡の概要

調査区は東から西に伸びる丘陵先端部（標高 29～31.5 m）に立地する。周辺北部および南部は谷状地形を形成し、現在はため池となっている。調査区は現代の果樹林用地として段状に削平され、かつ、下位部には果樹栽培用の肥料穴が等間隔に掘られているため、北東部分から中央部分の広範囲の遺構を失い、個別遺構の一部も削られている。地山は安定した粘質土で、上位部（南東部）では主に中・近世の遺構を、下位部（北部・南西部）では中世および弥生時代の遺構を検出している。

2 主な遺構

弥生時代の遺構

本調査において弥生時代の遺構は竪穴建物 2 棟、土坑 5 基、柱穴列 6 条が確認された。

竪穴建物

SI01 調査区北側に位置し、平面形は円形で直径 6.50 m、床面積 14.79㎡である。住居半分は調査区外及び後世の削平で失われている。建物内地山が西側へ傾斜するため、貼床により平坦としている。また、壁は後世の削平をうけている。床面のプランは円形であり、床面の周りには排水の役割を持たせた幅 25～35cmの周溝をめぐらせている。支柱穴は直径 40～42cm であり、深さは 28～48cm、現存は 4 本であるが、6～7 本と推定される。中央には長軸 50cm、深さ 15cm の中央土坑が位置する。埋土から焼土が検出されている。

建物からは高杯、弥生土器片、作業台と思われる台石が出土。中期後半～後期の所産と考える。

SI02 調査区北側、SI01 に隣接する場所に位置する。平面形は方形で、一辺約 5 m、床面積 19.62㎡である。支柱穴は長軸 40～50cm、深さ 22.5～40cm の中央の 2 本である。中央には直径 60cm、深さ 10cm の土坑が位置する。土坑の底からは焼土を検出し、木炭小片を含んでいた。炉であった可



第3図 山田遺跡調査範囲図



第4図 遺構配置図

能性がある。また、この土坑のそばには直径 80cm、深さ 15cmの土坑がある。床面周囲と中央には幅 17～30cmの排水の役割をもつ溝を回らしている。中央の溝は住居内の土坑を介し、中央の土坑を避けて住居外へと延びていく。住居底面は北側へ傾斜するため、降雨の際のスムーズな排水が行えるように地形を生かした溝であったと考えられる。同様の事例は同市下七見遺跡、船頭遺跡で確認できる。建物内には台石が据えてあり、弥生土器が出土。埋土上層より石剣・砥石が出土した。後期の所産。

柱穴列

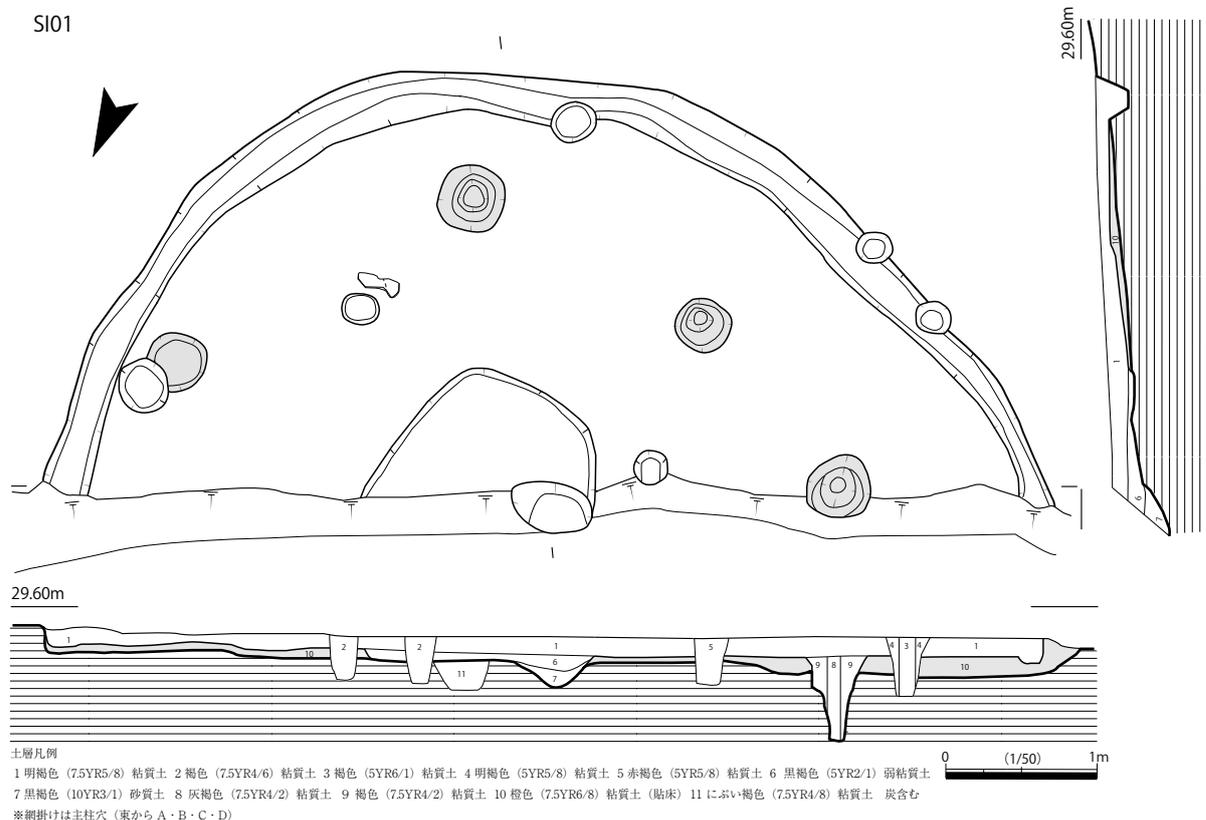
SA01 SI02の東方に隣接する。5つの柱穴から構成される総延長 8.10 mに及ぶ柱列である。主軸は N65° E の柱穴列で柱間距離は西から 2.40 m、1.98 m、1.50 m、2.20 mである。径 27～36cmの柱穴で、最深部は 15cm、ほかの柱穴列より浅いため、上面は後世の削平をうけているものと想定される。

SA02 SI01の南方に隣接する。4つの柱穴から構成される柱穴列で総延長 5.88 mに及ぶ。主軸は N20° E で、柱間距離は南西から 1.98 m、1.98 m、1.80 mとおおよそ等間隔である。長径 36～39cmである。最深部は 45cmである。

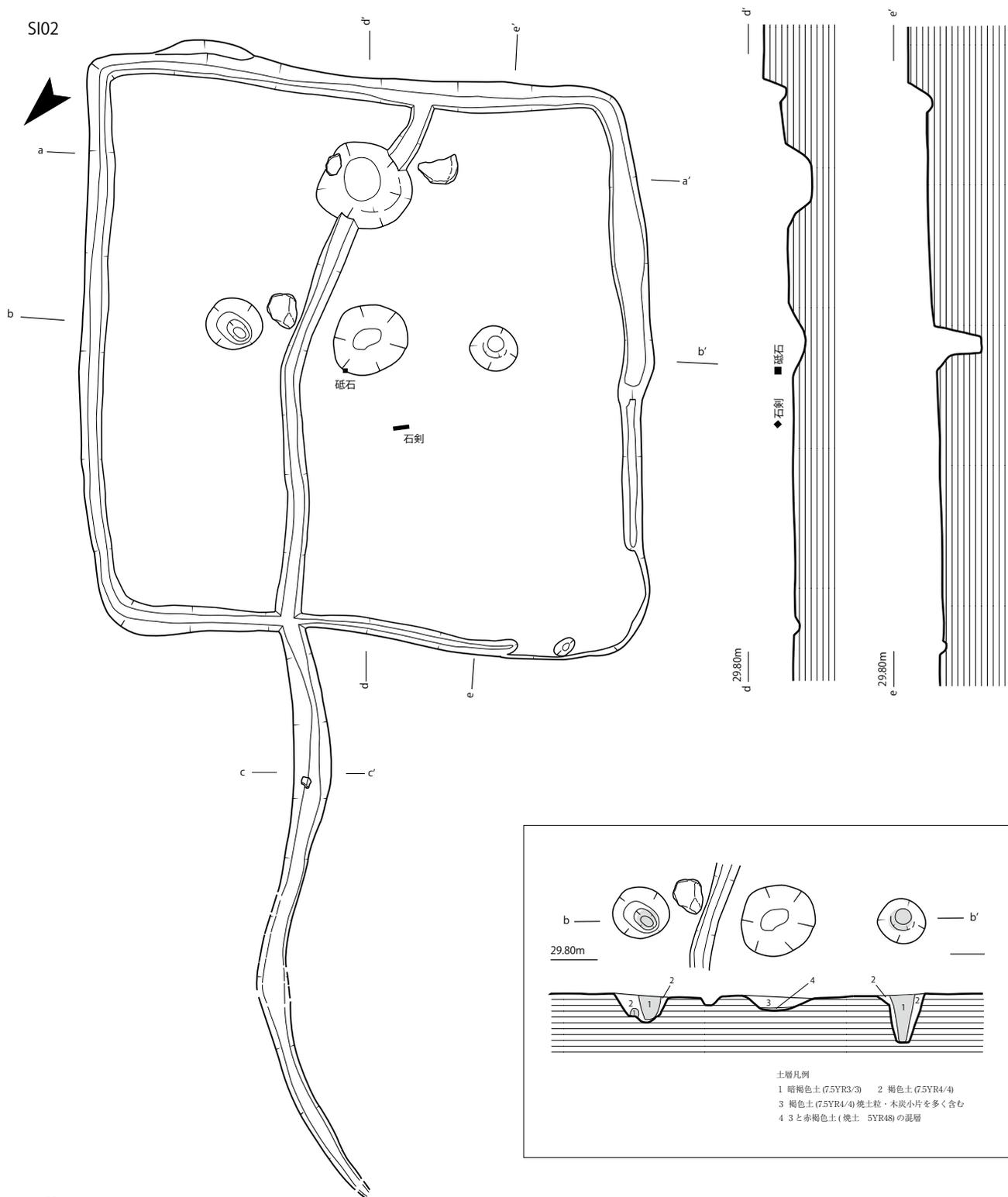
SA03 SI01の西方に隣接する。4つの柱穴から構成される柱列で総延長 6.84 mに及ぶ。主軸は N70° E の柱穴列で、柱間距離は南西から 2.28 m、1.98 m、2.52 mである。長径 33～39cmの柱穴で最深部 60cmである。最浅部 12～21cmである。

SA04 SI01の西方に隣接する。4つの柱穴から構成される柱穴列で総延長 4.50 mに及ぶ。主軸は N49° W で、柱間距離は北西から 1.68 m、90cm、1.98 mである。長径 24～51cmである。最深部は 30 cmである。

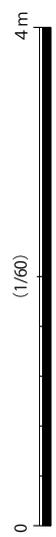
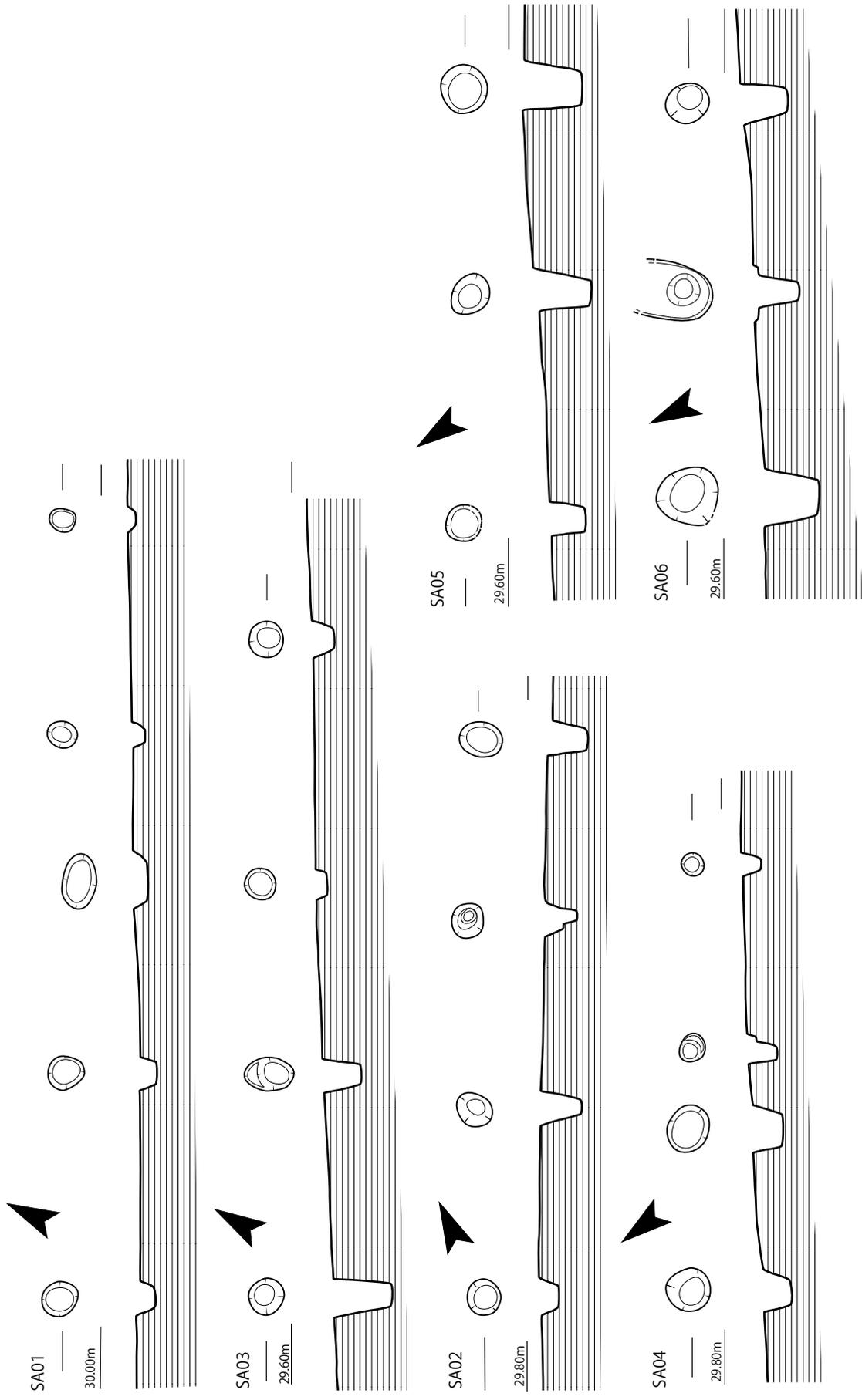
SA05 SI02の西方に隣接する。3つの柱穴から構成される柱穴列で総延長 4.50 mに及ぶ。主軸は N49° E で、柱間距離は北西から 2.34 m、2.10 m、である。長径 36～43cm である。最深部は 60cmである。



第5図 SI01 実測図



第6図 SI02 実測図



第7図 SA01～06 実測図

構成する柱穴から土器片が出土している。主軸がSA04と同様であるため、一連の遺構である可能性をもつ。

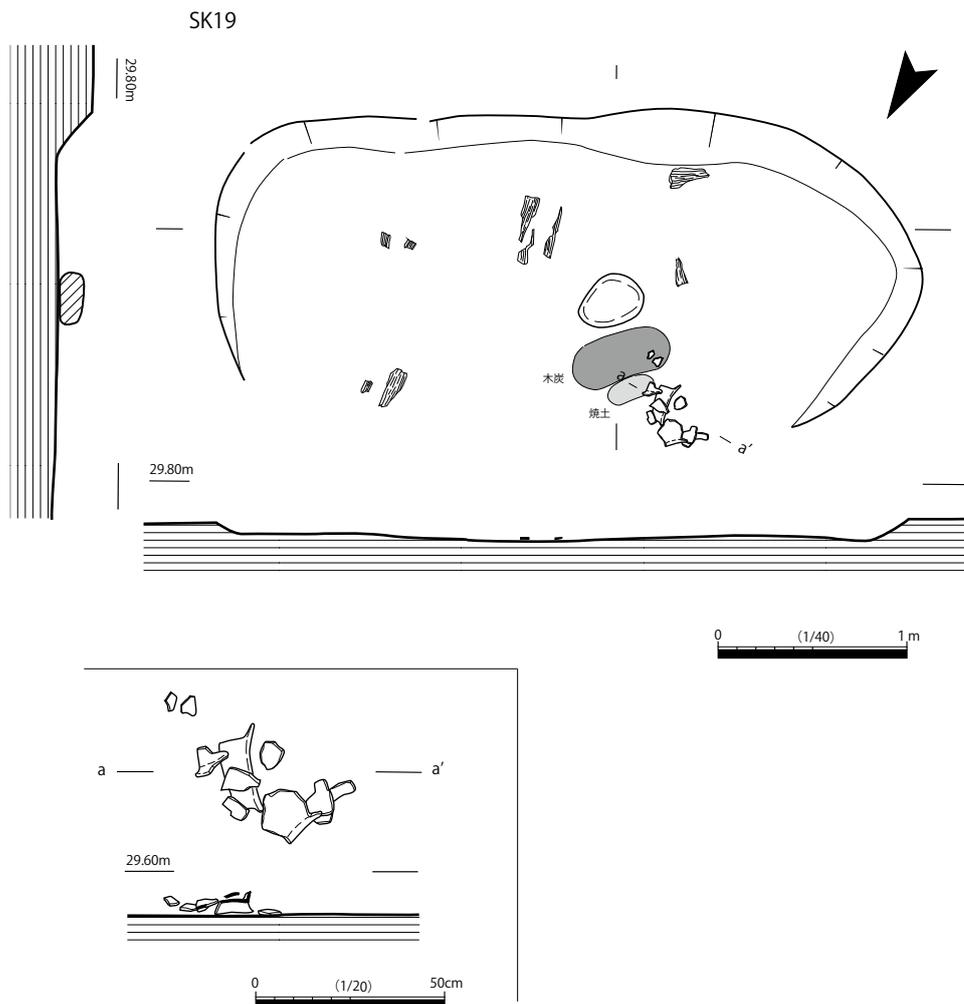
SA06 SI02の西方に隣接する。3つの柱穴から構成される柱穴列で総延長4.20 mに及ぶ。主軸はN62° Eで、柱間距離は北西から2.10 m、2 mである。長径42～60cmである。最深部は42cm。

土坑

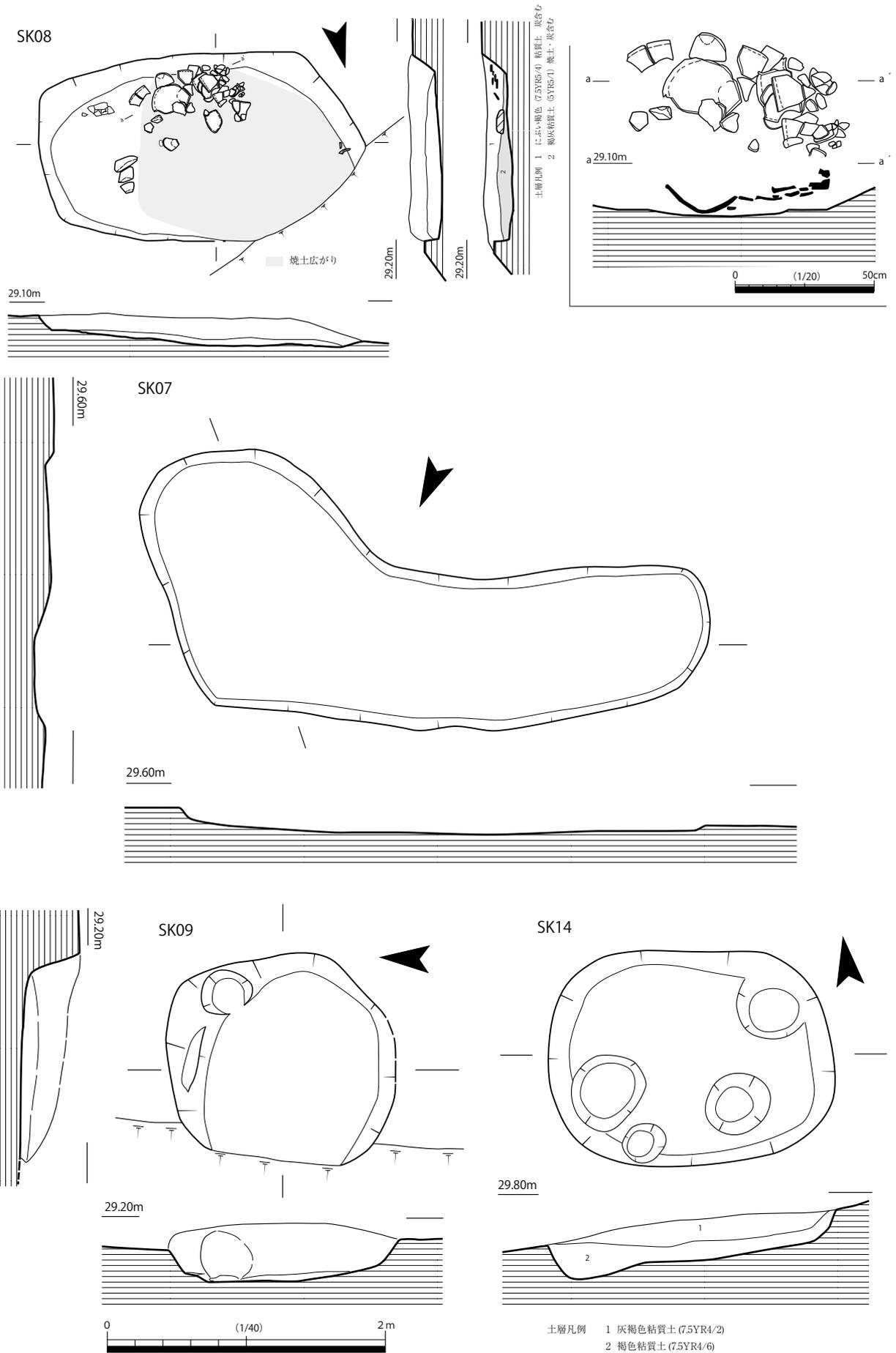
SK07 調査区北側後期の建物であるSI02と重複する土坑で、出土遺物からSK07が中期の所産であり古い。長軸3.84 m短軸1.88 mで深さは最深で14cmである。平面プランは不整形である。壁は緩やかに立ち上がる。溝の中央から土器片が出土しているほか、黒曜石の剥片が出土している。弥生時代中期中頃～後半の遺構と考える。

SK08 調査区西側SK09に隣接する位置にある。長軸2.36 m、短軸1.30 m、深さは最深で20cmである。平面プランは不整形で遺構の一部は調査区外及び後世の削平で流出している。壁は外傾に立ち上がる。土坑中央部に土器集中出土域があり、その直下及び周辺には焼土が広がる。弥生時代中期前半の遺構と考える。

SK09 調査区北側に位置し、一部は調査区外で後世の削平で流出しているほか、柱穴と重複しているが土坑の方が古い。長軸1.60 m、深さは32cmで壁面は外傾して立ち上がる。土坑中段にテラスを設けている。平面プランは円形である。弥生土器片出土している。弥生中期の所産。



第8図 SK19実測図



第9図 SK07・08・09・14 実測図

SK14 調査区南西側に位置する。長軸 2.04 m、短軸 1.58 m、深さは最深で 40cm である。その他の土坑に比べて残りが良い。

土坑内には 4 つの柱穴が重複しているが土坑が古い。平面プランは方形であり、壁は外傾して立ち上がる。出土遺物は内面突帯を有する壺の口縁部と底部が出土しており、中期前半の所産と考えられる。

SK19 調査区東側に位置する。長軸 3.68 m、短軸 1.48 m、深さ 20cm である。平面プランは隅丸方形で遺構の上半部及び壁の一部は後世の削平で流出している。土坑内からは台石のほか、台石の近くから弥生土器、木炭が出土している。この遺構内で何らかの作業を行っていたことが想定される。弥生後期の遺構と考える。

中世の遺構

中世の遺構と判断できるものは掘立柱建物 4 棟、柱穴列 4 条、土坑 4 基、埋甕遺構 2 基、墓 1 基、溝状遺構群 1 か所ほかである。これら中世遺構の大半は調査区南半部に存在する。

掘立柱建物

北東－南西を主軸とする 4 棟を復元した。SB01・SB02 を構成する柱穴からは 15～16 世紀の遺物（図化困難な瓦質土器鍋小片）が出土している。規模や主軸方位に顕著な相違がないことから、4 棟ともこれら遺物の示す時期の遺構と考えられる。なお、SB01 と SB03 はほぼ同一の主軸方位をとっており、同時に存在した可能性が指摘できる。

SB01 主軸方位 N 31° E の 2 間×2 間の建物であり、桁行 5.1 m (17 尺)、梁行 3.3～3.6 m (11～12 尺) の規模をもつ。SP45・SP46 埋土から瓦質土器鍋小片が出土した。

SB02 主軸方位 N 25° E の 2 間×2 間の建物であり、桁行 4.8 m (16 尺)、梁行 3.8～4.1 m (約 13 尺) の規模をもつ。SP08 埋土から弥生土器片、SP09 埋土から瓦質土器鍋小片が出土した。

SB03 主軸方位 N 30° E 前後の 1 間×2 間の建物であり、桁行 4.3～4.4 m (16.5 尺)、梁行 3.0～3.4 m (10～11 尺) の規模をもつ。柱穴埋土からは遺物が出土していない。

SB04 主軸方位 N 18° E の 2 間×2 間の総柱建物であり、桁行・梁行とも 4.3 m (約 14 尺) 前後の規模をもつ。柱穴埋土からは遺物が出土していない。

柱穴列

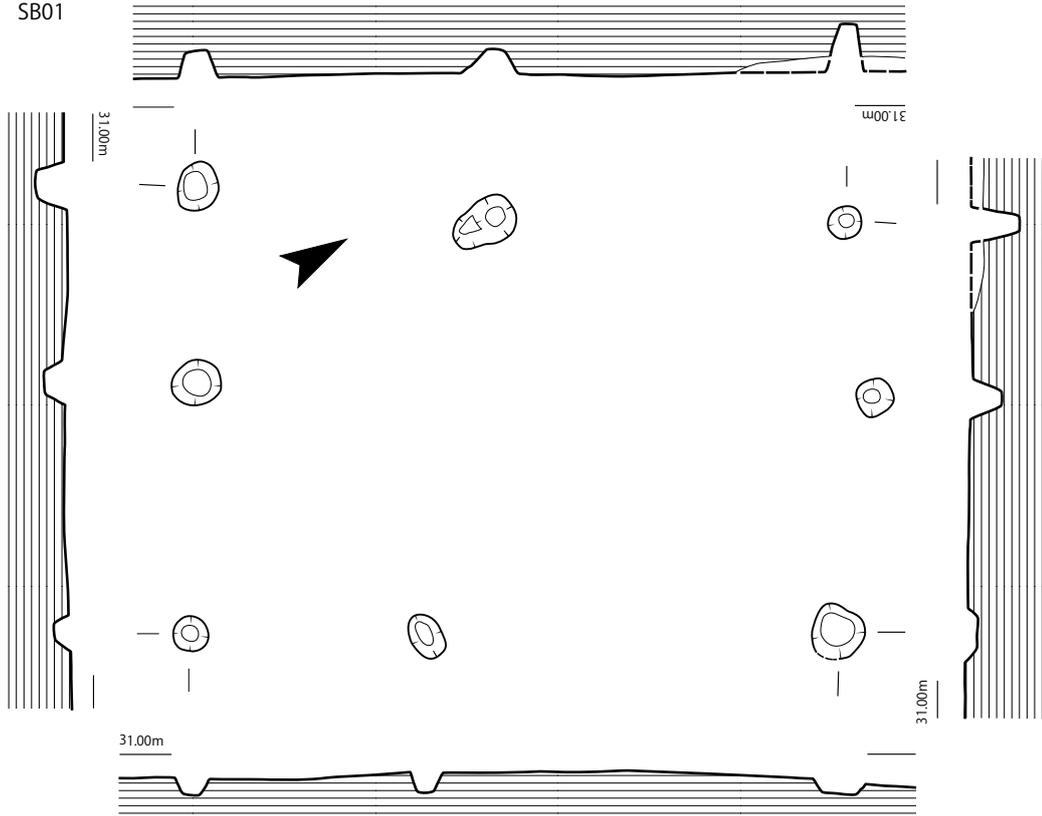
東西方向の柱穴列 4 条は近接して存在し規模や主軸方位に顕著な相違がないことから、ほぼ同時期の遺構と考えられる。SA07・SA08 を構成する柱穴（SP34・SP36・SP37）埋土には弥生土器片が含まれるものの、SA10 を構成する柱穴から 15～16 世紀の遺物（図化困難な瓦質土器鍋小片）が出土していることから他の 3 条もこの時期の遺構と判断した。

SA07 主軸方位 N 64° W、全長 5.2 m (約 17 尺) の遺構で、柱間距離は西から 1.2 m、1.6 m、1.3 m、1.1 m である。

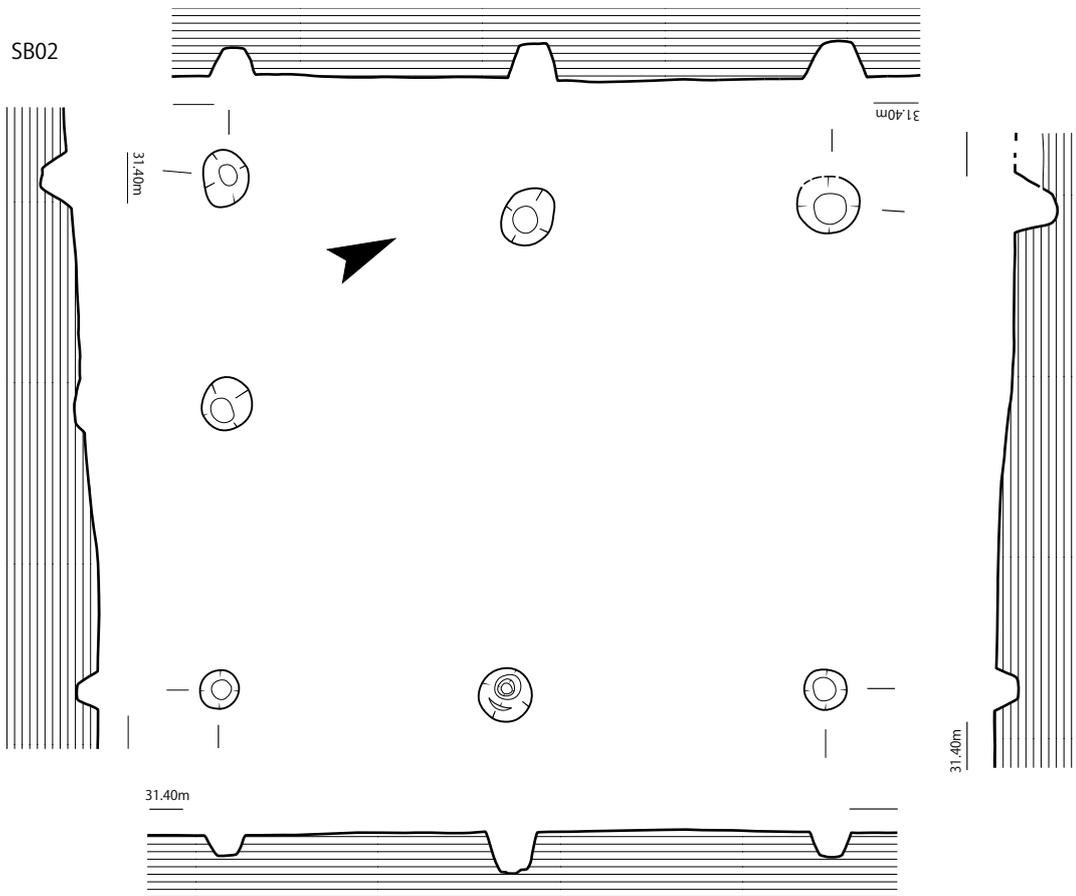
SA08 主軸方位 N 82° W、全長 4.7 m (約 16 尺) の遺構で、柱間距離は西から 1.6 m、1.1 m、2.0 m である。

SA09 主軸方位 N 77° W、全長 5.4 m (18 尺) の遺構で、柱間距離は西から 2.0 m、1.9 m、1.5 m である。

SB01

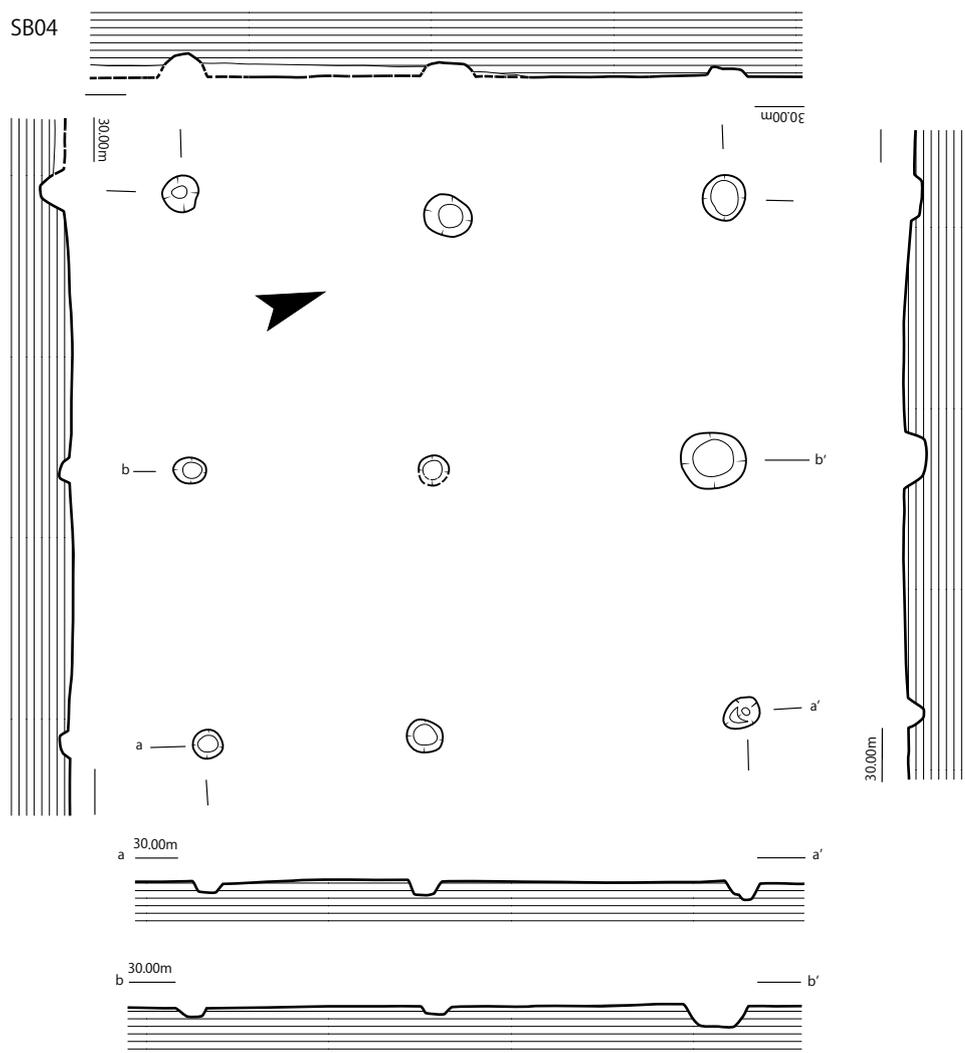
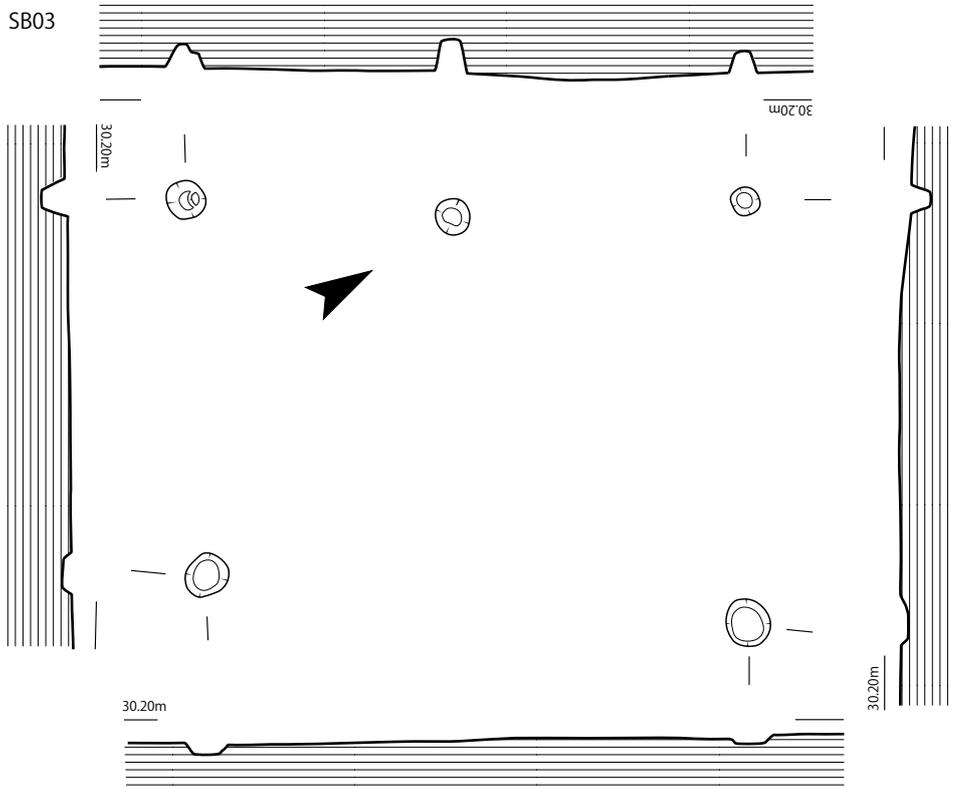


SB02

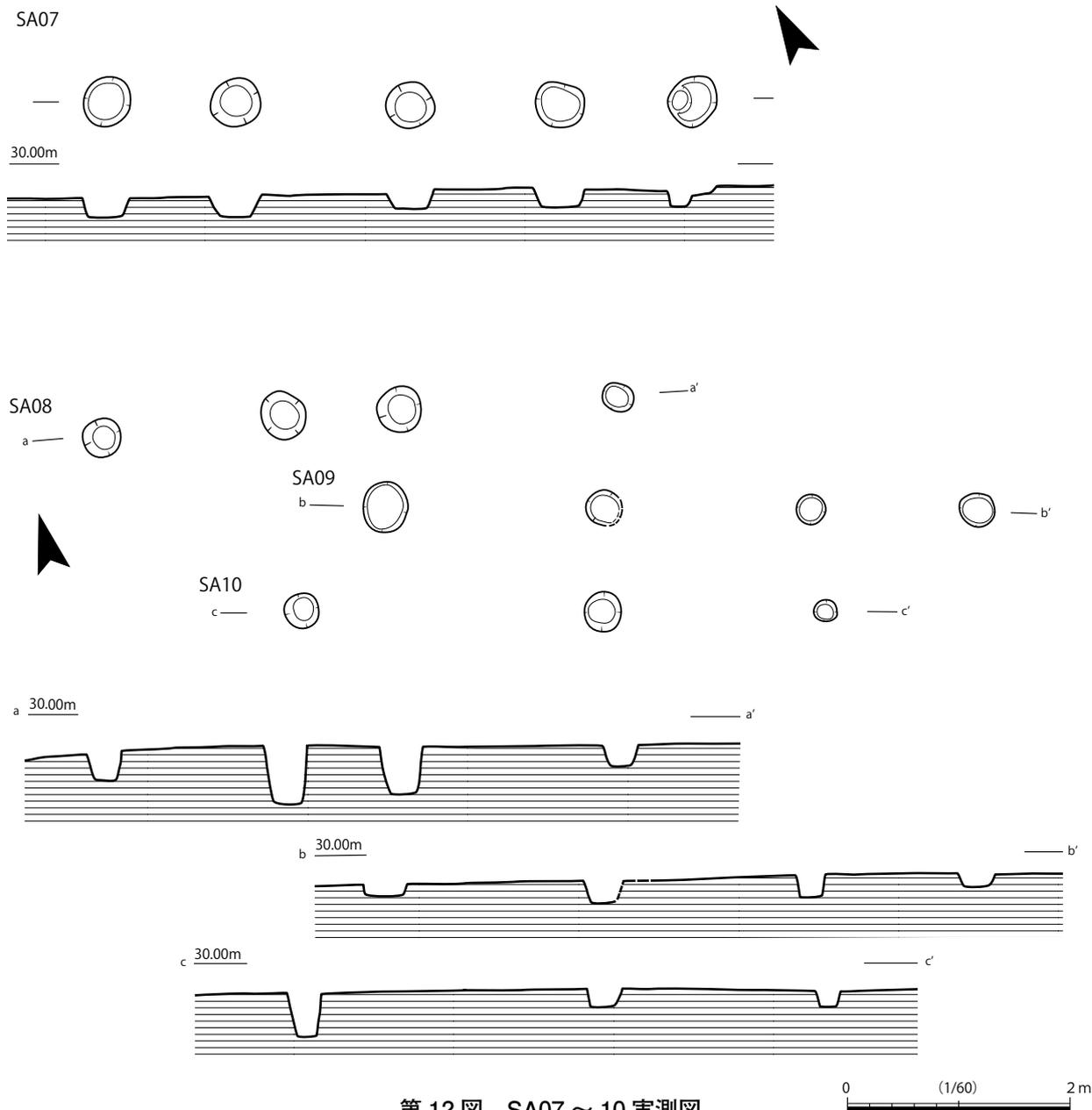


第 10 図 SB01・02 実測図





第 11 図 SB03・04 実測図



第 12 図 SA07 ～ 10 実測図

いずれの柱穴からも遺物は出土しなかった。

SA10 主軸方位N 78° W、全長 4.7 m（約 16 尺）の遺構で、柱間距離は西から 2.7 m、2.0 mである。SP38 埋土から瓦質土器鍋小片が出土した。

柱穴

意図的な遺物埋納をうかがわせるものはみられないが、埋土に白磁皿を含むもの（SP50）、青花磁器皿を含むもの（SP07）、鞆羽口を含むもの（SP04）、鉄滓を含むもの（SP05）も存在する。

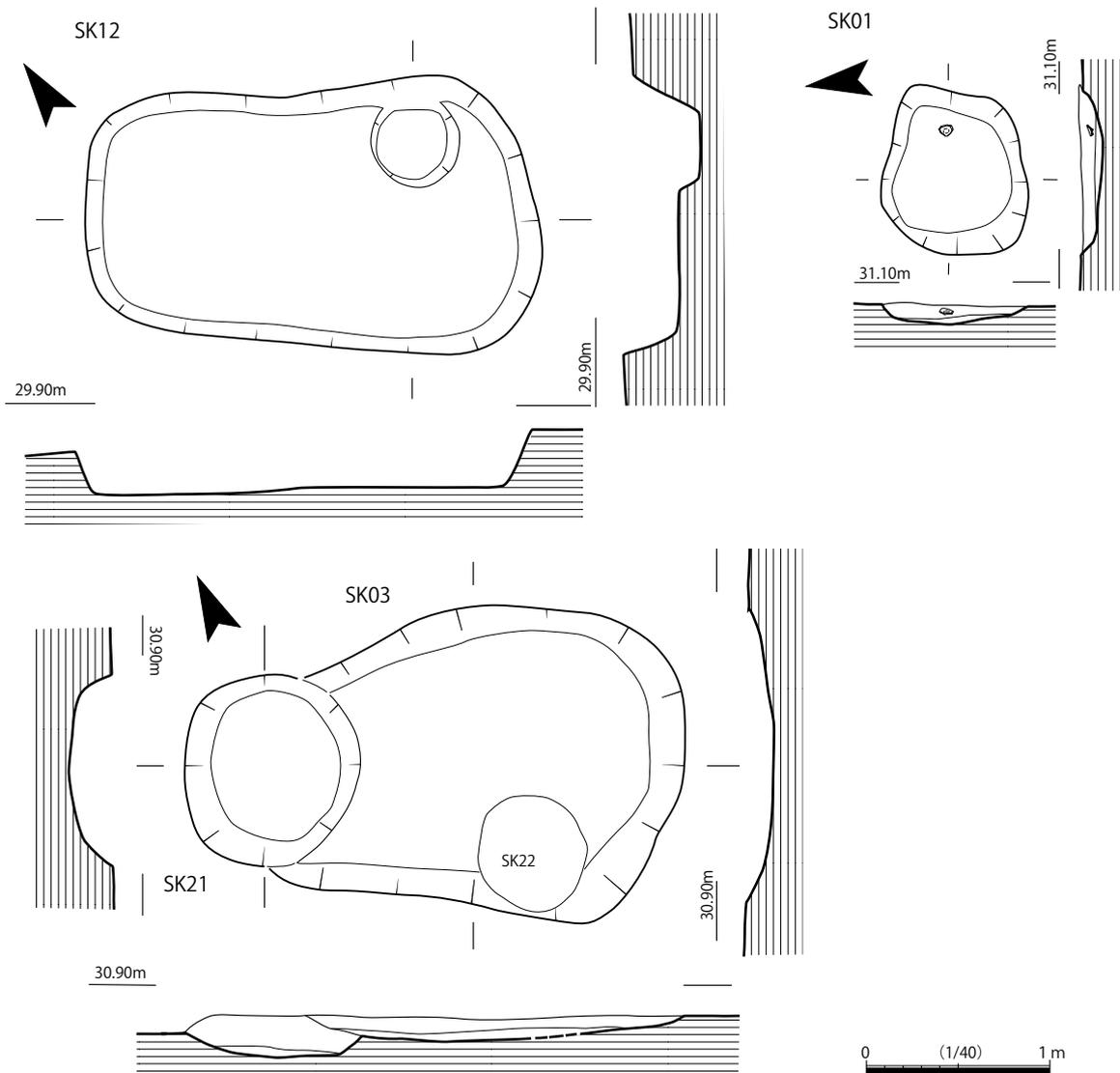
土坑

埋土に遺物を含まないものが多く、用途を特定できる例もない。

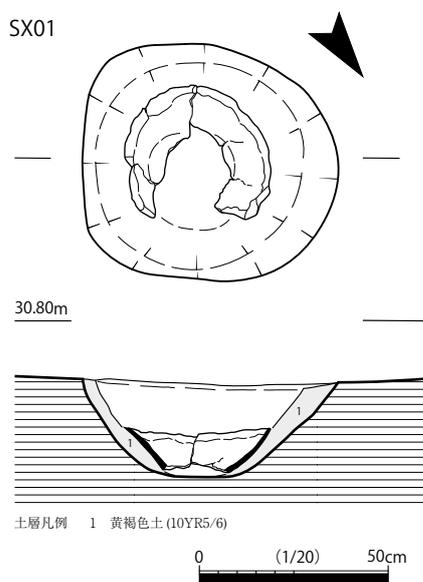
SK12 長軸 2.5 m、短軸 1.5 m、深さ約 20cm の隅丸長方形土坑で、埋土からは白磁皿片（54、13 世紀）が出土している。

SK01 長軸 0.9 m、短軸 0.8 m、深さ最大 13cm の不整な隅丸長方形土坑で、埋土からは朝鮮王朝陶器皿（58、15 ～ 16 世紀）が出土している。

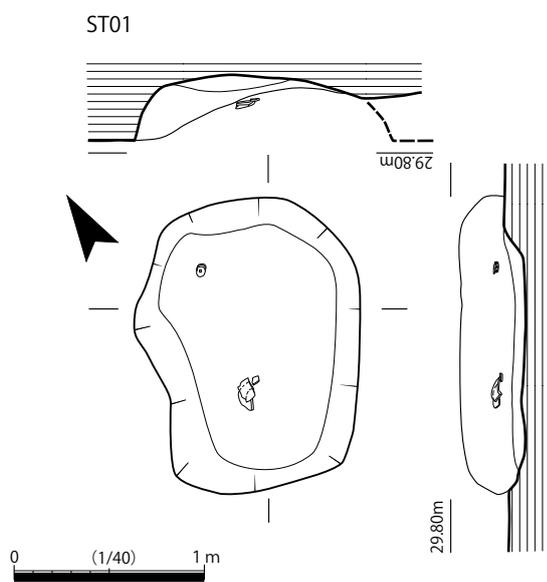
SK03 長軸 2.3 m 前後、短軸 1.7 m、深さ最大 15cm の不整な長円形土坑で、西端部は時期不詳の



第 13 图 SK01 · 03 · 12 · 21 实测图



第 14 图 SX01 实测图



第 15 图 ST01 实测图

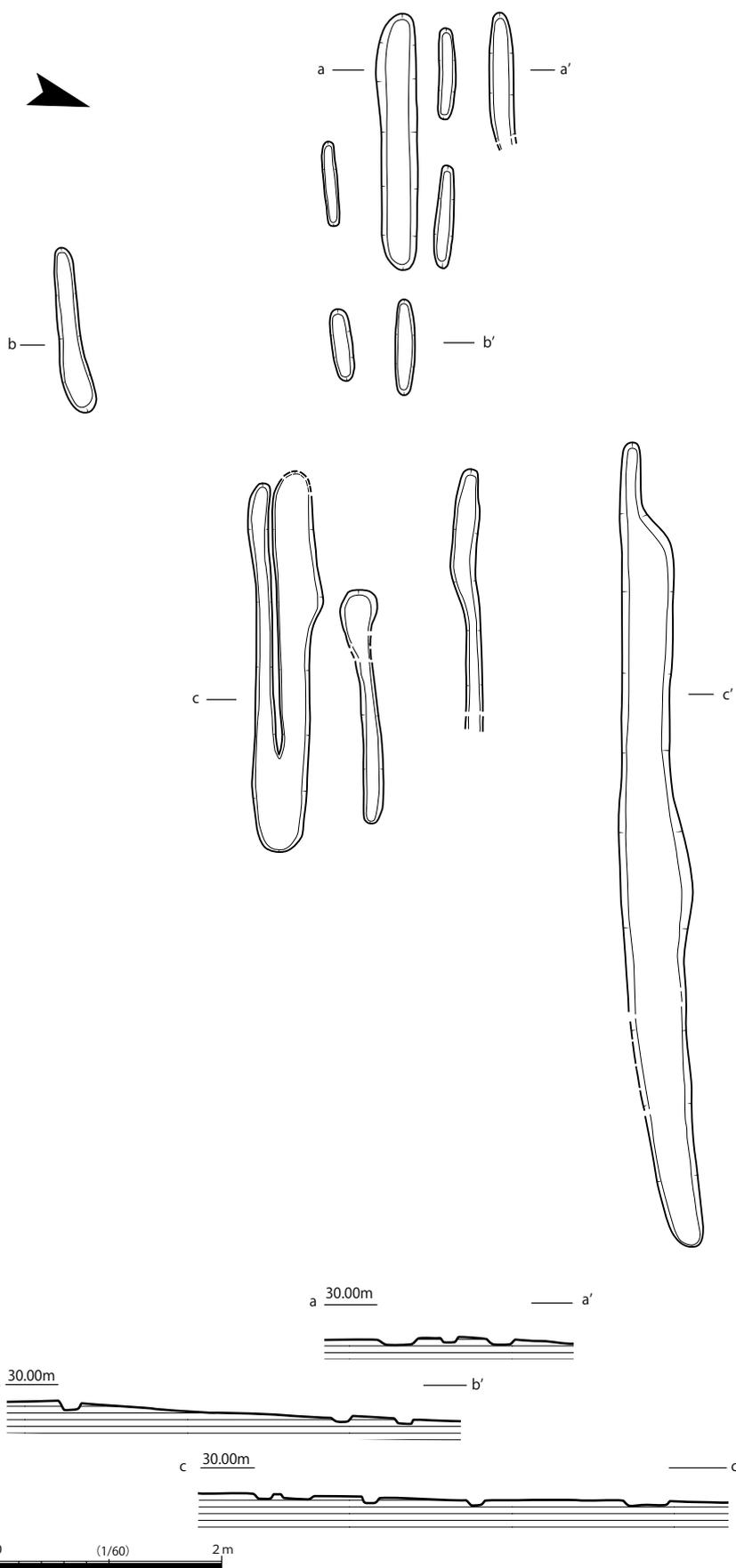
土坑 SK21 に切られる。埋土からは青花磁器皿（57、16 世紀）が出土している。

埋甕遺構

調査区南東部で検出した。長径約 70cm、短径約 60cm、深さ 25cm の円形土坑内に瓦質土器大甕の体部下位のみが残存した。体部上半と底部は抜き取られており、同一個体とみられる口縁部片が近世の谷状の遺構（SX04）から出土している。

墓

ST01 調査区南西部に存在する。後世の溝掘削により原形が大きく損なわれており、検出時点では長軸 1.6 m、短軸 1.2 m、深さ最大 40cm の不整な隅丸長方形の土坑であった。底面に近い位置から土師器杯と銅銭が出土したことから墓と判断した。主軸は北東-南西方向（N 30° E 前後）。土師器杯は 2 個体確認できたが、損壊しており原位置を保っていない。銅銭は 7 枚あり、このうち 6 枚が緡銭の状態に錆着していた。なお、銅銭周辺から歯冠が検出された。木棺等の痕跡が確認できないことから土坑墓と考えられる。出土した土師器杯の特徴から 14 世紀前半の遺構と判断できる。



溝状遺構群

調査区北東部の東西約 10 m、南北約 5 m の範囲に浅い溝状遺構

第 16 図 溝状遺構実測図

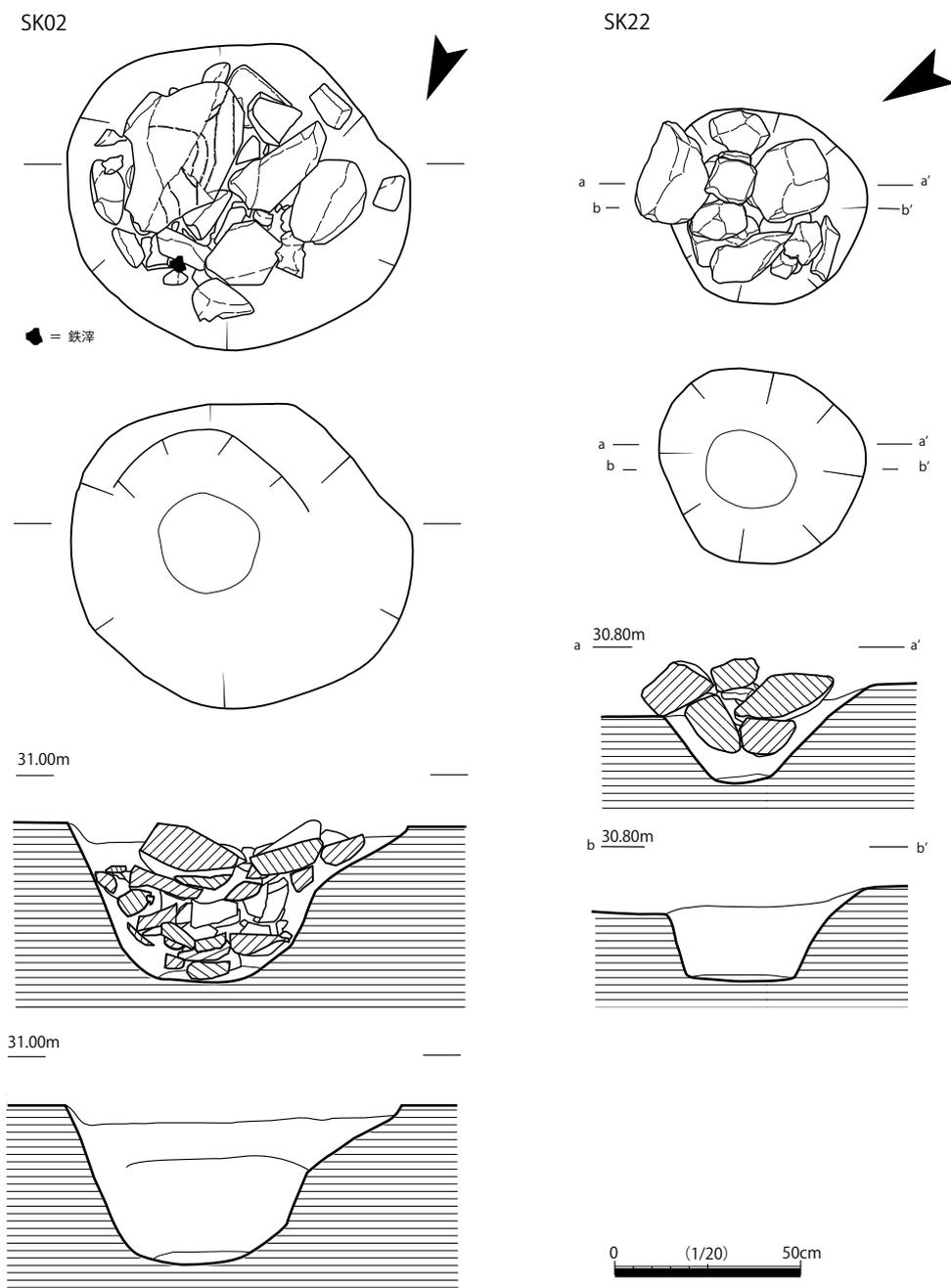
が平行して群在する。おおむね東西方向（N 70° E前後）の遺構 13 条から成り、いずれも深さが 5 cm以下である。各遺構の長さ・幅は斉一性がみられず、最大のもので長さ 6.4 m、幅 0.4 ~ 0.6 mである。

基本的に遺物を伴わないが、その形状や、遺構群が弥生時代の遺構面を掘削して平坦化した地点に存在することから中世の耕作痕跡（畑）と考えられる。

SK02 長径 95cm、短径 83cm、深さ 43cmの不整な円形土坑で、内部を自然石で充填する。埋土中には 17 世紀の白磁小片と鉄滓が含まれる。

SK22 中世の土坑 SK03 の上層から掘り込まれた長径 56cm、短径 52cm、深さ 35cmの不整な円形土坑で、内部を自然石で充填する。埋土中に遺物を含まないが、SK02 に近似する遺構であることから同時期の遺構考えられる。

近世の遺構



第 17 図 SK02・22 実測図

近世の遺構と判断できるものは土坑 2 基、埋甕遺構 2 基、谷状の遺構 1 基ほかである。

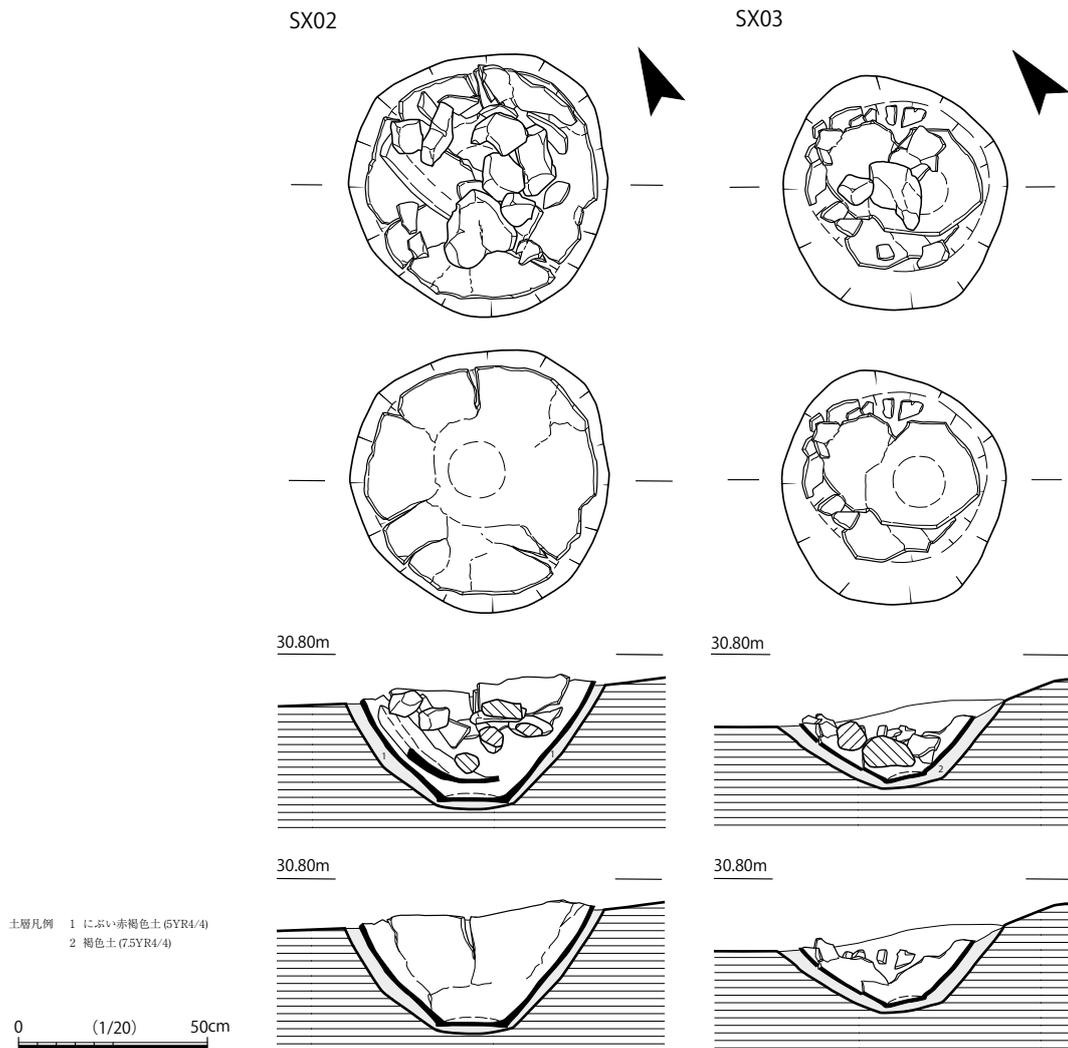
埋甕遺構

調査区南東部、中世の埋甕遺構 (SX01) から 4 m 程度離れた地点に SX02・SX03 が近接して存在する。いずれも埋設された土師器 (佐野焼) 大甕の下半部が残存し、大甕内の埋土中には大甕片と礫が含まれる。廃棄に際して大甕上半部を破壊し、礫とともに埋め戻したと考えられる。

SX02 については埋設された大甕の特徴から 18 世紀後半の遺構と判断できる。

谷状の遺構

SX04 調査区南東部で南北約 8 m、東西 5～6 m の不整形の地山の落ち込みを検出した。底面は北東から南西へ傾斜しており、南西端では拳大～人頭大の自然石を幅約 1 m の帯状に積み上げる。この石積みを土留めとして谷状の地形を埋め立てて造成し、平坦面を構築した状況が看取できる。埋土に 16～18 世紀の遺物を含んでおり、18 世紀後半の埋甕遺構 (SX02・SX03) が本遺構を掘り込んで構築されることから、造成は 18 世紀に行なわれたとみられる。



第 18 図 SX02・03 実測図



第 19 図 SX04 実測図

3 主な遺物

縄文時代の遺物

本調査において縄文時代の遺物が表面採取、柱穴から出土した。遺構に伴わない遺物であるが本遺跡内の縄文時代の遺跡の痕跡を示す資料である。

1は縄文土器片。深鉢で貝殻条痕の調整痕がみられる。縄文晩期の所産。2・3は打製石鏃。2は安山岩製で凹基無茎式。3は姫島産黒曜石で平基無茎式である。4・5は産地不明の黒曜石で二次加工のある剥片。

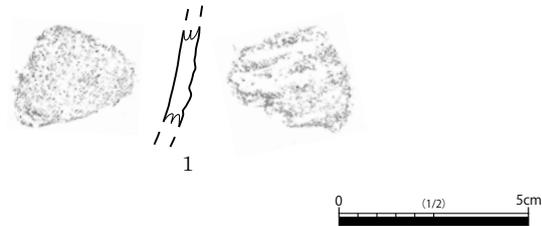
弥生時代の遺物

柱穴・土坑・竪穴建物遺構から出土した弥生時代中期前半から終末期までの遺物及び一部遺構に伴わない遺物の一部を図化した。

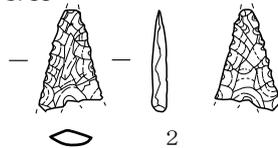
(1) 土器

6～8は壺。6は内面下部に貼り付け突帯を施す。7は外面に貼り付け突帯を施しており、壺の胴部肩にあたると思われる。8は底部であり、平底を呈する。9～13は甕。9は砲弾形を呈す器形をもち口縁部の端部は緩やかに外反する。10は口縁部で端部は「く」の字に外反する。11は口縁部で緩やかに外反する。12は底部でやや上げ底を呈する。9と同一個体の可能性がある。14は鉢。ほぼ完形に近い状態で底部は平底を呈し、胴部はぼつりとした器形を呈し口縁部は緩やかに外反する。15・16は甕。15は口縁部。端部は緩やかに外反する。16は口縁部で緩やかに外反する。17は壺の頸部で内面に貼り付け突帯を施す。18は甕の底部。19は壺の口縁部。20は甕。21は甕の底部。22は壺もしくは高杯の口縁部で鋤先口縁である。23は壺の底部で平底。24は壺の胴部で外面に貼り付け突帯を施しており、突帯は指押痕が残る。25は高杯で脚部に円形の透かしを持つ。透かしは一定に配置されておらず、間隔は1.0～1.6cmで狭い印象を受ける。推定で約8カ所の透かしを持つと推定される。26・27は甕の頸部であり、27は「く」の字に屈曲する。28・29は底部。ともに平底であり、器壁は緩やかに外傾する。30・31は甕の口縁部で跳ね上げ口縁。31は胴部がやや張る。32・33は甕の口縁部。32は口縁部が緩やかに外反する。跳ね上げ口縁。33は逆L字に屈曲する。34は底部で器壁は胴部に向かって外傾して行く。35は甕の底部で平底を呈し、器壁は胴部に向かって外傾する。36は甕の口縁部で「く」の字に屈曲する。37は壺の胴部と思われる。38は甕の胴部で胴部に断面三角形の突帯をもつ。39は甕の底部で若干上げ底を呈する。40は甕。胴部に断面三角形の突帯を廻らす。北部九州系の土器。41は甕の底部。底部は上げ底。

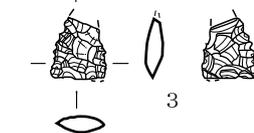
SP10



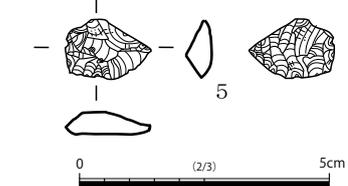
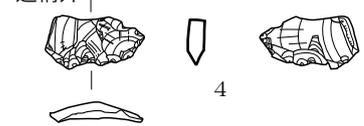
SP33



SP01

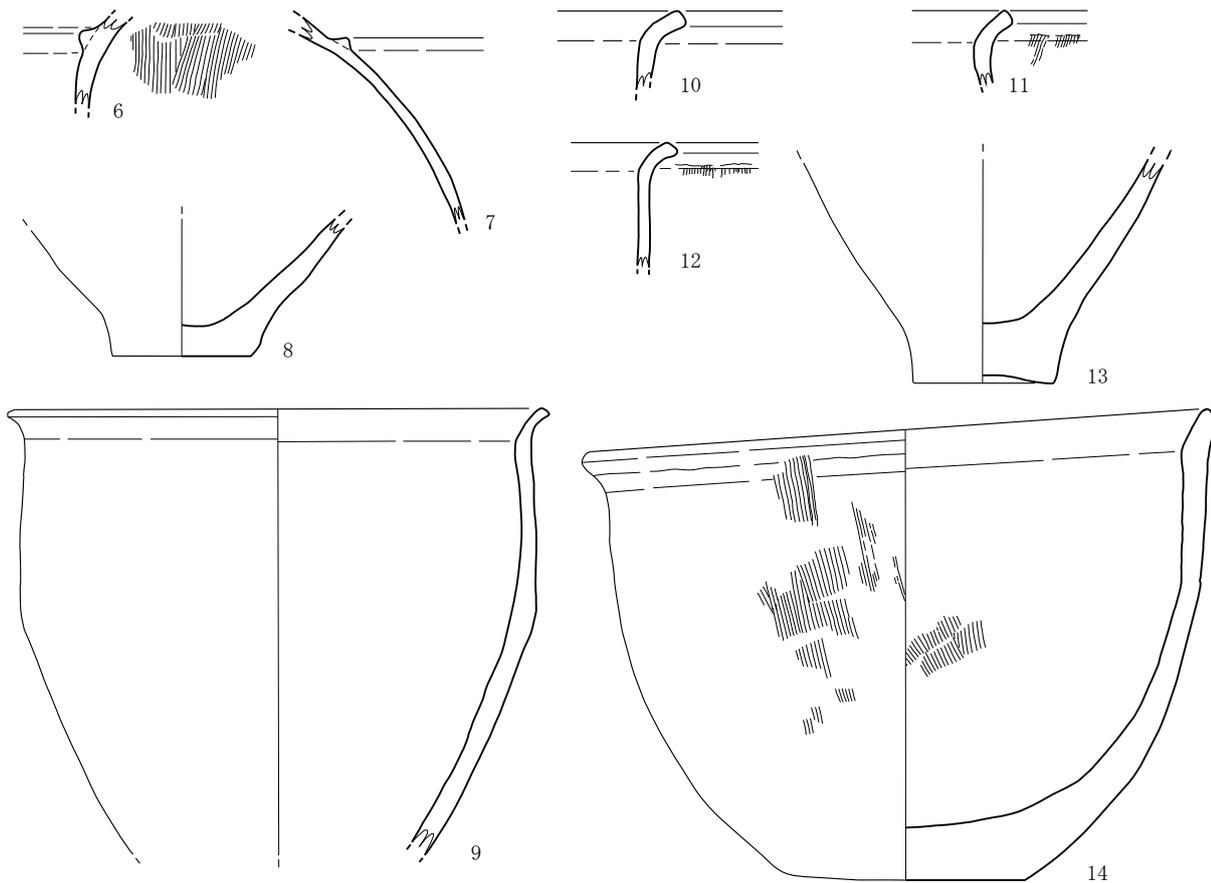


遺構外

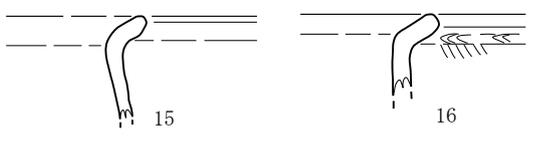


第20図 縄文土器・石器類実測図

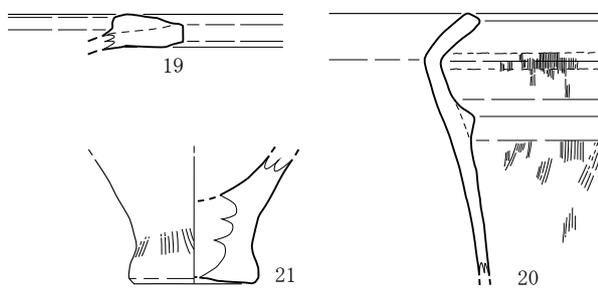
SK08



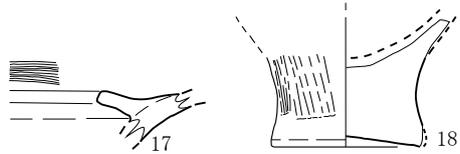
SK18



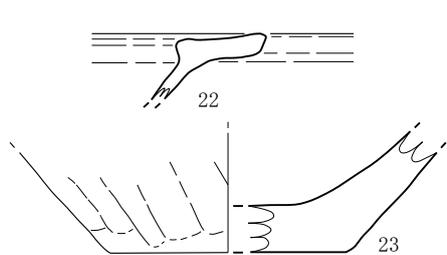
SK07



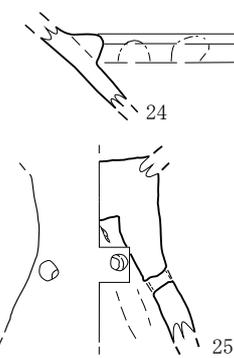
SK14



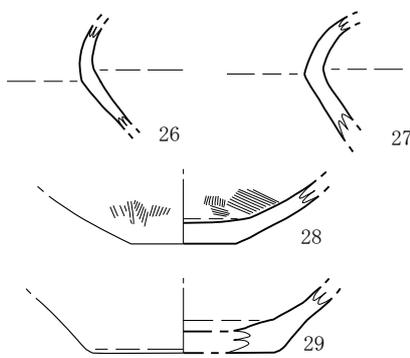
SK09



SI01



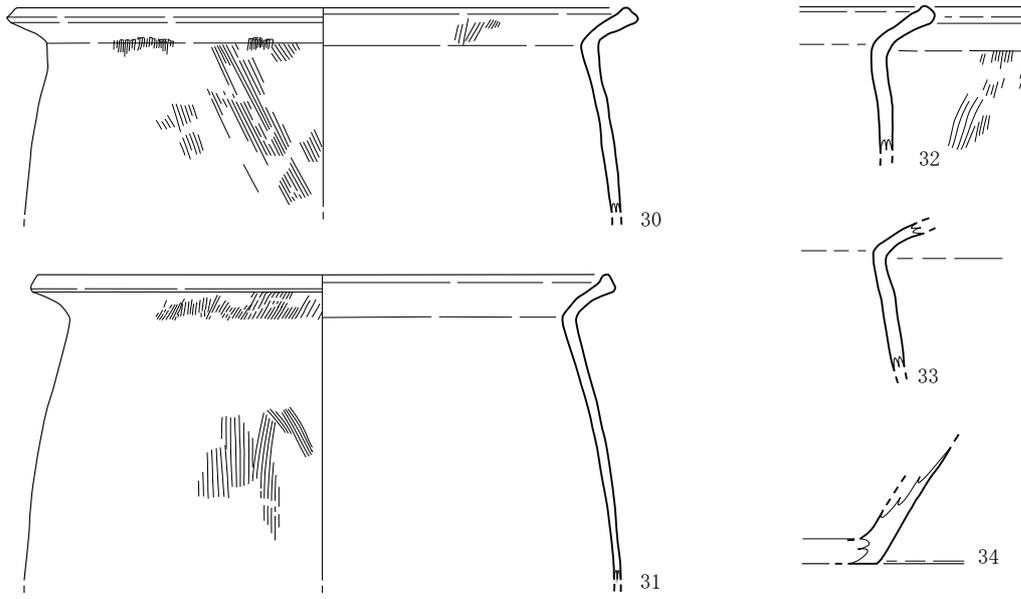
SI02



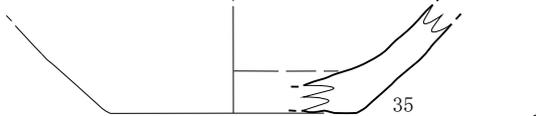
第21図 弥生土器実測図(1)

0 (1/3) 10cm

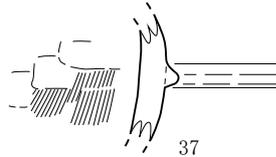
SK19



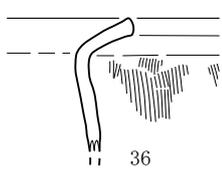
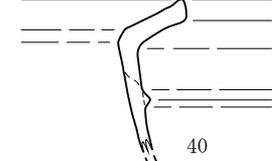
SP18



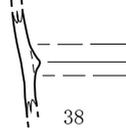
SP11(SA04)



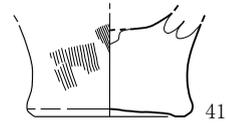
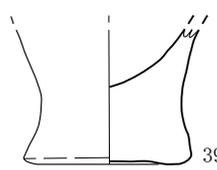
遺構外



SP32(SA02)



SP48

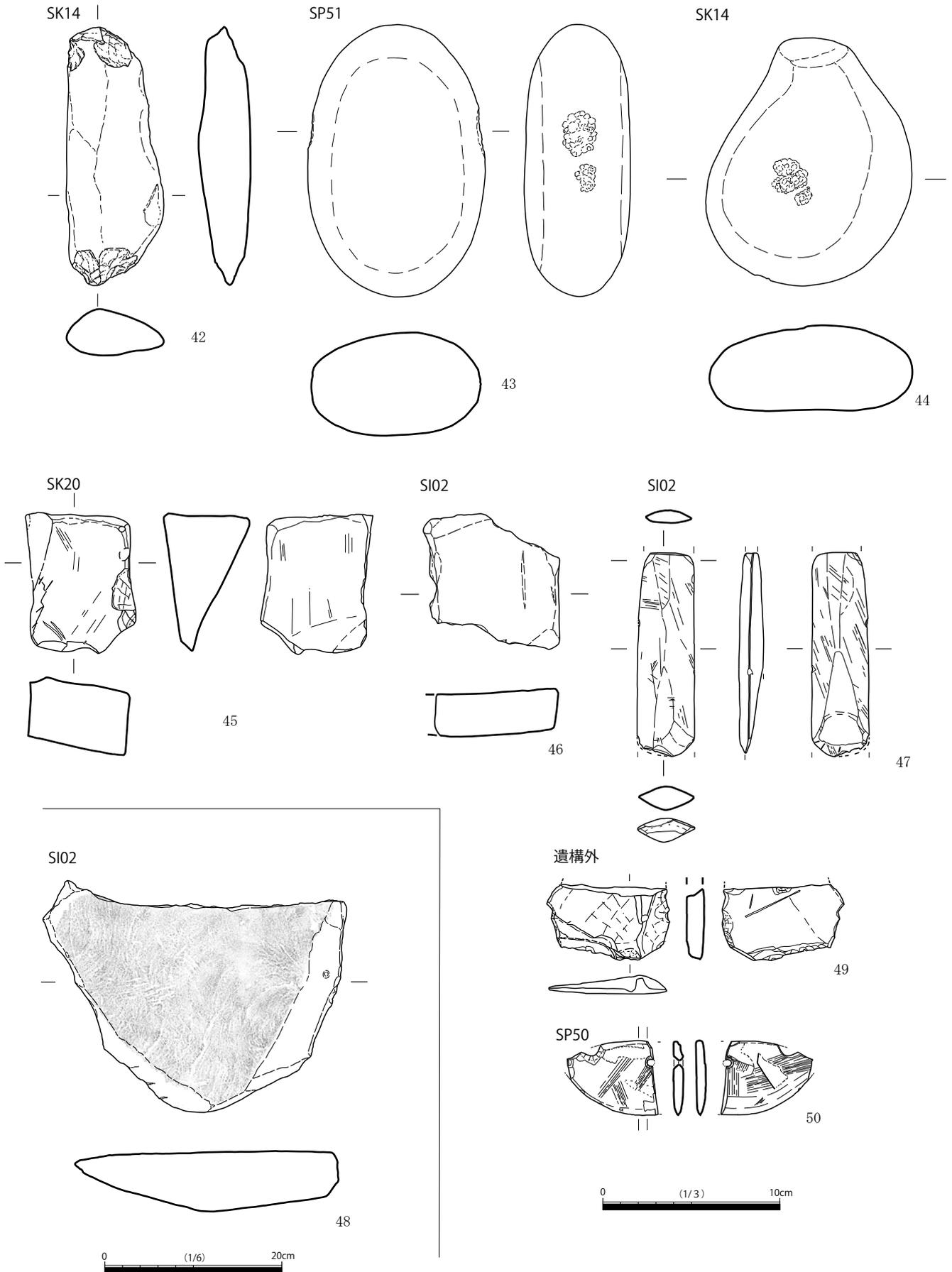


0 (1/3) 10cm

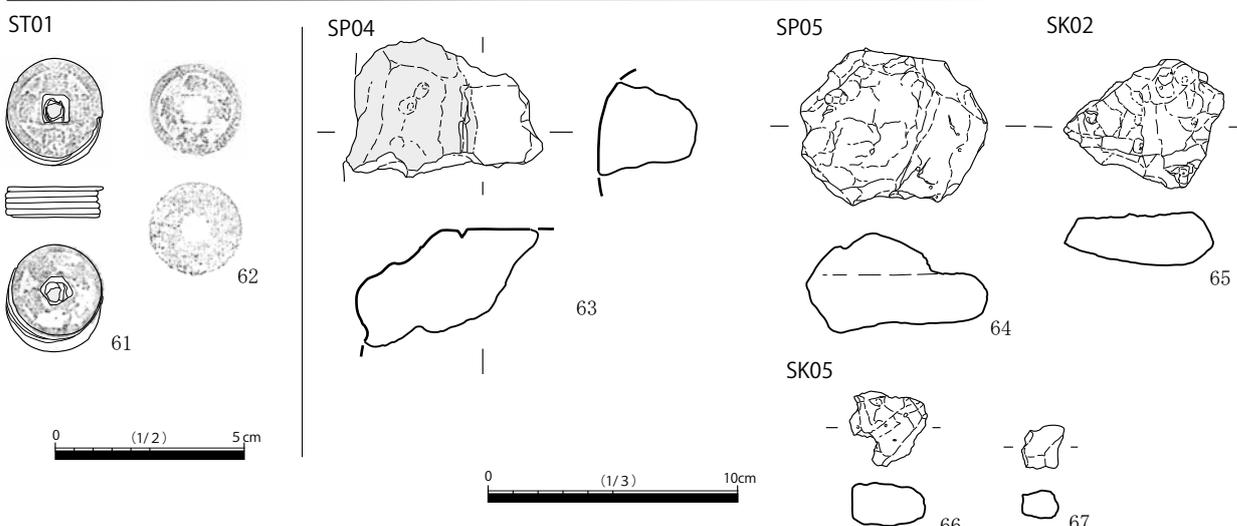
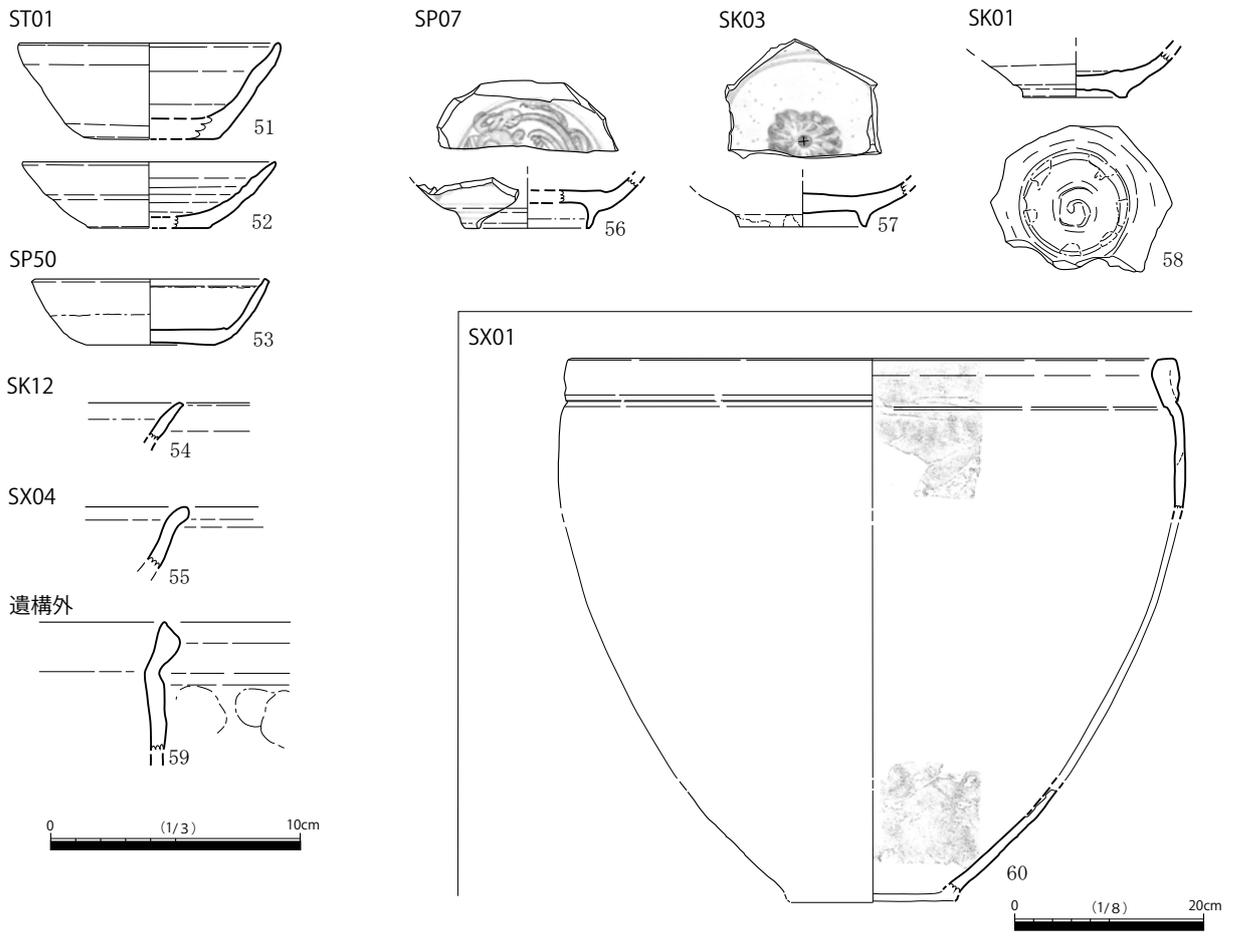
第 22 図 弥生土器実測図 (2)

(2) 石器

42は打製石斧。石材は砂岩で両端両面に剥離が残る。43は敲石。側面に敲打痕が残る。花崗岩製。45・46は砥石。45は赤色頁岩製。使用面は両面で目が粗く荒砥石。破損品。46は砂岩製。三面を研砥面としている。47は石剣。剣身部にあたる。凝灰岩製。両端部は破損しており、剣先側の破断面を研磨により平坦にし、斜めに折れた柄部側の破断面を再研磨して刃部を作り、石剣として造出された際の両側の刃部を研磨による刃潰しを行っている再加工を施した転用品である。身部中央に剣先に向かって稜が走るが上部の破損部下部の稜は再加工の研磨でなくしているため、断面はにぶい菱形。石鑿へ転用品の可能性はある。48は台石。凝灰質砂岩。使用面は2面。鉄器等の道具の使用際についたと思われる溝が残る 49は打製石斧。赤色頁岩製。破損品。刃部には使用による刃こぼれが僅かにみられる。50は石包丁。赤色頁岩製。破損品。丁寧な研磨による成形で両面から穿孔が開けられている。



第 23 図 石器類実測図



第 24 図 中世遺物実測図

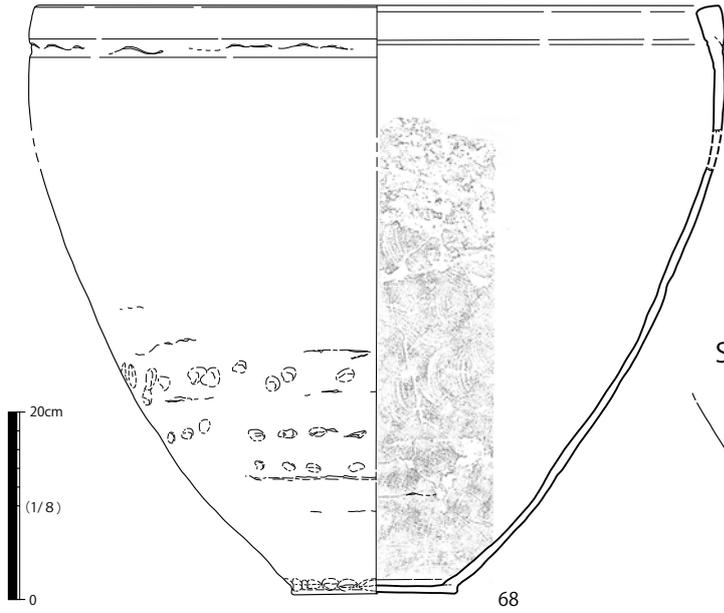
中世遺物

柱穴・土坑ほかから 13～16 世紀の遺物が出土した。

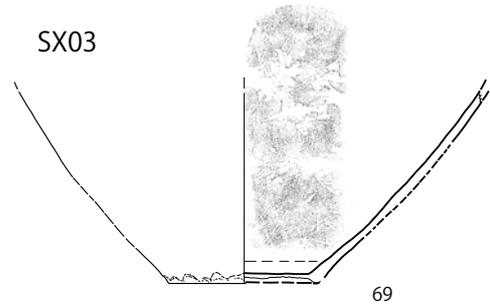
51・52 は墓 ST01 出土の 14 世紀前半の土師器杯である。52 は 3 割程度の遺存度である。53～58 は貿易陶磁器であり、53・54 は 13～14 世紀の白磁皿、55 は 14～15 世紀の青磁碗、56・57 は 16 世紀の青花磁器皿、58 は 15～16 世紀の朝鮮王朝陶器皿である。60 は埋甕遺構 SX01 出土の瓦質土器大甕であり、付近にある別遺構（SX04）出土の口縁部を同一個体と認定して図上復元した。16 世紀の遺物である。

61 は墓 ST01 出土の繒銭で 6 枚の銅銭が銹着し、孔中に植物質の紐が残る。両端の銅銭は皇宋通

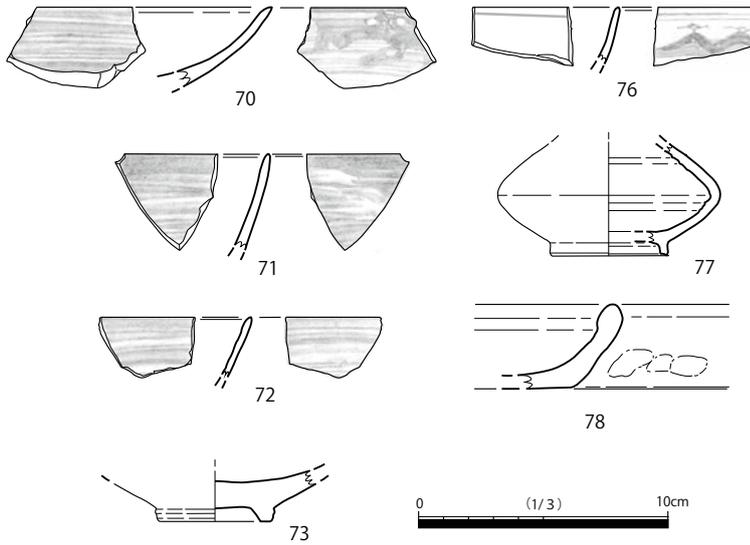
SX02



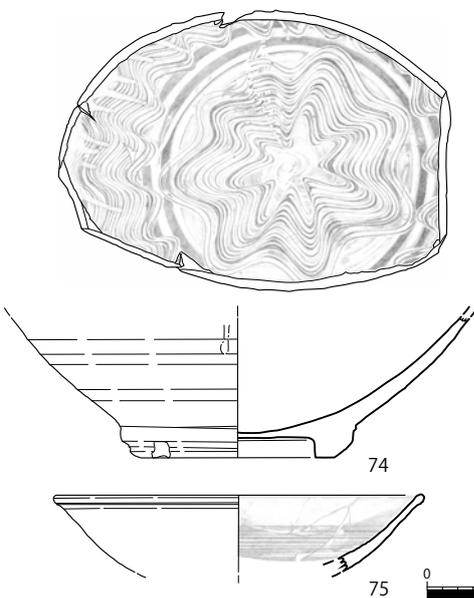
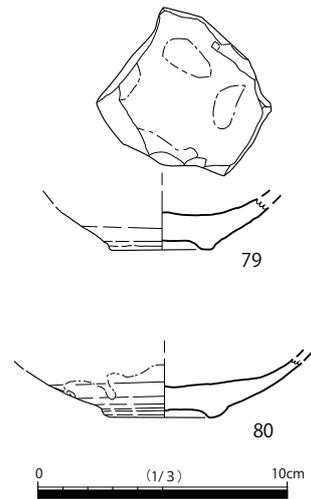
SX03



SX04



遺構外



第 25 図 近世遺物実測図

宝（1039年初鑄）および熙寧元宝（1068年初鑄）である。62は61から遊離したものとみられ、錢種を特定できない。63は鞆羽口片、64～67は鉄滓（64・65は椀形滓）である。

近世遺物

埋甕遺構・谷状の遺構ほかから17～18世紀の遺物が出土した。

68・69は埋甕遺構に埋設された土師器（佐野焼）大甕であり、68はSX02、69はSX03に伴う。いずれも内面に同心円状のタタキ痕がみられる。器形や口縁部形状などが萩城跡（外堀地区）2層のものに近似することから、18世紀後半の遺物とみられる。

70～78は谷状の遺構SX04出土の17～18世紀の遺物である。萩焼（70～72）・肥前陶磁器（73～77）・土師器（78）がみられる。

79・80は遺構に伴わない状態で出土した17世紀前半の肥前陶器である。

第1表 出土土器・陶磁器観察一覧表

No.	挿図	図版	出土場所	種別	器種	法量 (cm)			胎土	焼成	色調 (内) (外)	主な調整 (内) (外)	備考
						口径 (復元値)	器高 [残存値]	底径 (復元値)					
1	20	19	SP10	縄文土器	深鉢	-	[2.7]	-	やや粗	やや良	褐灰 7.5YR4/1 灰褐 7.5YR4/2	ナデか 条痕	
6	21	19	SK08	弥生土器	壺	-	[3.6]	-	やや粗	やや良	明黄橙色 10YR7/6 にぶい黄橙色 10YR6/4	ナデ ハケ目	
7	21	19	SK08	弥生土器	壺	-	[8.1]	-	やや粗	やや良	橙色 7.5YR7/6 橙色 2.5YR6/8	摩滅のため不明瞭 摩滅のため不明瞭	外面に黒斑。
8	21	19	SK08	弥生土器	壺	-	[5.5]	5.6	やや粗	不良	橙色 7.5YR7/6 にぶい橙色 7.5YR6/4	摩滅のため不明瞭 ハケ目、ナデ	
9	21	19	SK08	弥生土器	甕	(21.6)	[17.9]	-	やや粗	やや良	橙色 7.5YR7/6 橙色 5YR7/6	摩滅のため不明瞭 摩滅のため不明瞭	NO.13 と同一個体か。
10	21	19	SK08	弥生土器	甕	-	[3.2]	-	やや粗	やや良	褐灰色 7.5YR5/1 にぶい褐色 7.5YR6/3	摩滅のため不明瞭 ハケ目、ナデ	
11	21	19	SK08	弥生土器	甕	-	[3.0]	-	やや粗	不良	灰褐色 10YR5/2 にぶい黄橙色 10YR6/3	摩滅のため不明瞭 ハケ目、ナデ	
12	21	19	SK08	弥生土器	甕	-	[5.1]	-	やや粗	不良	にぶい橙色 7.5YR6/4 にぶい褐色 7.5YR5/4	ナデ ハケ目、ナデ	
13	21	19	SK08	弥生土器	甕	-	[8.9]	5.6	やや粗	やや良	橙色 7.5YR7/6 橙色 5YR7/6	摩滅のため不明瞭 摩滅のため不明瞭	NO.9 と同一個体か。
14	21	19	SK08	弥生土器	鉢	25.4	18.9	9.3	やや粗	やや良	橙色 7.5YR7/6 橙色 5YR7/6	ハケ目、ナデ ハケ目、ナデ	内面に黒斑。
15	21	19	SK18	弥生土器	甕	-	[4.1]	-	やや粗	やや良	橙色 7.5YR7/6 橙色 7.5YR7/6	摩滅のため不明瞭 摩滅のため不明瞭	
16	21	19	SK18	弥生土器	甕	-	[3.3]	-	やや精良	やや良	明黄褐色 10YR7/6 橙色 7.5YR7/6	摩滅のため不明瞭 ハケ目	
17	21	19	SK14	弥生土器	壺	-	[2.8]	-	やや粗	良	赤灰色 2.5YR5/1 褐灰色 5YR4/1	ナデ ハケ目、ミガキ	
18	21	19	SK14	弥生土器	甕	-	[5.5]	(6.0)	やや精良	やや良	赤灰色 2.5YR6/1 橙色 5YR7/6	摩滅のため不明瞭 ハケ目、ナデ	
19	21	19	SK07	弥生土器	壺	-	[1.4]	-	やや粗	良	にぶい橙色 7.5YR7/4 にぶい橙色 7.5YR7/4	摩滅のため不明瞭 ナデ	
20	21	20	SK07	弥生土器	甕	-	[10.5]	-	やや粗	やや良	にぶい橙色 7.5YR7/4 橙色 7.5YR7/6	摩滅のため不明瞭 ハケ目、ナデ	北部九州系。
21	21	20	SK07	弥生土器	甕	-	[5.0]	4.8	やや粗	やや良	にぶい橙色 7.5YR7/4 橙色 2.5YR6/6	ナデか ハケ目	
22	21	19	SK09	弥生土器	壺	-	[2.6]	-	やや粗	やや良	橙色 5YR6/6 橙色 7.5YR6/6	ナデ ハケ目、ナデ	
23	21	20	SK09	弥生土器	壺	-	[1.4]	-	やや粗	やや良	橙色 5YR6/6 にぶい黄橙色 10YR7/3	摩滅のため不明瞭 ハケ目、ミガキ	
24	21	20	SI01	弥生土器	壺	-	[4.2]	-	やや精良	良	橙色 5YR7/8 橙色 5YR7/8	摩滅のため不明瞭 摩滅のため不明瞭	
25	21	20	SI01	弥生土器	高杯	-	[7.5]	-	やや粗	良	浅黄橙色 7.5YR8/6 黄橙色 10YR8/6	ナデ ミガキか、 摩滅のため不明瞭	透かし8ヶ所か。
26	21	20	SI02	弥生土器	甕	-	[4.2]	-	やや粗	やや良	にぶい橙色 7.5YR7/4 にぶい橙色 7.5YR6/4	摩滅のため不明瞭 摩滅のため不明瞭	
27	21	20	SI02	弥生土器	甕	-	[5.0]	-	やや粗	やや良	橙色 5YR6/6 にぶい橙色 5YR6/4	摩滅のため不明瞭 ハケ目、ナデ	

No.	挿図	図版	出土場所	種別	器種	法量 (cm)			胎土	焼成	色調 (内) (外)	主な調整 (内) (外)	備考
						口径 (復元値)	器高 [残存値]	底径 (復元値)					
28	21	20	SI02	弥生土器	壺	-	[2.6]	(4.2)	やや粗	やや良	にぶい橙色 7.5YR6/4 黒褐色 10YR3/1	ハケ目 ハケ目	
29	21	20	SI02	弥生土器	壺	-	[2.6]	(7.2)	やや粗	やや良	にぶい赤褐色 5YR5/4 明赤褐色 5YR5/6	摩滅のため不明瞭 ハケ目か	
30	22	20	SK19	弥生土器	甕	(24.4)	[8.2]	-	やや粗	やや良	浅黄橙色 7.5YR8/4 にぶい褐色 7.5YR6/3	ハケ目、ナデ ハケ目、ナデ	
31	22	20	SK19	弥生土器	甕	(22.8)	[12.3]	-	やや粗	やや良	褐灰色 10YR5/1 橙色 5YR7/6	ナデ ハケ目、ナデ	
32	22	20	SK19	弥生土器	甕	-	[5.9]	-	やや粗	やや良	にぶい黄褐色 10YR7/2 浅黄褐色 7.5YR8/4	摩滅のため不明瞭 ハケ目、ナデ	
33	22	20	SK19	弥生土器	甕	-	[5.9]	-	やや粗	やや良	灰褐色 7.5YR5/2 褐色 5YR7/6	摩滅のため不明瞭 ハケ目、ナデ	
34	22	20	SK19	弥生土器	壺	-	[4.7]	-	やや粗	やや良	褐色 7.5YR6/8 褐色 7.5YR6/8	摩滅のため不明瞭 摩滅のため不明瞭	
35	22	-	SP18	弥生土器	壺	-	[4.3]	(9.8)	やや粗	やや良	褐色 5YR7/6 にぶい黄褐色 10YR7/4	摩滅のため不明瞭 摩滅のため不明瞭	
36	22	21	SP18	弥生土器	甕	-	[5.3]	-	やや精良	やや良	褐色 5YR7/6 にぶい黄褐色 10YR7/4	ナデ ハケ目、ナデ、 ミガキ	
37	22	21	SP11 (SA04)	弥生土器	壺	-	[5.1]	-	やや粗	やや良	にぶい褐色 7.5YR6/4 にぶい褐色 5YR6/4	ハケ目、ナデ ハケ目	
38	22	21	SP32 (SA02)	弥生土器	甕	-	[4.3]	-	やや粗	やや良	褐色 7.5YR7/6 浅黄褐色 10YR8/4	摩滅のため不明瞭 摩滅のため不明瞭	
39	22	21	SP48	弥生土器	甕	-	[5.4]	(6.8)	精良	良	褐色 7.5YR7/6 褐色 5YR7/6	ナデ 摩滅のため不明瞭	
40	22	21	遺構 検出	弥生土器	甕	-	[5.8]	-	やや精良	やや良	にぶい褐色 5YR7/3 明赤灰色 2.5YR7/2	摩滅のため不明瞭 摩滅のため不明瞭	北部九州系。
41	22	21	遺物 包含層	弥生土器	甕	-	[4.2]	(6.6)	やや粗	やや良	にぶい褐色 7.5YR7/3 にぶい褐色 7.5YR7/4	ナデ ハケ目、ミガキ	調査区南西部遺物包含層から出土。
51	24	22	ST01	土師器	杯	(10.2)	3.8	(5.3)	やや精良	良	褐色 5YR7/6 浅黄褐色 7.5YR8/3	回転ナデ 回転ナデ、回転糸切り	
52	24	22	ST01	土師器	杯	(10.0)	2.65	(4.6)	精良	良	浅黄褐色 7.5YR8/3 浅黄褐色 7.5YR8/3	回転ナデ 回転ナデ、 回転糸切り	
53	24	22	SP50	白磁	皿	(9.4)	2.65	(5.0)	精良	良	胎土：灰白色 5Y8/1 釉：灰白色 10Y8/2	回転ナデ 回転ナデ、 回転糸切り	口縁端面取りおよび釉ハギ。体部下半～高台無釉。
54	24	22	SK12	白磁	皿	-	[1.0]	-	精良	良	胎土：灰白色 N8/ 釉：灰白色 7.5Y8/1	回転ナデ 回転ナデ	口縁端面取りおよび釉ハギ。
55	24	22	SX04	青磁	椀	-	[2.4]	-	精良	良	胎土：オリーブ黄色 5Y6/3 釉：黄灰色 2.5Y6/1	回転ナデ 回転ナデ	
56	24	22	SP07	青花	皿	-	[2.1]	(4.8)	精良	良	胎土：灰白色 2.5Y8/1 釉：明青灰色 5B7/1	回転ナデ 回転ナデ、 回転糸切り	景徳鎮窯。内面に雨龍文。豊付無釉。
57	24	22	SK03	青花	皿	(9.4)	2.65	(5.0)	精良	良	胎土：浅黄褐色 10Y8/4 釉：灰白色 5Y8/2	回転ナデ 回転ナデ、 回転糸切り	漳州窯。豊付面取り。豊付～高台内無釉。
58	24	22	SK01	朝鮮王朝陶器	皿	-	[1.8]	4.2	やや粗	良	オリーブ灰色 5GY6/1 オリーブ灰色 5GY6/1	回転ナデ 回転ヘラケズリ	全釉。見込みに砂目6か所。
59	24	22	遺構外	瓦質土器	鍋	-	[5.1]	-	やや精良	やや良	灰白色 10YR7/1 灰色 N5/	ハケ目、ナデ ナデ、指頭痕	調査区南西部遺物包含層から出土。
60	24	23	SX01 SX04	瓦質土器	大甕	(66.0)	-	-	やや粗	やや良	青灰色 5B5/1	タタキ、ハケ目、 粗いナデ タタキ、粗いナデ	体部はSX01に埋設、口縁部はSX04埋土から出土。
68	25	23	SX02	土師器	大甕	(71.8)	(62.0)	17.3	やや粗	やや良	灰白色 2.5Y8/2 灰白色 2.5Y8/2	タタキ、ハケ目、 粗いナデ タタキ、粗いナデ	佐野焼。 底部外面に板目。
69	25	23	SX03	土師器	大甕	-	-	(16.0)	やや粗	やや良	灰白色 2.5Y8/2 灰白色 2.5Y8/2	タタキ、ハケ目、 ナデ 粗いナデ	佐野焼。 外面の剥落顕著。
70	25	24	SX04	陶器	椀	-	[3.2]	-	精良	良	胎土：にぶい褐色 7.5YR6/3 釉：灰白色 5Y8/1	回転ナデ 回転ナデ	内外面刷毛目。 外面下方無釉。
71	25	24	SX04	陶器	椀	-	[3.9]	-	精良	良	胎土：にぶい褐色 5YR6/4 釉：灰白色 5Y8/1	回転ナデ 回転ナデ	内外面刷毛目。

No.	挿図	図版	出土場所	種別	器種	法量 (cm)			胎土	焼成	色調 (内) (外)	主な調整 (内) (外)	備考
						口径 (復元値)	器高 [残存値]	底径 (復元値)					
72	25	24	SX04	陶器	椀	-	[2.4]	-	精良	良	胎土：にぶい黄橙色 10Y7/2 釉：灰白色 5Y8/1	回転ナデ 回転ナデ	内外面刷毛目。 外面下方無釉。
73	25	24	SX04	陶器	椀	-	[2.0]	(4.4)	精良	良	灰白色 10YR8/2 にぶい黄橙色 10YR7/3	回転ナデ、 回転ヘラケズリ 回転ナデ	ケズリ出し輪状高台。
74	25	24	SX04	陶器	鉢	-	[9.3]	(12.8)	精良	良	胎土：明赤褐色 2.5YR5/6 釉：灰白色 10Y8/2	回転ナデ 回転ナデ、 回転ヘラケズリ	内面に撚刷毛目および緑 釉。外面土灰釉垂れ、白化 粧土の飛び痕。高台に指頭 痕3か所。肥前。
75	25	24	SX04	陶器	鉢	(24.4)	[5.1]	-	精良	良	胎土：にぶい橙色 7.5YR7/4 釉：にぶい赤褐色 5YR5/3	回転ナデ 回転ナデ、 回転ヘラケズリ	内面刷毛目。内面上半～外 面に鉄釉。
76	25	24	SX04	磁器	椀	-	[2.3]	-	精良	良	胎土：灰白色 2.5Y8/1 釉：灰白色 N7/	回転ナデ 回転ナデ	外面に山水文。 肥前。
77	25	24	SX04	白磁	油壺	-	[4.5]	(4.6)	精良	良	胎土：灰白色 2.5Y8/1 釉：灰白色 7.5Y8/1	回転ナデ 回転ナデ	内面無釉。畳付無釉。
78	25	24	SX04	土師 器	焙烙	-	3.4	-	やや 精良	やや 良	にぶい褐色 7.5YR6/4 にぶい褐色 7.5YR6/4	ナデ ナデ、指頭痕	佐野焼
79	25	24	遺構外	陶器	皿	-	[2.0]	(4.2)	精良	良	オリーブ灰色 10Y6/2 暗赤褐色 7.5Y3/2	回転ナデ 回転ヘラケズリ	見込みに砂目3か所。 ケズリ出し輪状高台。
80	25	24	遺構外	陶器	皿	-	[2.3]	(4.7)	やや 精良	やや 良	胎土：にぶい橙色 7.5YR7/4 釉：灰白色 7.5Y7/1	回転ナデ 回転ナデ、回転ヘラ ケズリ	見込みに砂目。 初期肥前陶器（岸嶺系か）。

第2表 出土石器類観察一覧表

No.	挿図	図版	出土場所	器種	法量 (cm)			重さ (g)	石材 材料	備考
					長さ [残存値]	幅 [残存値]	厚さ [残存値]			
2	20	19	SP33	石鏃	[2.8]	[1.7]	0.4	1.4	安山岩	凹基式。先端と基部両端を欠失。
3	20	19	SP01	石鏃	[1.7]	1.3	0.4	0.7	黒曜石	平基無茎式。先端を欠失。姫島産石材。
4	20	19	遺構外	二次加工 のある 剥片	1.3	2.5	4.0	1.5	黒曜石	周辺に加工痕。不純物を多く含む。
5	20	19	遺構外	二次加工 のある 剥片	1.5	2.2	0.7	1.7	黒曜石	両面に加工痕あり。腰岳産石材か。
42	23	21	SK14	打製石斧	19.5	5.4	2.9	245	砂岩	両端を両面剥離。
43	23	21	SP51	敲石	15.2	9・9	5.7	1350	花崗岩	敲打痕あり。自然面残る。
44	23	21	SK14	凹石	13.9	11.0	4.7	976	砂岩	敲打痕あり。
45	23	21	SK20	砥石	[7.8]	[5.3]	4.9	253	赤色頁岩	二面使用。
46	23	21	SI02	砥石	[7.1]	[7.6]	2.4	232	砂岩	三面使用。折損。擦痕は不明瞭。
47	23	22	SI02	石剣	[11.5]	3.2	1.3	59.5	凝灰岩	研磨による形成。破損後、二次加工によりノミとして使用か。
48	23	22	SI02	台石	23.5	33.8	6・7	7 kg	凝灰質 砂岩	二面使用。
49	23	21	遺構外	打製石斧	[4.0]	[6.7]	1.1	39.9	赤色頁岩	周辺の調整は粗い。基部および刃部左側欠失。
50	23	22	SP50	石包丁	[4.1]	4.6	0.5	13.7	赤色頁岩	紐穴は両面穿孔。全面研磨。使用痕有り。流入。

第3表 鍛冶関連遺物観察一覧表

No.	挿図	図版	出土場所	器種	法量 (cm)			重さ (g)	備考
					最大長 [残存値]	最大幅 [残存値]	最大厚 [残存値]		
63	24	23	SP04	韃羽口	-	-	-	131.0	先端部の破損。石英・長石・褐色粒を含む。
64	24	23	SP05	鉄滓	7.3	6.2	3.9	221.0	
65	24	23	SK02	鉄滓	5.6	6.8	1.9	79.4	
66	24	23	SK05	鉄滓	3.2	3.1	1.9	20.8	
67	24	23	SK05	鉄滓	1.7	1.8	1.2	3.1	

IV 自然科学分析

1 放射性炭素年代測定

パレオ・ラボ AMS 年代測定グループ

伊藤 茂・佐藤正教・廣田正史・山形秀樹

Zaur Lomtadze・小林克也

1. はじめに

山口県下関市の山田遺跡から出土した試料について、加速器質量分析法（AMS 法）による放射性炭素年代測定を行った。なお、同一試料を用いて樹種同定も行われている（樹種同定の項参照）。

2. 試料と方法

試料は、SI01 から 2 点（試料 No.1：PLD-39724、試料 No.2：PLD-39725）、SI02 から 2 点（試料 No.3：PLD-39726、試料 No.4：PLD-39727）、SK19 から 2 点（試料 No.6：PLD-39729、試料 No.7：PLD-39730）、SP21 から 1 点（試料 No.8：PLD-39731）と、SK14 から 1 点（試料 No.5：PLD-39728）の、計 8 点の出土炭化材である。いずれも最終形成年輪は残っていなかった。

遺構の時期は、SI01 が弥生時代中期後半、SK19 と SP21、SK14 が弥生時代中期、SI02 が弥生時代後期後半と考えられている。測定試料の情報、調製データは第 4 表のとおりである。

試料は調製後、加速器質量分析計（パレオ・ラボ、コンパクト AMS：NEC 製 1.5SDH）を用いて測定した。得られた ^{14}C 濃度について同位体分別効果の補正を行った後、 ^{14}C 年代、暦年代を算出した。

第 4 表 測定試料および処理

測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理
PLD-39724	試料 No.1 遺構：SI01	種類：炭化材（スタジイ） 試料の性状：最終形成年輪以外 部位不明 状態：dry	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2 mol/L, 水酸化ナトリウム：1.0 mol/L, 塩酸：1.2 mol/L)
PLD-39725	試料 No.2 遺構：SI01	種類：炭化材（広葉樹） 試料の性状：最終形成年輪以外 部位不明 状態：dry	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2 mol/L, 水酸化ナトリウム：1.0 mol/L, 塩酸：1.2 mol/L)
PLD-39726	試料 No.3 遺構：SI02	種類：炭化材（サクラ属） 試料の性状：最終形成年輪以外 部位不明 状態：dry	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2 mol/L, 水酸化ナトリウム：1.0 mol/L, 塩酸：1.2 mol/L)
PLD-39727	試料 No.4 遺構：SI02	種類：炭化材（スタジイ） 試料の性状：最終形成年輪以外 部位不明 状態：dry	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2 mol/L, 水酸化ナトリウム：1.0 mol/L, 塩酸：1.2 mol/L)
PLD-39728	試料 No.5 遺構：SK14	種類：炭化材（マツ属複雑管束亜属） 試料の性状：最終形成年輪以外 部位不明 状態：dry	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2 mol/L, 水酸化ナトリウム：1.0 mol/L, 塩酸：1.2 mol/L)
PLD-39729	試料 No.6 遺構：SK19	種類：炭化材（クリ） 試料の性状：最終形成年輪以外 部位不明 状態：dry	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2 mol/L, 水酸化ナトリウム：1.0 mol/L, 塩酸：1.2 mol/L)
PLD-39730	試料 No.7 遺構：SK19	種類：炭化材（散孔材） 試料の性状：最終形成年輪以外 部位不明 状態：dry	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2 mol/L, 水酸化ナトリウム：1.0 mol/L, 塩酸：1.2 mol/L)
PLD-39731	試料 No.8 遺構：SP21	種類：炭化材（マツ属複雑管束亜属） 試料の性状：最終形成年輪以外 部位不明 状態：dry	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2 mol/L, 水酸化ナトリウム：1.0 mol/L, 塩酸：1.2 mol/L)

3. 結果

第5表に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比 ($\delta^{13}\text{C}$)、同位体分別効果の補正を行って暦年較正に用いた年代値と較正によって得られた年代範囲、慣用に従って年代値と誤差を丸めて表示した ^{14}C 年代、暦年較正結果を、第26図にマルチプロット図を、第27図に暦年較正結果をそれぞれ示す。暦年較正に用いた年代値は下1桁を丸めていない値であり、今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。

^{14}C 年代は AD1950 年を基点にして何年前かを示した年代である。 ^{14}C 年代 (yrBP) の算出には、 ^{14}C の半減期として Libby の半減期 5568 年を使用した。また、付記した ^{14}C 年代誤差 ($\pm 1\sigma$) は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の ^{14}C 年代がその ^{14}C 年代誤差内に入る確率が 68.2%であることを示す。

なお、暦年較正の詳細は以下のとおりである。

暦年較正とは、大気中の ^{14}C 濃度が一定で半減期が 5568 年として算出された ^{14}C 年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の ^{14}C 濃度の変動、および半減期の違い (^{14}C の半減期 5730 ± 40 年) を較正して、より実際の年代値に近いものを算出することである。

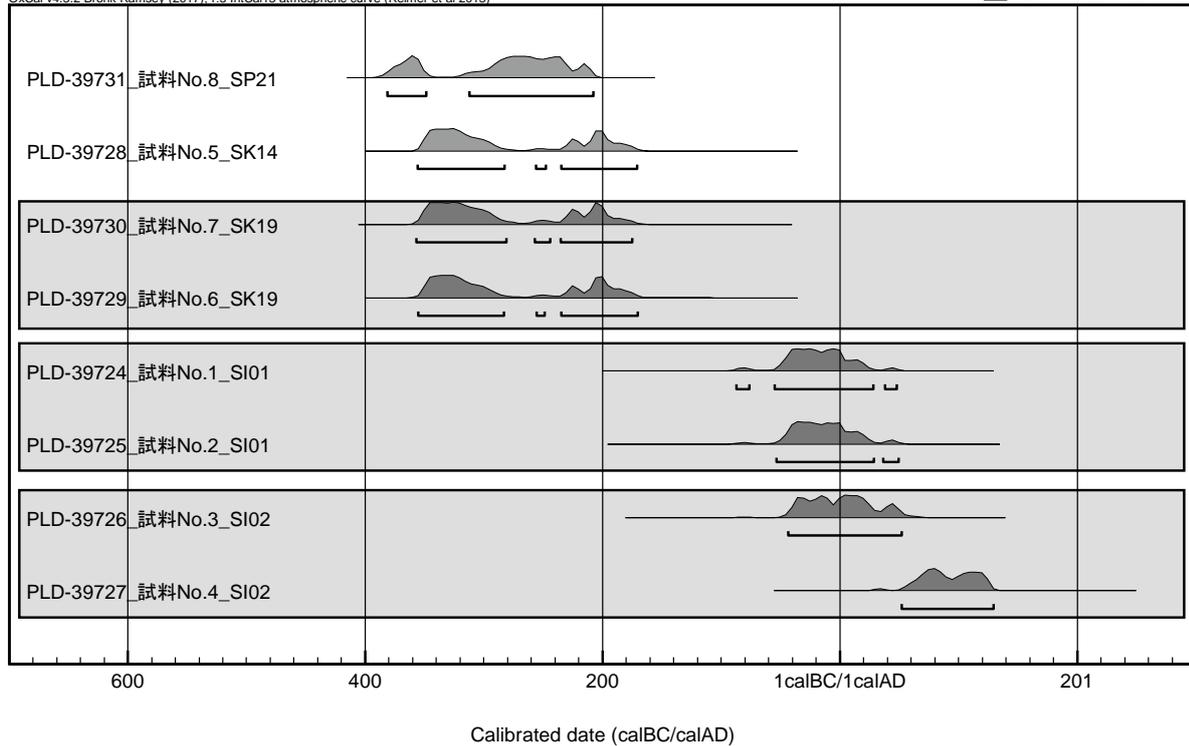
^{14}C 年代の暦年較正には OxCal4.3 (較正曲線データ: IntCal13) を使用した。なお、 1σ 暦年代範囲は、OxCal の確率法を使用して算出された ^{14}C 年代誤差に相当する 68.2% 信頼限界の暦年代範囲であり、同様に 2σ 暦年代範囲は 95.4% 信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は ^{14}C 年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年較正曲線を示す。

第5表 放射性炭素年代測定および暦年較正の結果

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	暦年較正用年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代を暦年代に較正した年代範囲	
				1σ 暦年代範囲	2σ 暦年代範囲
PLD-39724 SI01 試料 No.1	- 25.20 \pm 0.22	2021 \pm 19	2020 \pm 20	45 cal BC- 3 cal AD (68.2%)	88-77 cal BC (2.0%) 56 cal BC-29 cal AD (91.5%) 39-49 cal AD (1.9%)
PLD-39725 SI01 試料 No.2	- 26.86 \pm 0.20	2017 \pm 19	2015 \pm 20	44 cal BC- 4 cal AD (68.2%)	54 cal BC-30 cal AD (92.3%) 37-50 cal AD (3.1%)
PLD-39726 SI02 試料 No.3	- 26.90 \pm 0.20	2000 \pm 19	2000 \pm 20	38 cal BC-23 cal AD (68.2%)	44 cal BC-53 cal AD (95.4%)
PLD-39727 SI02 試料 No.4	- 29.65 \pm 0.19	1913 \pm 19	1915 \pm 20	68- 90 cal AD (34.4%) 100-123 cal AD (33.8%)	53-130 cal AD (95.4%)
PLD-39728 SK14 試料 No.5	- 26.78 \pm 0.20	2176 \pm 19	2175 \pm 20	351-301 cal BC (53.9%) 210-196 cal BC (14.3%)	357-283 cal BC (59.7%) 257-248 cal BC (1.2%) 235-172 cal BC (34.5%)
PLD-39729 SK19 試料 No.6	- 25.88 \pm 0.22	2175 \pm 19	2175 \pm 20	351-301 cal BC (52.9%) 210-195 cal BC (15.3%)	356-284 cal BC (59.2%) 256-249 cal BC (1.0%) 235-171 cal BC (35.2%)
PLD-39730 SK19 試料 No.7	- 29.79 \pm 0.22	2181 \pm 19	2180 \pm 20	352-298 cal BC (52.0%) 228-222 cal BC (4.6%) 211-198 cal BC (11.6%)	358-282 cal BC (61.2%) 258-245 cal BC (2.5%) 236-176 cal BC (31.7%)
PLD-39731 SP21 試料 No.8	- 25.59 \pm 0.24	2238 \pm 20	2240 \pm 20	371-354 cal BC (14.0%) 291-232 cal BC (54.2%)	382-349 cal BC (21.7%) 313-208 cal BC (73.7%)

4. 考察

以下、 2σ 暦年代範囲 (確率 95.4%) に着目して、測定結果の古い順に結果を整理する。また、測定結果のマルチプロット図を第26図に示す。なお、弥生時代の暦年代については、藤尾 (2013) を



第 26 図 マルチプロット図

参照した。なお、木材の場合、最終形成年輪部分を測定すると枯死もしくは伐採年代が得られるが、内側の年輪を測定すると、最終形成年輪から内側であるほど古い年代が得られる（古木効果）。今回の試料はいずれも最終形成年輪が残っていなかったため、測定結果は古木効果の影響を受けている可能性があり、実際に枯死もしくは伐採された年代は、測定結果よりも新しい年代である可能性がある。

SP21 の試料 No.8 (PLD-39731) は 382-349 cal BC (21.7%) および 313-208 cal BC (73.7%) で、紀元前 4 世紀前半～3 世紀末の暦年代を示した。これは、弥生時代前期後葉～中期中葉に相当する。発掘調査所見によると、SP21 は弥生時代中期と考えられており、調査所見と測定結果は整合的であった。

SK14 の試料 No.5 (PLD-39728) は 357-283 cal BC (59.7%)、257-248 cal BC (1.2%)、235-172 cal BC (34.5%) で、紀元前 4 世紀中頃～2 世紀前半の暦年代を示した。これは、弥生時代前期末～中期中葉に相当する。発掘調査所見によると、SK14 は弥生時代中期の遺構と考えられており、調査所見と測定結果は整合的であった。

SK19 の試料 No.7 (PLD-39730) は 358-282 cal BC (61.2%)、258-245 cal BC (2.5%)、236-176 cal BC (31.7%)、試料 No.6 (PLD-39729) は 356-284 cal BC (59.2%)、256-249 cal BC (1.0%)、235-171 cal BC (35.2%) で、いずれも紀元前 4 世紀中頃～2 世紀前半の暦年代を示した。これは、弥生時代前期末～中期中葉に相当する。発掘調査所見によると、SK19 は弥生時代中期と考えられており、調査所見と測定結果は整合的であった。

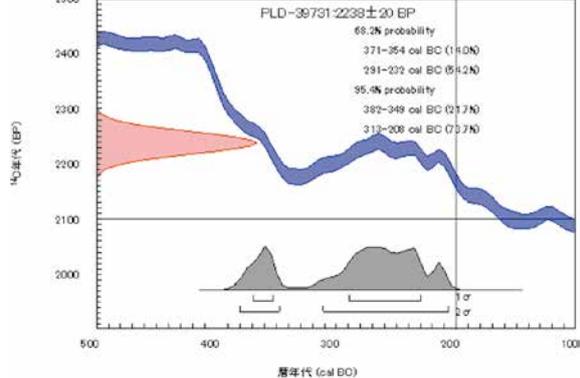
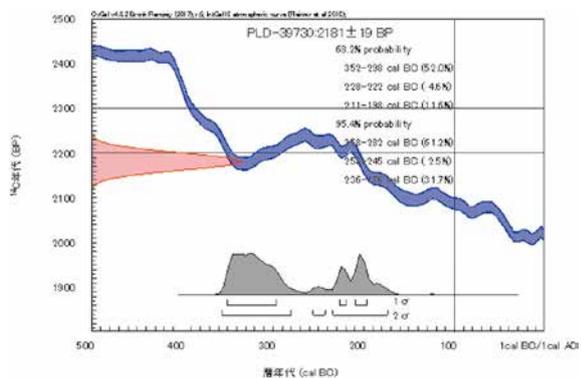
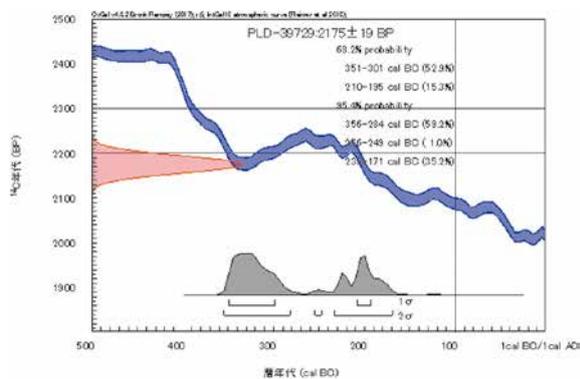
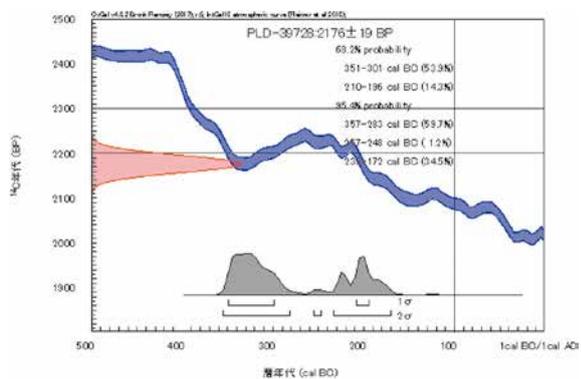
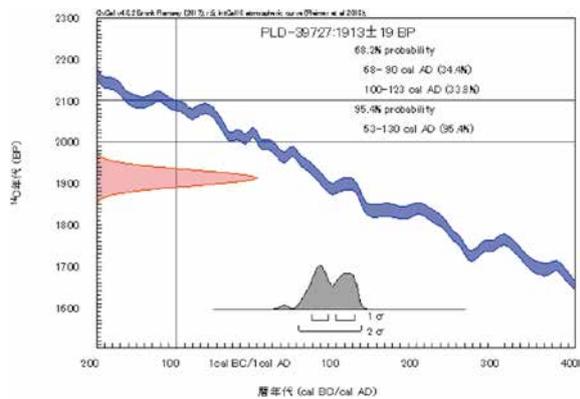
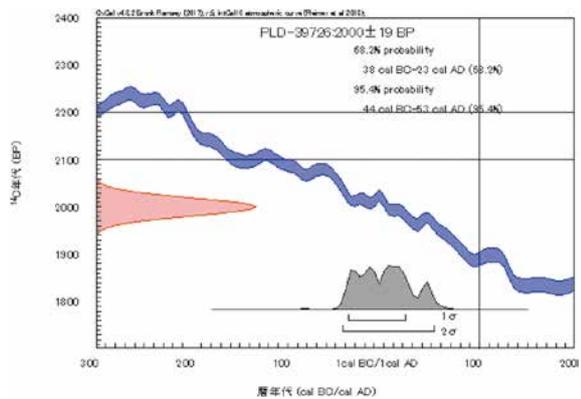
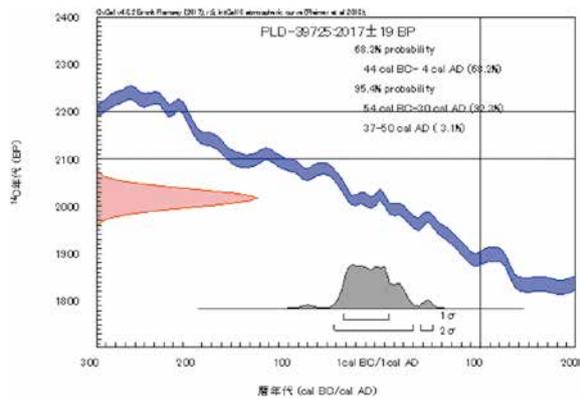
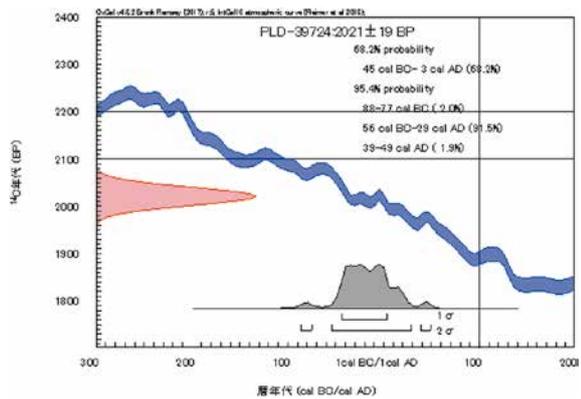
SI01 の試料 No.1 (PLD-39724) は 88-77 cal BC (2.0%)、56 cal BC-29 cal AD (91.5%)、39-49 cal AD (1.9%) で、紀元前 1 世紀前半～紀元後 1 世紀中頃の暦年代を示した。また、試料 No.2 (PLD-39725) は 54 cal BC-30 cal AD (92.3%) および 37-50 cal AD (3.1%) で、紀元前 1 世紀中頃～紀元後 1 世紀

中頃の暦年代を示した。いずれも弥生時代中期後葉～後期前半に相当する。発掘調査所見によると、A区 SI01 は弥生時代中期後半の遺構と考えられており、調査所見と測定結果は整合的であった。

SI02 の試料 No.3 (PLD-39726) は 44 cal BC-53 cal AD (95.4%) で、紀元前 1 世紀中頃～紀元後 1 世紀中頃の暦年代を示した。これは、弥生時代中期後葉～後期前半に相当する。また、試料 No.4 (PLD-39727) は 53-130 cal AD (95.4%) で、1 世紀中頃～2 世紀前半の暦年代を示した。これは、弥生時代後期前半に相当する。発掘調査所見によると、SI02 は弥生時代後期後半と考えられており、試料 No.3 は 130 年以上、試料 No.4 は 50 年以上古い暦年代を示した。これは、古木効果の影響による可能性や、古い時期の炭化材が再堆積した可能性などが考えられる。

引用・参考文献

- Bronk Ramsey, C. (2009) Bayesian Analysis of Radiocarbon dates. *Radiocarbon*, 51 (1) , 337-360.
- 藤尾慎一郎 (2013) 弥生文化像の新構築. 275p, 吉川弘文館.
- 中村俊夫 (2000) 放射性炭素年代測定法の基礎. 日本先史時代の ^{14}C 年代編集委員会編「日本先史時代の ^{14}C 年代」: 3-20, 日本第四紀学会.
- Reimer, P.J., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J.W., Blackwell, P.G., Bronk Ramsey, C., Buck, C.E., Cheng, H., Edwards, R.L., Friedrich, M., Grootes, P.M., Guilderson, T.P., Hafidason, H., Hajdas, I., Hatte, C., Heaton, T.J., Hoffmann, D.L., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kaiser, K.F., Kromer, B., Manning, S.W., Niu, M., Reimer, R.W., Richards, D.A., Scott, E.M., Southon, J.R., Staff, R.A., Turney, C.S.M., and van der Plicht, J. (2013) IntCal13 and Marine13 Radiocarbon Age Calibration Curves 0-50,000 Years cal BP. *Radiocarbon*, 55 (4) , 1869-1887.



第 27 图 曆年較正結果

2 山田遺跡出土炭化材の樹種同定

小林克也 (パレオ・ラボ)

1. はじめに

山口県下関市の山田遺跡から出土した炭化材の樹種同定を行なった。なお、同一試料を用いて放射性炭素年代測定も行われている（放射性炭素年代測定の項参照）。

2. 試料と方法

試料は、竪穴建物 SI01、SI02 から各 2 点、土坑 SK19 から 2 点、SK14 から 1 点、ピット SP21 から 1 点、計 8 点の出土炭化材である。遺構の時期については、SI01 が弥生時代中期後半、SI02 が弥生時代後期後半、SK19・14 SP21 は弥生時代中期と考えられている。

炭化材の樹種同定では、まず試料を乾燥させ、材の横断面（木口）、接線断面（板目）、放射断面（柁目）について、カミソリと手で割断面を作製し、整形して試料台にカーボンテープで固定した。その後イオンスパッタにて金蒸着を施し、走査型電子顕微鏡（KEYENCE 社製 VE-9800）にて検鏡および写真撮影を行なった。

3. 結果

第 6 表 山田遺跡出土炭化材の樹種同定結果

時 期	弥生時代 中期後半	弥生時代中期			弥生時代 後期後半	合計	
		遺構	SI01	SK19			SP21
マツ属複維管束亜属				1	1	2	
サクラ属					1	1	
クリ			1			1	
スダジイ		1			1	2	
散孔材			1			1	
広葉樹		1				1	
	合計	2	2	1	1	2	8

同定の結果、針葉樹ではマツ属複維管束亜属 1 分類群、広葉樹ではサクラ属とクリ、スダジイの 3 分類群の、計 4 分類群がみられた。マツ属複維管束亜属とスダジイが各 2 点で、サクラ属とクリが各 1 点であった。なお、試料 No.2 は節部で広葉樹までの同定、試料 No.7 は試料が微細で横断面しか採取できず、散孔材までの同定となった。同定結果を第 6 表に、一覧を第 7 表に示す。

以下に、同定された材の特徴を記載し、写真 3 に走査型電子顕微鏡写真を示す。

(1) マツ属複維管束亜属 *Pinus* subgen. *Diploxylon* マツ科 図版 1 1a-1c (No.5)

仮道管と垂直および水平樹脂道、放射柔細胞および放射仮道管で構成される針葉樹である。放射組織は放射柔細胞と放射仮道管によって構成される。放射仮道管の内壁の肥厚は鋸歯状で、分野

壁孔は窓状となる。

マツ属複維管束亜属には、アカマツとクロマツがある。どちらも温帯から暖帯にかけて分布し、クロマツは海の近くに、アカマツは内陸地に生育しやすい。材質は類似し、重硬で、切削等の加工は容易である。

(2) サクラ属 (広義) *Prunus* s.l. バラ科 図版1 2a-2c (No.3)

小型の道管が単独ないし数個、放射方向または斜め方向に複合してやや密に散在する散孔材である。道管は単穿孔を有し、内壁にはらせん肥厚がみられる。放射組織は上下端1列が直立する異性で、幅1～5列幅となる。

広義のサクラ属には、モモ属とスモモ属、アンズ属、サクラ属、ウワミズザクラ属、バクチノキ属がある。樹種同定ではモモ属とバクチノキ属以外は他のサクラ属と識別できないため、広義のサクラ属とはモモ属とバクチノキ属を除くサクラ属を指す。

(3) クリ *Castanea crenata* Siebold. et Zucc. ブナ科 図版1 3a-3c (No.6)

年輪のはじめに大型の道管が1～3列並び、晩材部では徐々に径を減じる道管が火炎状に配列する環孔材である。軸方向柔組織はいびつな線状である。道管は単穿孔を有する。放射組織は同性で、単列である。

クリは、北海道の石狩、日高地方以南の温帯から暖帯にかけての山林に分布する落葉中高木の広葉樹である。材は重硬で、耐朽性が高い。

(4) スダジイ *Castanopsis sieboldii* (Makino) Hatus. ex T.Yamaz. et Mashiba ブナ科 図版1 4a-4c (No.1)

年輪のはじめに大型の道管が断続的に並び、晩材部では径を減じた道管が火炎状に配列する環孔材である。軸方向柔組織はいびつな線状となる。道管は単穿孔を有する。放射組織は同性で、単列となる。

スダジイは暖帯から亜熱帯に分布する常緑高木の広葉樹である。重さと強さは中庸で、やや耐朽性があり、切削加工は困難ではない。

(5) 散孔材 Diffuse-porous wood

試料が微細で、横断面しか観察が行えなかった。小型の道管が単独ないし2～3個複合してやや密に散在する散孔材である。軸方向柔組織は周囲状となる。

(6) 広葉樹 Broadleaf-wood

道管は確認できたが、節部の試料であるため、材組織の歪みにより詳細な検討が行えず、広葉樹までの同定にとどめた。

4. 考察

弥生時代中期後半の SI01 の炭化材は、スダジイと広葉樹であった。試料は竪穴建物の中央土坑内から出土しており、焼けた建築材や燃料材の残渣の可能性が考えられるが、詳細は不明である。スダジイは堅硬な部類に属する樹種であり、薪炭材としても普通に利用される樹種である (伊東ほか, 2011)。

弥生時代中期の遺構では、SK19の炭化材は、クリと散孔材であった。用途は不明である。クリは堅硬な部類に属する樹種であり、薪炭材としても普通に利用される樹種である（伊東ほか，2011）。

またSP21はマツ属複維管束亜属であった。SP21は柱列SA04の一つであり、試料は焼けた柱材の可能性はある。

そしてSK14の炭化材はマツ属複維管束亜属であった。用途は不明である。マツ属複維管束亜属は真っすぐで加工性の良い樹種であり、薪炭材としても普通に利用される樹種である。

弥生時代後期後半のSI02の炭化材は、サクラ属とスダジイであった。試料は堅穴建物の床面から出土しており、焼けた建築材や燃料材の残渣の可能性が考えられるが、詳細は不明である。サクラ属とスダジイは堅硬な部類に属する樹種であり、薪炭材としても普通に利用される樹種である（伊東ほか，2011）。

今回同定された樹種は、いずれも遺跡周辺に生育可能な樹種であり、周辺に生育していた樹木が伐採利用されたと考えられる。

引用文献

伊東隆夫・佐野雄三・安部 久・内海泰弘・山口和穂（2011）日本有用樹木誌，238p，海青社。

第7表 山田遺跡出土炭化材の樹種同定結果一覧

試料 No.	出土遺構	種 類	樹 種	時 期	備考	年代測定番号
1	SI01	炭化材	スダジイ	弥生時代中期後半		PLD-39724
2	SI01	炭化材	広葉樹	弥生時代中期後半	節部	PLD-39725
3	SI02	炭化材	サクラ属	弥生時代後期後半		PLD-39726
4	SI02	炭化材	スダジイ	弥生時代後期後半		PLD-39727
5	SK14	炭化材	マツ属複維管束亜属	弥生時代中期		PLD-39728
6	SK19	炭化材	クリ	弥生時代中期		PLD-39729
7	SK19	炭化材	散孔材	弥生時代中期		PLD-39730
8	SP21	炭化材	マツ属複維管束亜属	弥生時代中期		PLD-39731

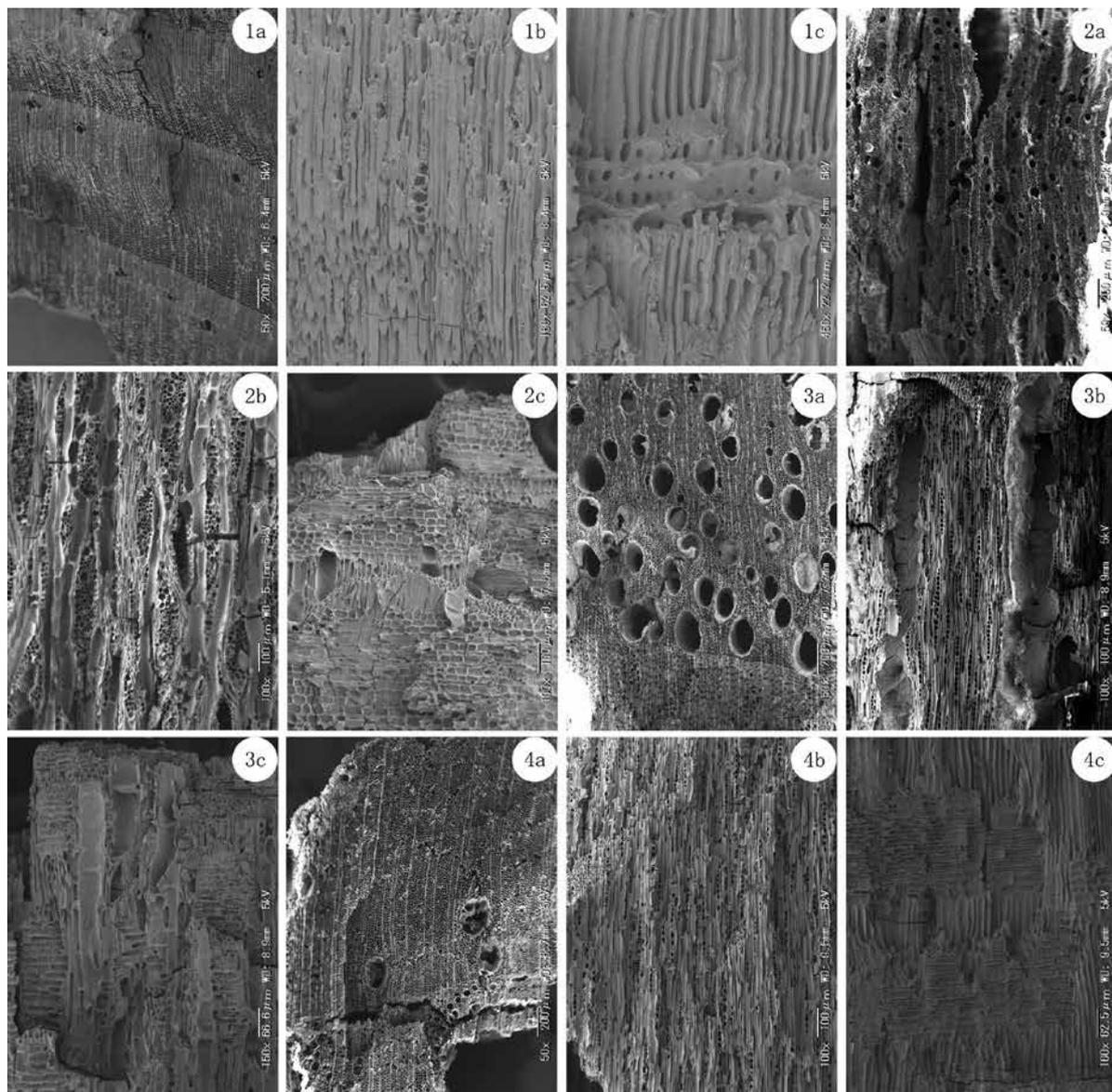


写真3 山田遺跡出土炭化材の走査型電子顕微鏡写真

1a-1c. マツ属複維管束亜属 (No. 5)、2a-2c. サクラ属 (No. 3)、3a-3c. クリ (No. 6)、4a-4c. スダジイ (No. 1)

a: 横断面、b: 接線断面、c: 放射断面

V 総括

今回の調査では竜王山麓の低丘陵地に弥生時代および中世後半から近世にかけての集落を確認した。調査区内北部（低位部分北側）では弥生時代中期と後期後半の竪穴建物それぞれ1棟、土坑、柱穴等の遺構を検出している。南東部（高位部分）では中世の掘立柱建物4棟をはじめ、土坑、柱穴等の遺構を確認した。南西部（低位部分南側）では弥生時代中期の土坑や中世の墓、柱穴を検出し、高位部分や北側の生活域からの流れ込みによって形成された遺物包含層の存在を確認している。

以下、過去の周辺遺跡調査所見を含め、弥生時代と中・近世の遺構・遺物に関わる情報を中心として本遺跡の調査成果を整理して記述する。

1 弥生時代の様相

先述（Ⅲ章-3）した縄文土器片1点および同時期の所産と考えられる石器類5点は、全て遺構外採集または遺構埋土上位での検出である。縄文時代以前の生活跡は調査区内には見られず、いずれも東方近隣山麓（高位）からの流入と考える。

本遺跡近隣西方平野部の南北に細長い広がりを見せる尾袋遺跡のうち、北方に所在する尾袋遺跡（田尻地区）の土坑からは、土器と共に赤色頁岩製の扁平打製石斧が複数点出土しているが、本遺跡では折損品1点を遺構外採集したに留まる。この遺物は弥生時代前期後半まで使用された畑作農耕具と考えられるが、山田遺跡では前期遺物を伴う遺構を検出しておらず、当時の生活は尾袋遺跡（田尻地区）を含め本遺跡周辺部で営まれていたと思われる。弥生時代中期の遺構は調査区の低位部分周辺に多く残存している。高位部と繋がる中央部の遺構が希薄なのは後世の段状削平によるもので、SI01（円形竪穴建物）や各土坑の深さからみると低位部も20～30cm以上削平されていることが推測される。

SK 7、9、14、19は出土遺物から弥生時代中期と判断する。個々の遺構からはそれぞれ炭化材が出土しており、一部の試料で加速器質量分析法（AMS法）による放射性炭素年代測定と樹種同定を行っている。SK19で検出した炭化材をAMS年代測定した結果、試料6:樹種クリは ^{14}C 年代2175 \pm 20yrBP、暦年較正用年代2175 \pm 19yrBP、試料7:樹種散孔材は ^{14}C 年代2180 \pm 20yrBP、暦年較正用年代2181 \pm 19yrBP、という数値が得られた。SK14出土の炭化材試料5:樹種マツ属複雑管束亜属も ^{14}C 年代2175 \pm 20yrBP、暦年較正用年代2176 \pm 19yrBPという数値が得られ、概ね同様の時期を示している（分析の詳細はV章参照）。

調査区北西部端で検出されたSK08の一括遺物の様相は、他の出土遺物に比べてやや遡ることから、山田遺跡で生活の痕跡が見られるようになるのは弥生時代中期前半頃と考える。SI01（円形竪穴建物）は出土の壺と高杯から判断すると弥生時代中期後半から後期前半頃の所産と言えよう。この建物は竪穴を掘った後に15～20cmの貼床を施しており、試料1・2は炉状の中央土坑から出土している。出土炭化材試料1:樹種スダジイは、 ^{14}C 年代2020 \pm 20yrBP、暦年較正用年代2021 \pm 19yrBP、試料2:樹種広葉樹は ^{14}C 年代2015 \pm 20yrBP、暦年較正用年代2017 \pm 19yrBPという数値を示しており、出土遺物の時期と大差はない。SI02（方形竪穴建物）は出土遺物から弥生時代後期後半の竪穴建物と判断する。周溝およびその高位部分から内部土坑へ直結する溝を備えており、更に排水溝として建物外まで伸びている。同時期の遺構である下七見遺跡I第12地区SB1-03に見られるように地形を生か

した排水機能を高めた建物であるが、1棟のみの発見のため、この時期に本遺跡周辺の一般的建物が同様の機能を備えたものであったか、それともこの1棟が特殊なものであったか判断しかねる。出土炭化材試料3:樹種サクラ属は、 ^{14}C 代 $2000 \pm 20\text{yrBP}$ 、暦年校正用年代 $2000 \pm 19\text{yrBP}$ 、試料4:樹種スダジイは、 ^{14}C 代 $1915 \pm 20\text{yrBP}$ 、暦年校正用年代 $1913 \pm 19\text{yrBP}$ という数値を示した。試料に幅があるのと出土土器量が少量のため AMS 年代との厳密な比較はできないが、少なくとも短期間に竪穴建物の平面プランが円形から方形に移行（または混在）した可能性がある。

調査区の低位部分のうち北側で検出した柱穴群は埋土から弥生時代と考えられるものが多いが、遺物のほとんどが弥生土器小片のため、時期判断は難しい。

次に、SI02の埋土上層で検出した磨製石剣について述べることにする。

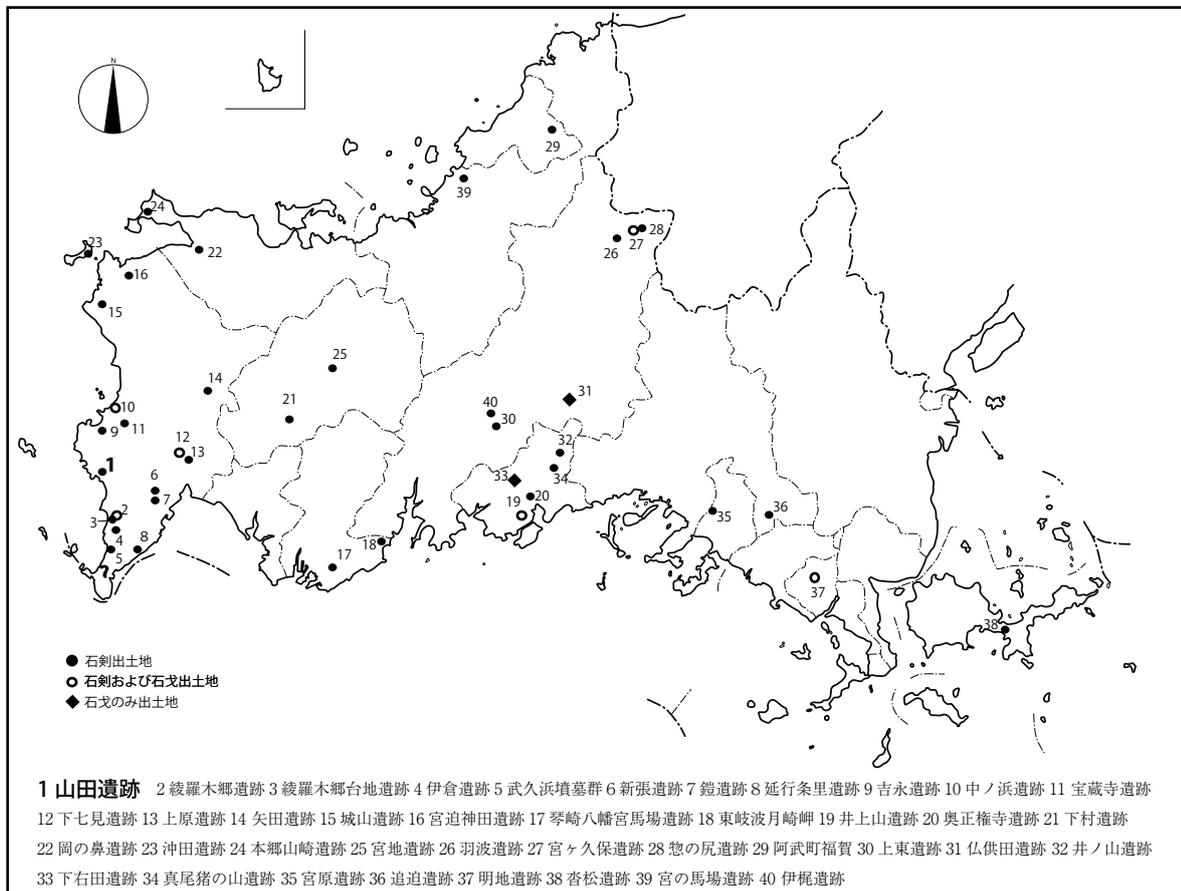
2 山田遺跡出土の磨製石剣

今回の調査で SI02 から石剣出土している。石剣については調査成果の項で既に述べたが若干の考察を行いたい。

本遺跡出土磨製石剣

本遺跡で出土した磨製石剣（以下、石剣）は全長（残存値）11.5cm、最大幅3.2cm、最大厚1.3cm、重さ59.5gである。凝灰岩製。丁寧な研磨による成形である。破損後の研磨により断面形状が変わり、にぶい菱形を呈する。

出土状況は弥生時代後期に比定される SI02 の埋土上層からの出土であり、流れ込み資料で SI02 に伴うものではない。周辺に弥生時代中期の遺構が存在するため、石剣の帰属時期は中期である可能性が高い。出土部位は剣身部で剣先部、基部の形態については不明である。県内の類似資料としては真



第 28 図 山口県の石剣・石戈出土遺跡分布図

尾猪の山遺跡出土石剣のように刃部と柄部をわずかな幅の減じで区別する石剣や、延行条里遺跡等で出土している有茎式の石剣がある。

本遺跡で出土した石剣の特筆すべき点は、破断面を再加工している点である。両端部が破損しており、剣先側の破断面は研磨を施し平坦面を作り、柄部側は斜めに折れた破断面を再研磨することで刃部を新たに作り、石剣本来の刃部両サイドをあえて生かさず研磨による刃潰しを行っている転用品である。刃潰しを行い、斜めに破断した面を新たに刃部に行っている点、そして身部中央に鑄を残すが剣先側両面の鑄は再加工の研磨でなくしている点は、使用する際に柄などに装着することを想定し、石鑿のような加工具として使用することを強く意識していたと考えられる。新しい刃部の欠損は再加工後の使用による可能性も否定できない。

県内出土石剣・石戈

これまでの調査や表面採集で現在、県内 40 か所で石剣及び石戈の出土例が確認できる(第 28 図)。石戈については県内 8 か所の出土例を確認することができ、主な出土地は下関市、山口市、防府市である。石剣は 38 か所の出土例が確認でき、石戈より石剣を多用していたことが現状において推察される。石剣については、調査数や各時期における遺跡の分布も影響していると思われるが、北部九州に隣接する響灘沿岸及び瀬戸内海側を中心に分布している。

出土状況については土坑、溝、包含層などから出土する例が多く、墓の副葬品及び供献品の可能性がある例は同市の武久浜墳墓群の 1 例のみである。

磨製石剣は武器や祭器として使用され、破損した状態で出土する例がほとんどである。破損の程度は一樣ではなく、役目を終えた石剣は意図的に破壊された可能性が高い。そして破壊後、本遺跡で出土した石剣のように再加工して、実用の石器に転用されるものがあつたことがわかる。

県内出土の類例資料との比較

県内において再加工を施し転用した石剣は本遺跡で出土したもののほかには、下関市豊田町所在の矢田遺跡と同市豊浦町所在の宝蔵寺遺跡の 2 例が確認されている。矢田遺跡の SD4 出土石剣は基部に近い剣身の破損品である。両端部は折損しているが、基部の方は強い擦り切り痕が残る。石剣としての刃部の片方を生かし、もう片方は刃潰し加工を行っている。手で握る際の手の保護を目的に片方の刃部の刃潰しを行い、片方の刃部を生かして切裁具としての機能をもたせた転用品の可能性はある。この点は本遺跡で出土した石剣とは再加工の意図が異なる。

また、宝蔵寺遺跡の SK24 出土石剣は剣身部から剣先部が残る破損品である。この例について報告書では「基部の欠損した資料で、剣身の両側辺の一部を加工し紐掛り状の凹部を造りだしている。石槍状に再利用したものであろうか。」とされる。

以上、県内出土の類例資料である。これら 2 例をみると矢田遺跡の例は切裁具として、宝蔵寺遺跡は石槍としての機能をもたせており、いずれも異なる意図で再加工を施し転用している。

加工具合をみると 2 例は折損程度に応じた最低限の再加工であることがわかる。しかし、本遺跡出土の石剣は最低限度に留まらず、更に意とする石器に丁寧に仕上げた印象を受ける転用品である。

県外出土の類例資料との比較

近県の例では福岡県で石剣が多数出土しており、祭器や一部副葬品として使用されている例があ

り、再加工を施し転用する例も本県に比べて多く確認できる。福岡県行橋市竹並遺跡や北九州市長野小西田遺跡などにおいて、破断した剣先側を研磨による再加工を行い工具に転用した例があるほか、北九州市長野尾登遺跡では石剣の破損後に石鏃に再利用した可能性が考えられる例がある。また、京都府市田斎当坊遺跡出土石剣から磨製石剣を意図的に分割して扁平片刃石斧に加工した可能性を有する例^{註1}などの類例がみられる^{註2}。先に述べたように県内においては類例が少なく、3例すべて北部九州に隣接する下関市に集中する。下関市は他地域に比べて石剣が出土している遺跡が集中しており、各遺跡から出土する石剣の本数が多い。同市には下七見遺跡のような石剣製作拠点的な遺跡があり、このことは同市が他地域にくらべて石剣の需要が多かったことに結びつく。石剣に再加工を施し転用する例は響灘及び北部九州内の遺跡で確認できるが、県内東部地域ではこのような類例がみられない。響灘沿岸および周辺地域は石剣を多用する北部九州の文化圏にある。本遺跡の再加工が施された石剣も北部九州から影響を受けたことが想定できる。

本遺跡で出土した石剣は県内の他の2例とは異なり、折損した石剣を丁寧に新たな石器に仕上げていることが特徴である。これは、武器や祭器として役目を終えた石剣が、その後どのように扱われたかという多様性を考える上で重要な情報をもたらすものであり、今後の類例の増加が待たれる。

3 中世から近世の様相

調査区内では、古墳時代から古代にかけての遺構・遺物の発見はなく、弥生時代後期後半以降に生活が展開されるのは中世になってからである。遺構外採集も含め、13～18世紀の遺物を検出・採集している。種類も多様で、本遺跡およびその周辺で継続的に集落が営まれていたことが伺える。

中世の遺構・遺物

中世の遺構としては掘立柱建物4棟と柱穴列4列を確認したほか、数基の土坑を検出している。しかし、出土した遺物の量は極めて少ない。日常的な調理具はほとんどなく、祭祀・宴会を思わせるような廃棄もない。中世の出土遺物で注目されるのは、青花2点（漳州窯1点、景德鎮窯1点）や朝鮮王朝陶器1点である。これらの遺物は一般的に流通するものではなく、大内氏館跡をはじめとする城館や寺院関連遺跡、港町として物資を集積し内陸部へと流通させる側面を持つ地域等で多く出土する。また第29図に示すように、鞆羽口1点と数点の鉄滓も、調査区一部の範囲で集中して出土している。炉壁や焼土、被熱した遺構等は確認できなかったが、直ぐ近くに鍛冶関連施設があったことは容易に想像できる。貿易陶磁器を有し鍛冶職人を伴うこれらの条件は、本遺跡が一般的な集落とはやや異なる性格をもつ集落であったことを示唆するものである。

中世墓ST01

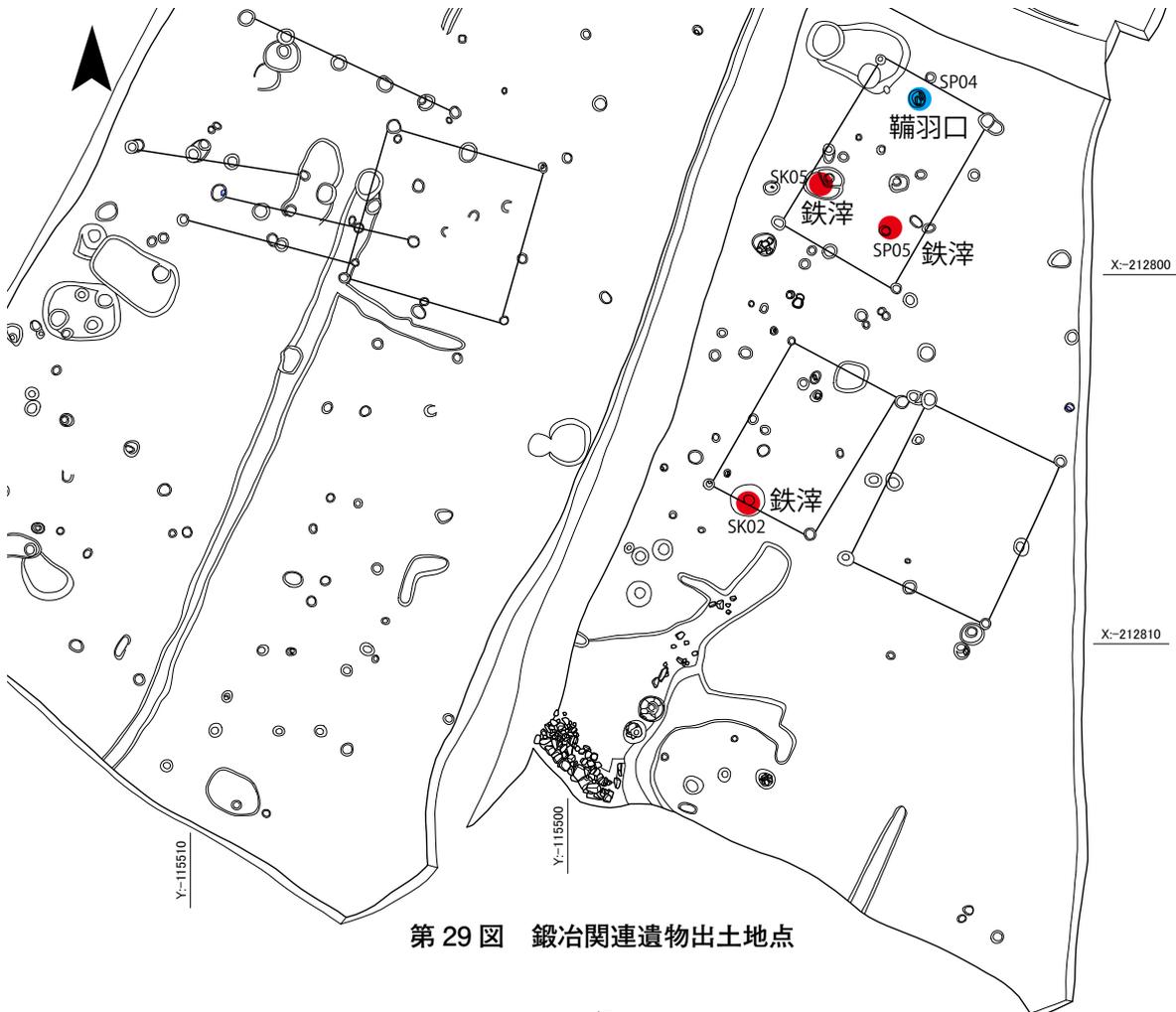
ST01は上部が削平された状態で検出されたため攪乱の可能性もあるが、現状では土師器杯2点と銅銭7枚が出土した。歯も墓内の北部分から見つかっている。性別不明だが歯冠には咬耗が認められ、成人の歯とされる。ごく僅かではあるが銅銭のものと考えられる緑青の付着も確認されたことから北枕、かつ土坑規模が狭小のため屈葬であったと考えられている。

出土した土師器杯は2点とも器壁はやや厚めで、直線的に立ち上った後にやや屈曲して端部に至るもの（口径10.2cm：推定、器高3.8cm）と内湾気味の体部のもの（口径10.0cm：推定、器高2.65cm）とがある。後者は小片で法量の比較に適さないと判断し、残度の高い前者で近辺の出土例を探ったところ、長門

国府（忌宮神社地区）LW001の出土品の中に比較的近い器形・法量の杯を確認した。しかしLW001の資料は年代観が未確定であるため^{註3}、大内氏館跡出土土師器や防府市域出土土師器等も含めて年代を考察してみる。ST01出土の土師器杯は大内0式と近似し、大内式の年代観では14世紀前半から中頃となる^{註4}。また防府市域でも近年、阿弥陀寺基壇出土資料について13～14世紀の土師器杯の年代が検討されており、その過程で考古学的見解と自然科学分析の結果がほぼ一致している^{註5}。①阿弥陀寺基壇出土の杯（13世紀後葉ないし14世紀初頭）の口径は10.5cm～12.4cmで器壁は厚め、②周防国府SE3254出土の杯（14世紀前半に廃絶した遺構から出土）は底面からの立ち上がりが緩やかで体部が直線的、かつ口径に比べて器高が高くなり、③中津居館跡SK100310出土の杯（14世紀前半）は、ロクロ目が顕著、平均法量（口径12.2cm、底径6.2cm、器高4.0cm）はやや大きくなること示された。本遺跡ST01出土杯の口径は10.2cmと小ぶりで、器壁は厚めである。体部は直線的に立ち上がり、器高は3.8cmと、口径に対して高めである。また、ロクロ目はやや顕著な傾向にある。これらの特徴から、ST01出土の杯は②から③への過渡期頃と考えられ、14世紀前半に比定できる。

ST01は単独で見つかっており、周辺建物に伴う屋敷墓と想定する。造墓意識は古墳時代から引き継がれているが、金銭的負担が大きいため平安・鎌倉時代の屋敷墓造営は上流階級層によるものが殆どだった。室町時代に入ると庶民にも造墓の風習が広がっていったが、同時にその頃から屋敷墓造営は衰退をはじめ、集団墓地造営（集落からやや離れた場所に造墓）に移行する^{註6}。

県内の中世屋敷墓における銭貨埋納例は少なく、鑄銭司大歳遺跡BP4（鎌倉中期）で2枚、上り熊遺跡ⅢST604（14～15世紀）で1枚、玉祖遺跡BP-5（室町前半）で7枚、植島遺跡ST1（15世紀）で



第29図 鍛冶関連遺物出土地点

5枚、船頭遺跡Ⅱ ST03 (15～16世紀) で6枚、市場遺跡Ⅱ ST2 (15世紀後半)、ST1 (16世紀) でそれぞれ7枚、神正遺跡 (A地区) ST2 (中世) で9枚の8例を確認している^{註7}。

やや先行する鑄銭司大歳遺跡、および上り熊遺跡Ⅲの例を除くと埋納枚数が増えるが、その中でも山田遺跡ST01の例は比較的早い段階にあたる。埋納枚数は当時の思想観念との関係も考えられるが、定かではない。今後、更なる銭貨埋納例の発見が待たれる。

中・近世の埋甕と近世陶磁器

調査区内東側 (高位部) では16世紀の埋甕 (瓦質土器) 1基、18世紀の埋甕 (土師器：佐野焼) 2基が出土している。内外部に目立った有機物等の付着は見られないため、水溜用の甕として使用したと考える。そのほかには17～18世紀の萩焼・肥前陶磁器等が出土しており、18世紀の終盤頃まで集落が存続したと考えられる。調査地にあたる箇所は、集落衰退後に果樹園として改耕され、今日に至っている。山田遺跡は、平野部を見渡せる好立地にあり、中世においては鍛冶関連業を行いつつ、流通品を消費しうる拠点集落を形成していたと考えられる。今回の調査成果は、響灘沿岸、こと吉見地区における文献史料を裏付けする貴重なものとなった。

註

- 1 野島 永 2005「分割された剣」『考古論集 川越哲志先生退官記念論文集』川越哲志先生退官記念事業会
- 2 県内防府市の井ノ山遺跡において青銅器の鑿への転用例もみられる
- 3 中原周一 2010「長門国府跡忌宮神社地区出土中世土器の評価－土師器の坏・皿の分類を通して－」『還暦、還暦？、還暦！－武末純一先生還暦記念献呈文集・研究集－』
- 4 北島大輔 2017「中世山口の遺物編年－「大内式」の補訂－」山口県埋蔵文化財調査報告第118集『大内氏関連街並遺跡10』－第9・29次調査－山口県教育委員会
- 5 公益財団法人山口県ひとつくり財団 山口県埋蔵文化財センター 2018「V－3出土遺物の年代」『阿弥陀寺』－上坂本東大川防安・通常砂防工事に伴う埋蔵文化財調査－山口県埋蔵文化財センター調査報告第100集
- 6 吉田奈稚子 2011「中世の葬送と供養観の展開」『三重大学史』第11号三重大学人文学部考古学・日本史学・東洋史学研究室
- 7 井上広之 2017「山口県における埋葬習俗の様式変化について」『山口県埋蔵文化財センター紀要－平成28年度－「陶埴」第30号』

参考文献

- 1 下関市教育委員 1977『秋根遺跡』
- 2 下関市教育委員 1978『長門国府 長門国府周辺遺跡調査報告Ⅱ』
- 3 竹並遺跡調査会編 1979『竹並遺跡』東出版 寧楽社
- 4 山口県教育委員会 1983『玉祖遺跡・西小路遺跡』
- 5 山口県教育委員会 建設省山口工事事務所 1984 山口県埋蔵文化財調査報告第75集『鑄銭司 上辻・大歳・今宿西－山口市鑄銭司所在の集落遺跡－』
- 6 下関市教育委員会 1985『吉母浜遺跡』
- 7 財団法人山口県教育財団 山口県教育委員会 1986 山口県埋蔵文化財調査報告第92集『田畑遺跡』
- 8 神鋼興産株式会社 下関市教育委員 1988『長門国分寺 長門国府周辺遺跡調査報告Ⅳ』
- 9 菊川町教育委員会 1989『下七見遺跡Ⅰ』
- 10 財団法人山口県教育財団 山口県教育委員会 1992 山口県埋蔵文化財調査報告第149集『市場遺跡Ⅱ 宮添遺跡』
- 11 豊浦町教育委員会 ホテル小松亭・伊藤隆造 1993『宝蔵寺遺跡－山口県豊浦郡大字川棚字宝蔵寺地内－』
- 12 財団法人山口県教育財団 山口県教育委員会 1995 山口県埋蔵文化財調査報告第178集『船頭遺跡Ⅱ』
- 13 財団法人山口県教育財団 山口県教育委員会 1997 山口県埋蔵文化財調査報告第183集『植島遺跡』
- 14 財団法人山口県教育財団 山口県埋蔵文化財センター 阿知須町教育委員会 1998 山口県埋蔵文化財センター調査報告第8集『神正遺跡 (A地区) 赤迫遺跡 (A地区)』
- 15 財団法人北九州芸術文化事業団埋蔵文化財調査室 2000 北九州埋蔵文化財調査報告書第248集『長野小西田遺跡－北九州総合運動公園建設に伴う埋蔵文化財調査報告2－』
- 16 下関市教育委員会 2001『長門国府跡 (長門国府跡周辺遺跡群第12次発掘調査)』
- 17 財団法人山口県教育財団 山口県埋蔵文化財センター 2002 山口県埋蔵文化財センター調査報告第32集『武久浜墳墓群』
- 18 財団法人山口県教育財団 山口県埋蔵文化財センター 2003 山口県埋蔵文化財センター調査報告第35集『矢田遺跡』
- 19 財団法人山口県ひとつくり財団 山口県埋蔵文化財センター 2005 山口県埋蔵文化財センター調査報告第48集『井ノ山遺跡』
- 20 財団法人山口県ひとつくり財団 山口県埋蔵文化財センター 2006 山口県埋蔵文化財センター調査報告第54集『尾袋遺跡 (田尻地区)』
- 21 愛媛大学法文学部考古学研究室編 2008『大陸系磨製石器論－下條信行先生石器論叢集』下條信行先生石器論叢集刊行会
- 22 財団法人山口県ひとつくり財団 山口県埋蔵文化財センター 2008 山口県埋蔵文化財センター調査報告第64集『尾袋遺跡Ⅱ』
- 23 寺前直人 2010『武器と弥生社会』大阪大学出版会
- 24 財団法人山口県ひとつくり財団 山口県埋蔵文化財センター 2010 山口県埋蔵文化財センター調査報告第73集『上り熊遺跡Ⅲ』
- 25 財団法人北九州芸術文化事業団埋蔵文化財調査室 2011 北九州埋蔵文化財調査報告書第457集『長野尾登遺跡第2地点 (M3・M5区－長野緑地整備事業に伴う埋蔵文化財調査報告書18－)』
- 26 岩国市教育委員会 2012 岩国市調査報告第1集『中津居館跡 (旧加陽和泉守居館跡)』
- 27 防府市教育委員会 2015『周防国府跡発掘調査報告4－国府南限域の調査－』
- 28 公益財団法人山口県ひとつくり財団 山口県埋蔵文化財センター 2016 山口県埋蔵文化財センター調査報告第96集『中ノ浜遺跡』
- 29 公益財団法人山口県ひとつくり財団 山口県埋蔵文化財センター 2017 山口県埋蔵文化財センター調査報告第99集『中ノ浜遺跡』

図 版



調査区（手前）と響灘

図版 2



調査区と県道下関川棚線（写真右側）



調査区遠景（南西上空から）



調査区と竜王山（正面奥）



調査区全景

図版 4



調査区全景（北上空から）



調査区全景（西上空から）



調査区北部



調査区南部

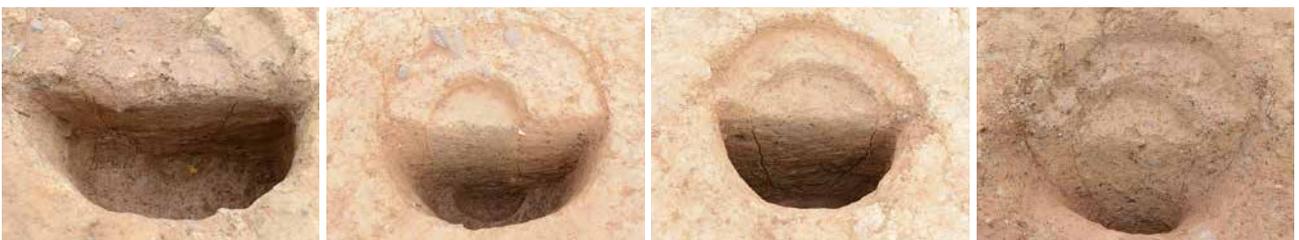
図版 6



SI01 完掘状況（西から）



SI01 完掘状況（上空から）



主柱穴 A

主柱穴 B

主柱穴 C

主柱穴 D

SI01 主柱穴土層断面



SI02 完掘状況（北から）



SI02 完掘状況（西から）

図版 8



SI02 および付随排水溝完掘全景



SI02 東主柱穴土層断面（北から）



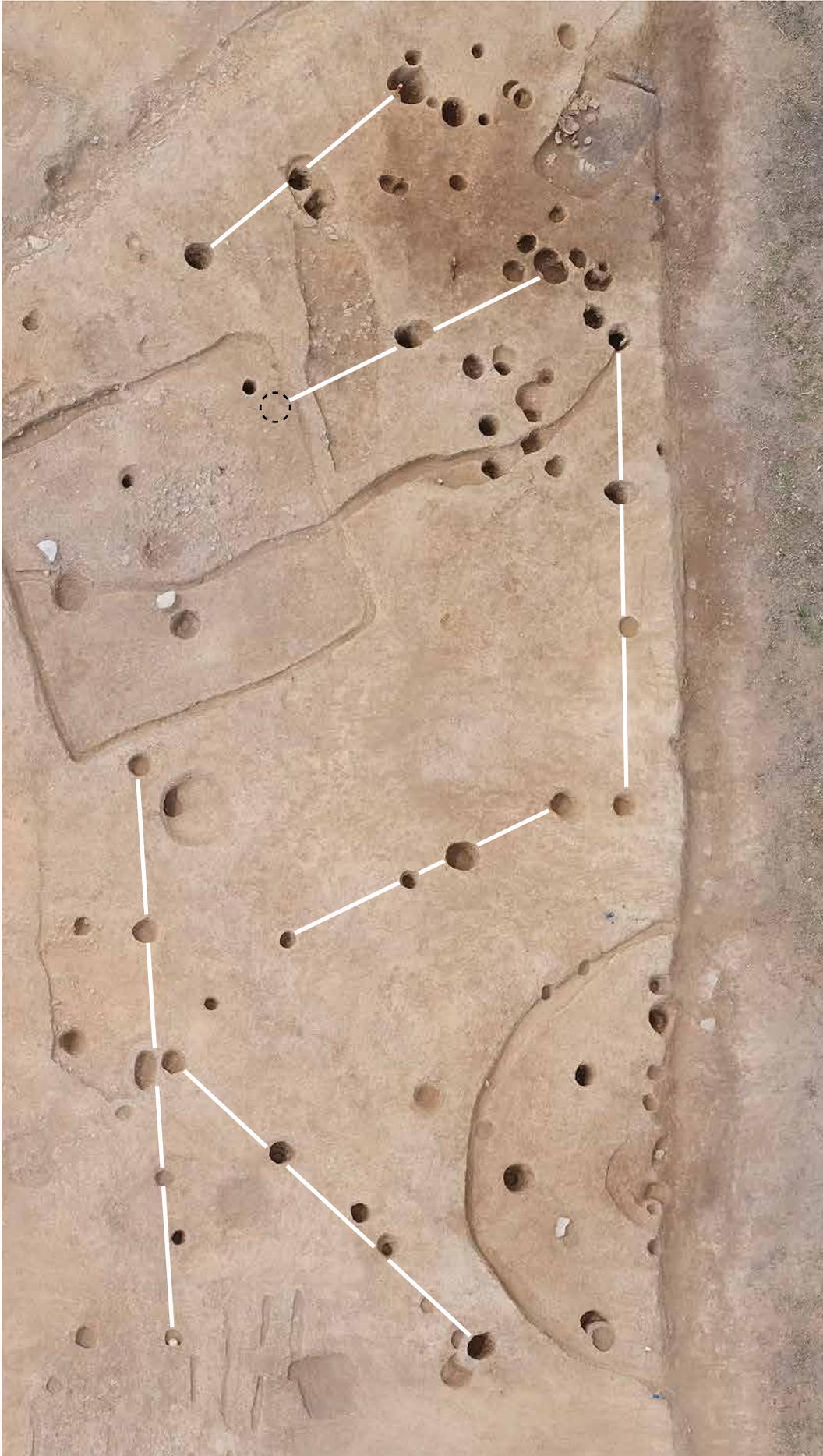
SI02 西主柱穴土層断面（北から）



SI02 石剣出土状況（南から）



SI02 砥石出土状況（北から）



SA01 ~ 06 完掘状况

図版 10



SK19 遺物出土状況（北から）



SK19 台石・弥生土器出土状況（北から）



SK19 弥生土器出土状況（北から）



SK08 弥生土器出土状況（北から）



SK08 弥生土器出土状況（部分北から）

図版 12



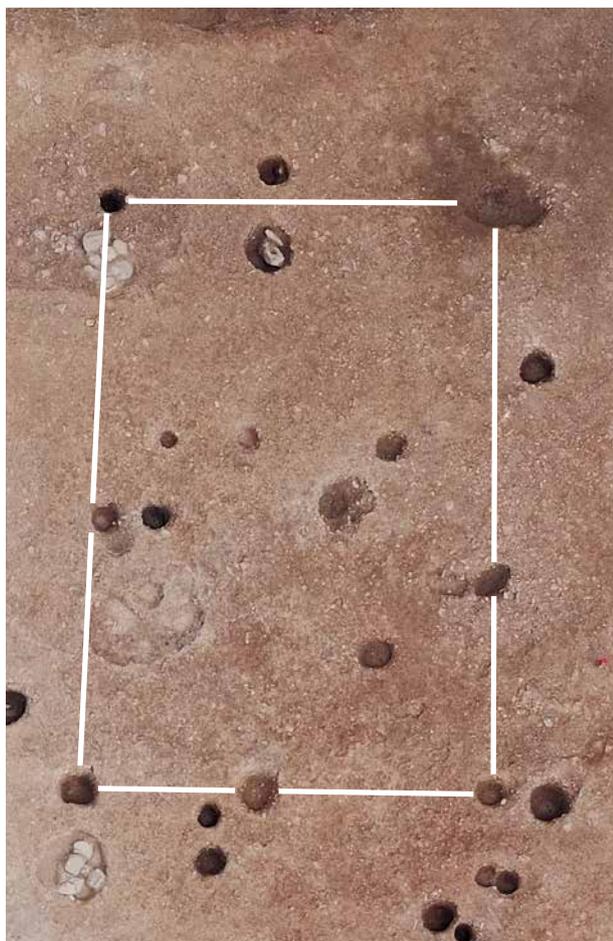
SK07 完掘状況（東から）



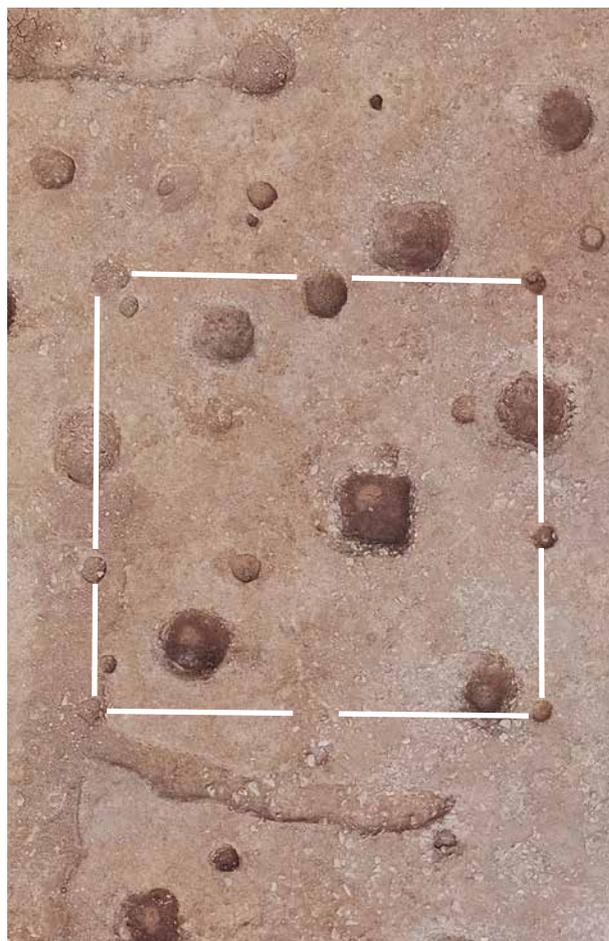
SK09 完掘状況（西から）



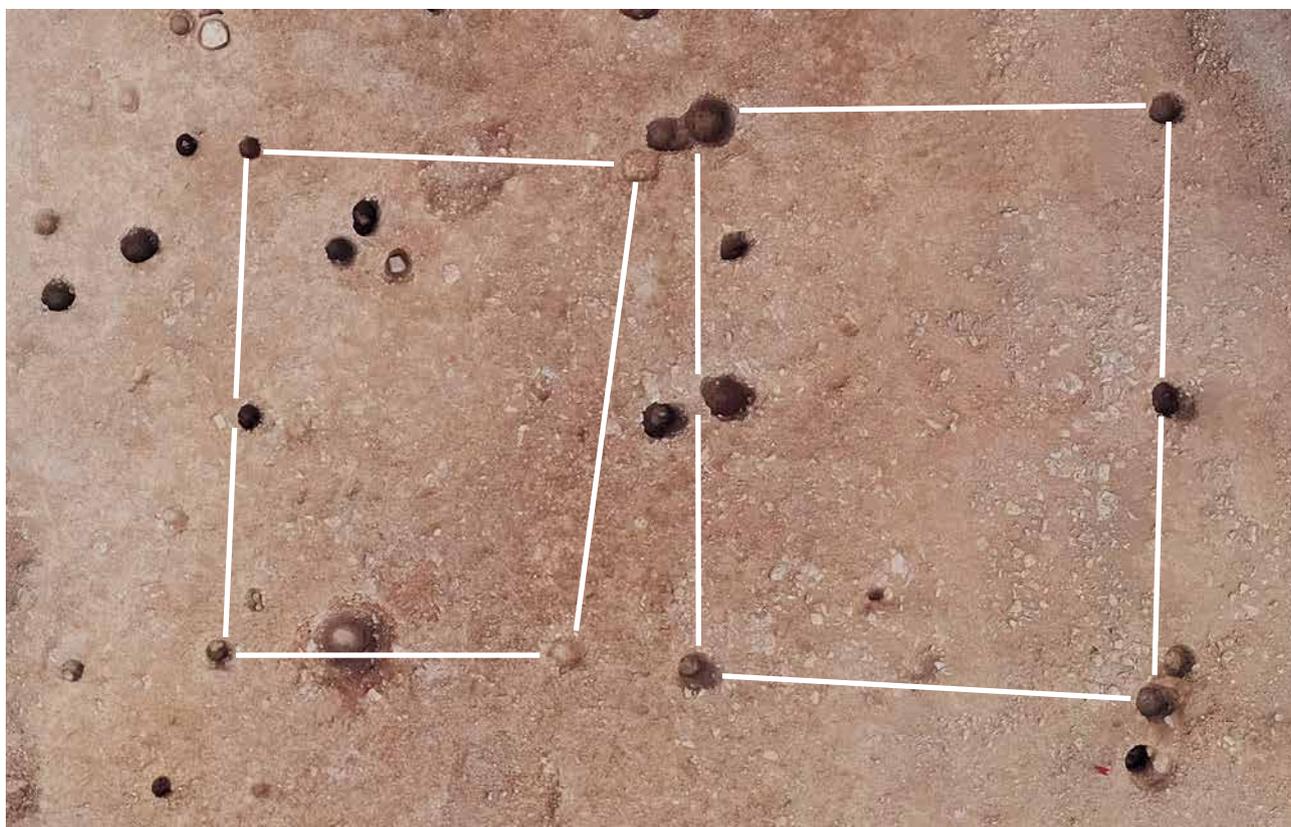
SK14 完掘状況（東から）



SB01 完掘状况

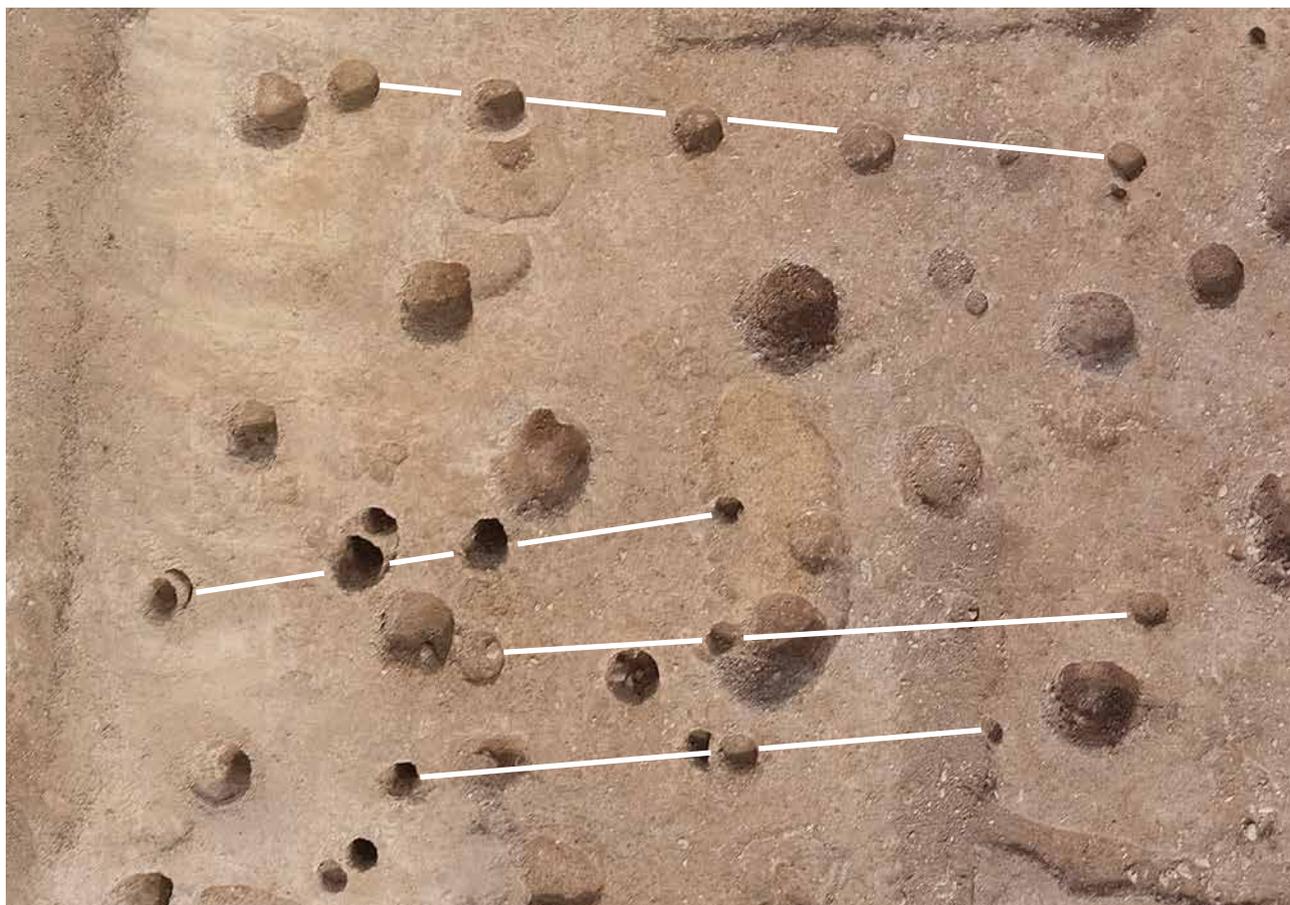


SB04 完掘状况



SB02・03 完掘状况

図版 14



SA07 ~ 10 完掘状況



SK03・21 完掘状況（西から）



SK03 青花皿出土状況



SK01 朝鮮王朝陶器出土状況（西から）



SP04 鞆羽口出土状況



ST01 土師器杯・銅銭出土状況（南から）



ST01 土師器杯出土状況（東から）



ST01 銅銭出土状況（東から）

溝状遺構群完掘状況



SK22 礫充填状況 (南から)



SK02 礫充填状況 (北から)



SX02・03 検出状況（西から）



SX02 埋甕出土状況（西から）



SX03 埋甕出土状況（西から）



SX02 埋甕完掘状況（西から）



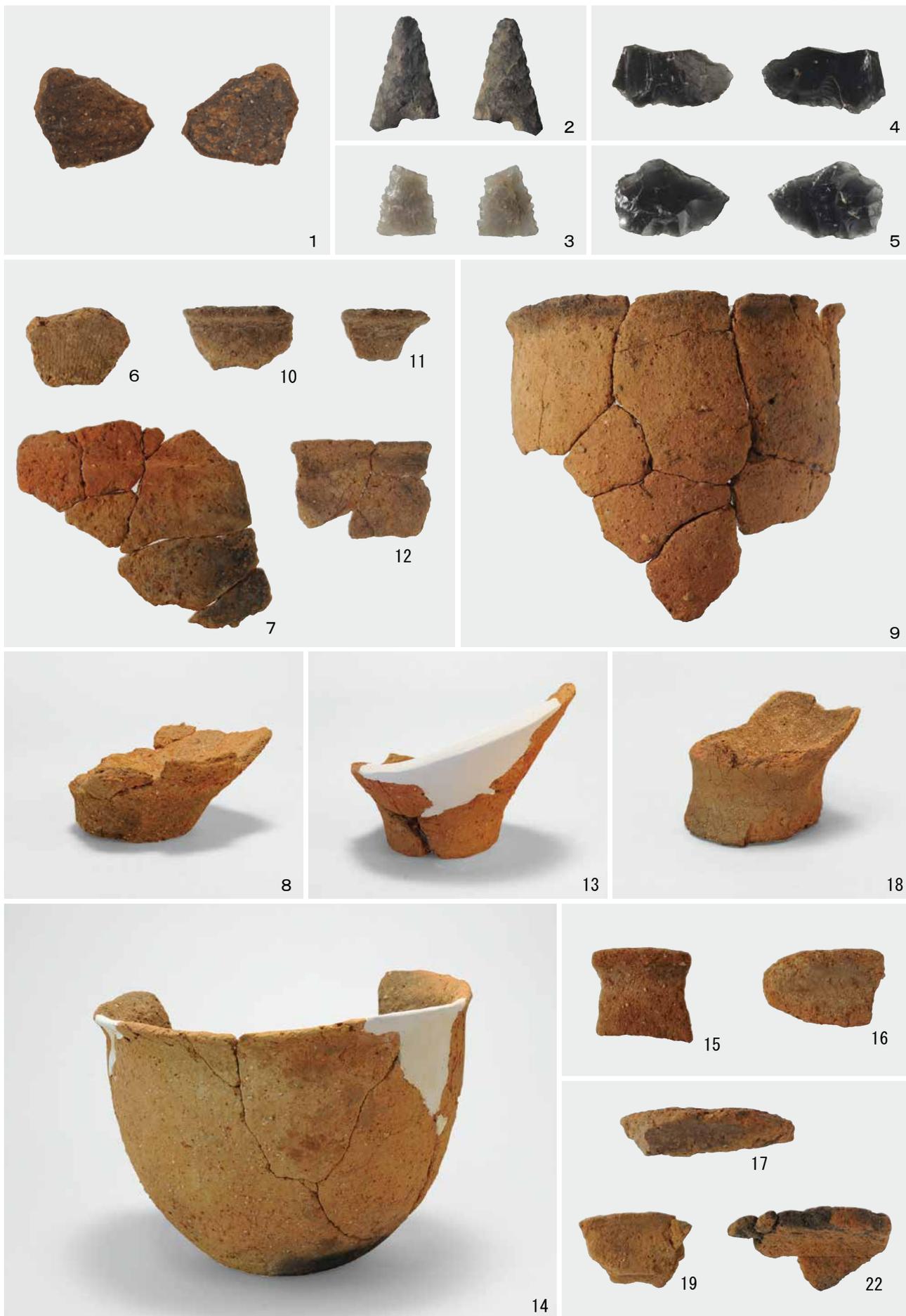
SX03 埋甕完掘状況（西から）



SX01 ~ 04 完掘状況

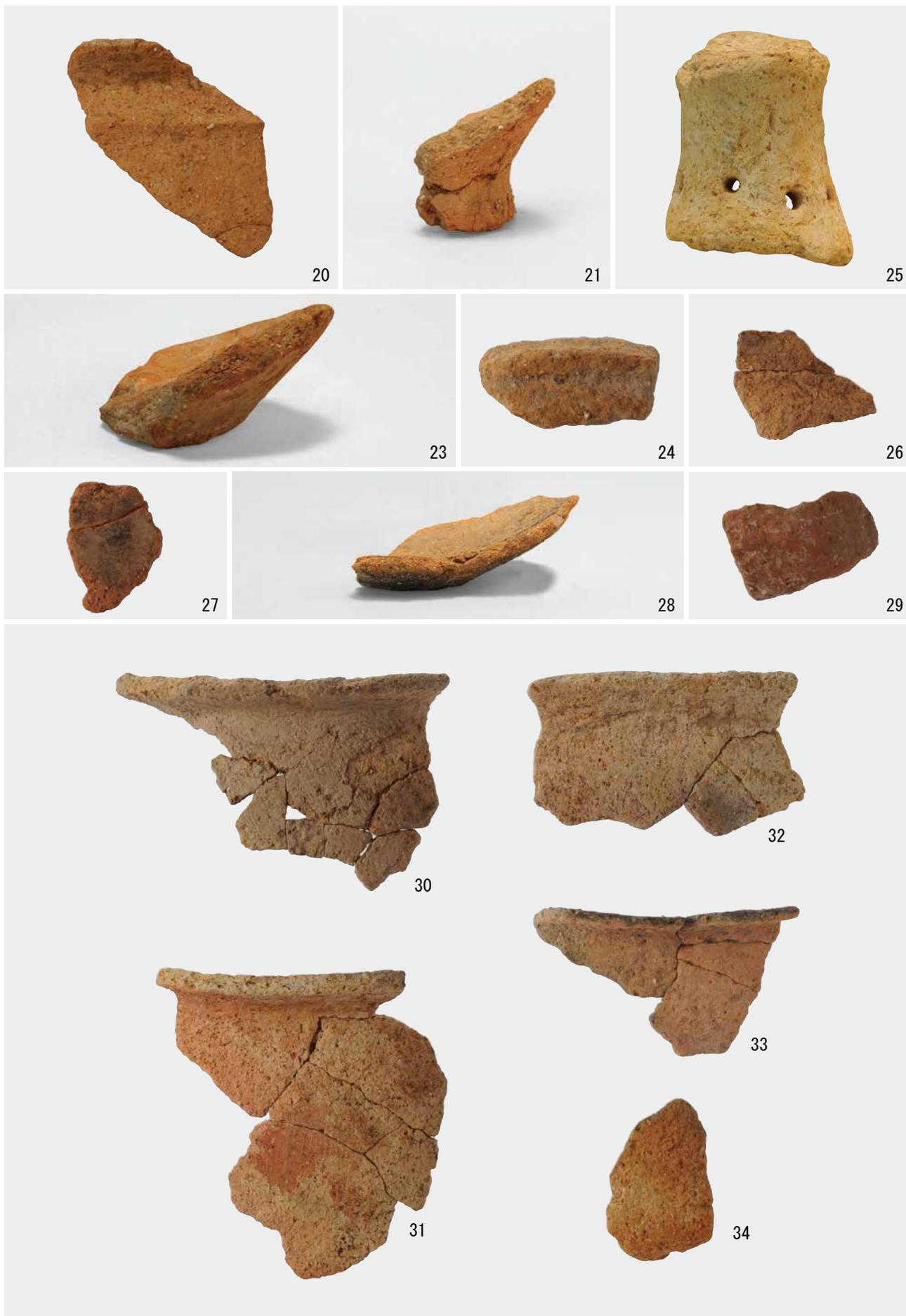


SX04 石積部分 (西から)



山田遺跡出土遺物 (1)

图版 20



山田遺跡出土遺物（2）



山田遺跡出土遺物 (3)



山田遺跡出土遺物（4）



60



61

62



63



68



64



65



66

67



69

山田遺跡出土遺物 (5)

图版 24



山田遺跡出土遺物（6）

報告書抄録

ふりがな	やまだいせき
書名	山田遺跡
副書名	
巻次	
シリーズ名	山口県埋蔵文化財センター調査報告
シリーズ番号	第105集
編集著者名	岩崎仁志 井上広之 塚本史晃
編集機関	山口県埋蔵文化財センター
所在地	〒753-0073 山口県山口市春日町3番22号 TEL 083-923-1060
発行年月日	西暦2020年3月19日（令和2年3月19日）

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
やまだいせき 山田遺跡	しものせきし 下関市 おおあざ 大字 よしみしも 吉見下	352012		34° 04' 32"	130° 54' 55"	20190510) 20191029	1400	県道改良

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
山田遺跡	集落	弥生時代 室町時代	竪穴建物 2棟 掘立柱建物 4棟 柱穴列 10条 土坑 22基 柱穴 約300個 墓 1基 その他の遺構 4基	弥生土器 土師器 瓦質土器 輸入陶磁器 国産陶磁器 銅銭 鉄滓 等	弥生時代の円形竪穴建物および方形竪穴建物を検出 再加工した石剣の一部、石包丁が出土

要約	<p>山田遺跡は竜王山麓の低丘陵先端部に立地する、弥生時代中期～後期および中・近世の集落遺跡である。</p> <p>弥生時代中期後半の竪穴建物1棟、後期後半の方形竪穴建物1棟、柱穴列、土坑等を検出し、弥生土器や石器類が出土した。</p> <p>中世においては掘立柱建物4棟を復元したほか、柱穴列、土坑等を検出した。屋敷墓からは銅銭7枚、土師器杯2点、歯が出土した。その他、土坑や柱穴から、鍛冶関連遺物、中国陶磁器、朝鮮王朝陶器が出土した。</p> <p>近世では埋瓦遺構を検出し、谷状の遺構ほかから萩焼や肥前陶磁器が出土した。</p>
----	---

山口県埋蔵文化財センター調査報告 第105集

山田遺跡

2020年3月19日

編集・発行 公益財団法人山口県ひとつくり財団
山口県埋蔵文化財センター
〒753-0073 山口県山口市春日町3番22号

印刷 児玉印刷株式会社
〒755-0008 山口県宇部市明神町3丁目4番3号